

— 一般国道175号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

浄 谷 遺 跡
南 山 古 墳 群
玉津田中遺跡南大山地点

1993.3

兵庫県教育委員会

— 一般国道175号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

きよ たに 遺 跡
浄 谷 遺 跡
みなみ やま 古 墳 群
南 山 古 墳 群
たま つ た なか みなみ おお やま
玉津田中遺跡南大地点

1993.3

兵庫県教育委員会

例 言

1. 本書は「浄谷遺跡」・「南山古墳群」・「玉津田中遺跡南大地点」（以下南大地点とする。）の報告書である。この3遺跡は、一般国道175号線小野バイパス建設工事に伴って建設省近畿地方建設局兵庫国道工事事務所の依頼によって発掘調査を実施した。
2. 本書に掲載した挿入図のうち浄谷遺跡の第1・2図、南山古墳群の第1図、南大地点の第1図は国土地理院発行の1/25000の地図をもとに作成したものである。
3. 遺構図面・遺構写真については現場で各担当職員が実測または撮影した。但し、浄谷遺跡と南山古墳群は空中写真撮影を行った。浄谷遺跡は関西航測に委託しバルーンによる撮影を行い、南山古墳群は測量エンジニアリングに委任した。
4. 遺物写真については鶴サンスタジオに委託した。
5. 本書で用いた遺物番号は各遺跡ごとに統一し、本文・挿入図・写真とも一致している。
6. 整理作業は平成3・4年度の2箇年にわたって行った。
7. 本書の執筆分担は目次に掲載した。編集は浄谷遺跡を山上雅弘、南山古墳群を別府洋二、南大地点を多賀茂治が行い、全体の編集は中川渉が、表貝冴子の協力を得て行った。
8. 整理作業は以下のような分担で行った。遺物実測・トレースー表貝冴子・岡田依理子（但し、石器は藤田淳）、拓本一表貝・水戸美美子、遺物接合・復元二階堂康・早川亜紀子・水戸・蓮米洋子・奥野春枝、ネーミング・接合一西原美知代・光澤鈴子・伊藤ミネ子・川上啓子・衣笠雅美・長谷川洋子・家光和子・林寿珠子・江口初美
9. 発掘調査によって得た遺物・遺構図・写真などの資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）および魚住分館（明石市魚住町清水字立合池ノ下630-1）に保管している。
10. 浄谷遺跡の分析・鑑定については以下の方々に依頼した。柱根の樹種同定については、京都大学名誉教授島地謙、土壌の脂肪酸分析については帯広畜産大学中野益男・福島道弘、顕ミコーシヤ総合科学研究所中野寛子・明瀬雅子・長田正宏の各氏に依頼した。
11. この他、調査に際して以下の方々の協力を得た。記して感謝いたします。
浄谷遺跡一高井梯三郎（尻馬考古資料館）・西田猛（小野市教育委員会）・立花聡（加西市教育委員会）・岸本一郎（西脇市教育委員会）・森下大輔（加東市教育委員会）
南山古墳群一西田猛・小川真理子・中西信（小野市教育委員会）（順不同・敬称略）

各遺跡の概要

遺跡名	所在地	期間	面積	調査主体	担当者	補助員	調査番号
小野浄谷遺跡 (確認調査)	小野市浄谷町字地蔵池の下 ・西門・土山の下・石丸・ 寺敷前	昭和62年2月25日 ～3月13日	—	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課	技術職員 平田 博幸 技術職員 山上 繁弘	奥野 和宏	890066
小野浄谷遺跡 (全面調査) A地区 B地区 C地区	小野市浄谷町字地蔵池の下 小野市浄谷町字赤藁前 同上	昭和62年5月7日 ～7月4日	6720㎡	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課	主任 大平 茂 技術職員 平田 博幸 技術職員 藤田 淳 技術職員 山上 繁弘	田中 謙 小谷 五郎	870005
南山古墳群 (確認調査)	小野市市場町字南山 526・340	昭和63年度	—	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課	主任 池田 正男 主任 吉田 岸 技術職員 平田 博幸 技術職員 西口 圭介	—	—
南山古墳群 (全面調査)	同上	平成元年8月9日 ～10月25日	2001㎡	兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所	主任 西口 和彦 技術職員 荏野 淳二	小谷 五郎 小谷 義男	890071
玉津田中遺跡 南入山地点 (確認調査)	神戸市西区玉津町田中 字南大山	平成2年1月16日 ～1月17日	—	兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所	主任 大平 茂	田中 謙	890120
玉津田中遺跡 南入山地点 (全面調査)	同上	平成2年4月19日 ～5月11日	640㎡	兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所	技術職員 中川 孝 技術職員 多賀 茂治	田中 謙 芳島麻津子 藤本 敏次	900001

(職員職名はいずれも調査当時)

本文目次

浄谷遺跡

第1章 概要	(山上雅弘) ...	1
第2章 遺跡の環境	(大平 茂)	
第1節 地理的環境		3
第2節 歴史的環境		3
第3章 A地区の調査		
第1節 概要	(藤田 淳) ...	7
第2節 遺構	(藤田) ...	7
第3節 遺物	(平田博幸) ...	17
第4章 B地区の調査	(藤田)	
第1節 概要		21
第2節 遺構		21
第5章 C地区の調査	(山上)	
第1節 概要		25
第2節 遺構		26
第3節 遺物		59
第4節 小結		77
第6章 その他の遺物		
第1節 瓦	(大平) ...	87
第2節 石器・石製品	(藤田) ...	91
第3節 金属器	(藤田) ...	93
第7章 まとめ	(山上) ...	94

分析・鑑定

小野浄谷遺跡の土壌に残存する脂肪の分析	96
輪ズコーシ+総合科学研究所 中野寛子・明瀬雅子・長田正宏	
帯広畜産大学生物自然科学科 中野益男・福島道広	
小野浄谷遺跡出土柱根の樹種	103
京大大学名誉教授 高地 謙	

南山古墳群

(別府洋二)

第1章 概要

第1節 遺跡の環境	105
第2節 調査に至る経緯とその経過	108

第2章 A地区の調査

第1節 概要	109
第2節 遺構	112

第3章 B地区の調査

第1節 概要	123
第2節 遺構	123

第4章 遺物

第1節 概要	127
第2節 古墳出土の遺物	127
第3節 その他の遺物	131

第5章 まとめ	133
---------------	-----

第1章	遺跡をとりまく環境	
第1節	地理的環境	137
第2節	歴史的環境	137
第2章	調査の方法と経過	
第1節	確認調査	141
第2節	全面調査	141
第3節	整理作業	141
第3章	遺構	
第1節	概要	143
第2節	竪穴住居跡	145
第3節	竪立柱建物跡	151
第4節	土坑と溝	153
第4章	遺物	
第1節	土器	155
第2節	石器	163
第5章	遺構と遺物の検討	
第1節	遺構の検討	164
第2節	遺物の検討	166
第6章	まとめ	168
	参考文献一覧	170

挿入図 目次

浄谷遺跡

第1図	調査地区位置図 (1/25000)	2
第2図	遺跡分布図 (1/50000)	5
第3図	S K 48 石器出土状況	7
第4図	A地区 遺構配置図 (1/400)	8
第5図	溝 断面図 (1/40)	9
第6図	土壌1(1/40)	11
第7図	土壌2(1/40)	12
第8図	土壌3(1/40)	13
第9図	土壌4(1/40)	14
第10図	土壌5(1/40)	15
第11図	A地区出土遺物 溝(1)	17
第12図	A地区出土遺物 溝(2)	18
第13図	A地区出土遺物 土壌	19
第14図	A地区出土遺物 包含層	20
第15図	B地区遺構配置図 (1/400)・溝断面図 (1/40)	22
第16図	土壌1(1/40)	23
第17図	土壌2(1/40)	24
第18図	C地区 地区割図	25
第19図	C地区 土層断面図 (横1/400 縦1/40)	26
第20図	C地区 全体図 (1/600)	27
第21図	2区の遺構 (平面1/200 断面1/40)	28
第22図	3・4区の遺構 (1/200)	29
第23図	S K 6～8・11 (1/60)	30
第24図	S K 9 (1/60)	31
第25図	4・6区の遺構 (1/200)	32
第26図	4・6区の建物 (1/200)	33
第27図	S B 1・2 (1/80)	34
第28図	S B 3 (1/80) P 7・8 (1/40)	35

第29図	4・6区の溝 (断面1/40)	36
第30図	4・6区の土壌・炉址	37
第31図	SK10 (1/40)	37
第32図	SK12 (1/60)	38
第33図	SK14・15 (1/60) SD14~16 (断面1/40)	39
第34図	SK13・16・18~21 (1/60)	40
第35図	SK17 (1/60)	41
第36図	炉址 (1/20)	42
第37図	7区の遺構 (平面1/100 断面1/40)	43
第38図	SB 4 (1/80)	44
第39図	SK22~24 (1/40)	45
第40図	8区の遺構 (平面1/100 断面1/40)	47
第41図	SB 5 (1/80)	48
第42図	SK25・26 (1/40) P 17 (1/20)	49
第43図	10区の遺構 (1/200)	50
第44図	SB 6 (1/80)	51
第45図	SB 7 (1/80)	52
第46図	11・12区の遺構 (平面1/300 断面A~D1/40・E1/100)	53
第47図	SK27 (1/60) P24・25 (1/20)	54
第48図	SE 1 (1/40)	54
第49図	道路 (断面1/100)	56
第50図	無線鉄塔支柱 (1/800)	57
第51図	無線鉄塔支柱概念図	57
第52図	C地区出土遺物 柱穴(1)	65
第53図	C地区出土遺物 柱穴(2)	66
第54図	C地区出土遺物 溝(1)	67
第55図	C地区出土遺物 溝(2)	68
第56図	C地区出土遺物 溝(3)	69
第57図	C地区出土遺物 土壌(1)	70
第58図	C地区出土遺物 土壌(2)	71
第59図	C地区出土遺物 土壌(3)	72
第60図	C地区出土遺物 土壌(4)	73
第61図	C地区出土遺物 土壌(5)	74

第62図	C地区出土遺物 包含層(1)	75
第63図	C地区出土遺物 包含層(2)	76
第64図	B・C地区周辺の被地形図(1/2000)	78
第65図	遺構変遷図(1/1000)	82
第66図	II期概念図(1/1000)	83
第67図	C地区出土遺物 瓦1	88
第68図	C地区出土遺物 瓦2	89
第69図	A・C地区出土遺物 石器・石製品	91
第70図	A・C地区出土遺物 鉄製品	92
分析・鑑定		
第1図	C地区SK10土壌試料採取地点	100
第2図	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成	100
第3図	試料中に残存する脂肪のステロール組成	100
第4図	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図	101
第5図	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関	101

南山古墳群

第1図	遺跡の位置	106
第2図	南山古墳群調査範囲	107
第3図	A地区調査前地形図	110
第4図	A地区遺構配置図	111
第5図	1号墳土層断面図	112
第6図	2号墳	114
第7図	3号墳	115
第8図	4号墳	117
第9図	土坑5(4号墳主体部)	118
第10図	土坑2	119
第11図	土坑3	120
第12図	土坑4	121
第13図	溝状遺構・鏡土坑2	122
第14図	B地区遺構配置図及び5号墳	124
第15図	遺物1	128

第16図	遺物2	130
第17図	遺物3	132

玉津田中遺跡南大地点

第1図	明石川流域の弥生時代遺跡	138
第2図	遺跡の調査地点	140
第3図	調査区の位置	142
第4図	遺構全体図	144
第5図	1号～3号 住居跡検出状況	146
第6図	1号住居跡	147
第7図	2号住居跡	148
第8図	3号住居跡	149
第9図	4号住居跡	150
第10図	1号・2号獨立柱建物跡	152
第11図	3号獨立柱建物跡	153
第12図	溝1断面図	154
第13図	土坑1断面図	154
第14図	1号～3号住居跡出土弥生土器	159
第15図	1号～3号住居跡・土坑10出土弥生土器	160
第16図	土坑1・土坑7・柱穴・溝1出土弥生土器	161
第17図	包含層出土弥生土器・中世の土器	162
第18図	石器	163
第19図	遺跡内の微地形	165
第20図	玉津田中遺跡における集落の移動	169

表目次

浄谷遺跡

表1	浄谷遺跡・南山古墳群周辺遺跡地名表	6
表2	土器器皿、須恵器碗・皿法量表	80

表3 瓦種別破片点数	90
分析・鑑定	
表1 土壌試料の残存脂肪抽出量	100
表2 土壌試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合	100
表3 樹種サンプル資料一覧表	102

玉津田中遺跡南大地点

表1 明石川流域の弥生遺跡	139
---------------	-----

図版目次

浄谷遺跡

図版1 調査前・確認調査	図版19 C地区10区建物
図版2 A地区全景	図版20 C地区7・10・12区柱穴群
図版3 A地区土壌(1)	図版21 C地区11～12区柱穴群
図版4 A地区土壌(2)	図版22 C地区土壌・調査風景
図版5 A地区土壌(3)	図版23 C地区道路遺構
図版6 A地区土壌(4)・溝	図版24 A地区出土遺物
図版7 B地区全景・溝	図版25 C地区出土遺物 柱穴・溝(1)
図版8 B地区土壌	図版26 C地区出土遺物 溝(2)
図版9 C地区全景・近景	図版27 C地区出土遺物 土壌(1)
図版10 C地区近景	図版28 C地区出土遺物 土壌(2)
図版11 C地区4・6区全景・柱穴	図版29 C地区出土遺物 土壌(3)
図版12 C地区3・4区土壌	図版30 C地区出土遺物 土壌(4)
図版13 C地区6区土壌	図版31 C地区出土遺物 包含層(1)
図版14 C地区4・6区土壌	図版32 C地区出土遺物 包含層(2)・陶磁器
図版15 C地区4・6区土壌・炉址	出土遺物 瓦(1)
図版16 C地区7区全景・土壌	図版34 出土遺物 瓦(2)
図版17 C地区8区全景・土壌(1)	図版35 出土遺物 石器・鉄器
図版18 C地区8区土壌(2)	図版36 樹種顕微鏡写真

南山古墳群

図版37 全景

図版38 全景

図版39 A地区 1号墳

図版40 A地区 2号墳

図版41 A地区 3号墳

図版42 A地区 3号墳

図版43 A地区 4号墳

図版44 A地区土坑2・土坑3・溝状遺構

図版45 B地区他

図版46 遺物1)

図版47 遺物2)

図版48 遺物3)

玉津田中遺跡南大地点

図版49 調査前の状況

図版50 全景・竪穴住居跡

図版51 竪穴住居跡・竪立柱建物跡

図版52 竪立柱建物跡

図版53 土坑・溝断面

図版54 出土遺物 弥生土器(1)

図版55 出土遺物 弥生土器(2)

図版56 出土遺物 弥生土器(3)

図版57 出土遺物 弥生土器(4)

図版58 出土遺物 弥生土器(5)・石器



淨谷遺跡

第1章 概要

小野浄谷遺跡（以下浄谷遺跡）は、一般国道175号線（小野バイパス）改良工事の分布調査の際に発見された遺跡である。本項では昭和61年度に実施した確認調査と、昭和62年度に実施した全面調査について報告する。

報告に際してはA地区・B地区・C地区の順に報告し、最後に前述の分析・鑑定についてのデータを掲載した。

尚、浄谷遺跡で用いた方位は真北を用い、標高値については東京湾海水準（T.P.）を基準とした。

確認調査

分布調査の結果、浄谷町字石丸他で遺物の散布が広く認められた他、周辺には「大門」などの字名も確認された。従って、遺跡が広い範囲で広がっていることが推定され、道路予定地の広い範囲に遺跡が及んでいると思われた。

このため、昭和61年度に建設省近畿地方建設局兵庫国道事務所より埋蔵文化財の確認調査の依頼があり、兵庫県教育委員会が確認調査を実施した。

確認調査は遺跡の存在・範囲・性格について明らかにすることを目的に行った。調査は主として2m×2mの坪を設けて行い、部分的にトレンチを設定してこれを補った。設定した坪は60カ所、トレンチは22本である。

この結果、3地点で遺跡の存在が確認され、遺構・遺物が検出された。それぞれ北からA・B・C地区とした。確認調査における各地点の概要は以下の通りである。

A地区では多くの土壌と溝が検出され、土器も若干出土した。包含層から出土した土器の時期は13～14世紀代のものであった。しかし、溝の一部には奈良時代の遺物も含まれていた。

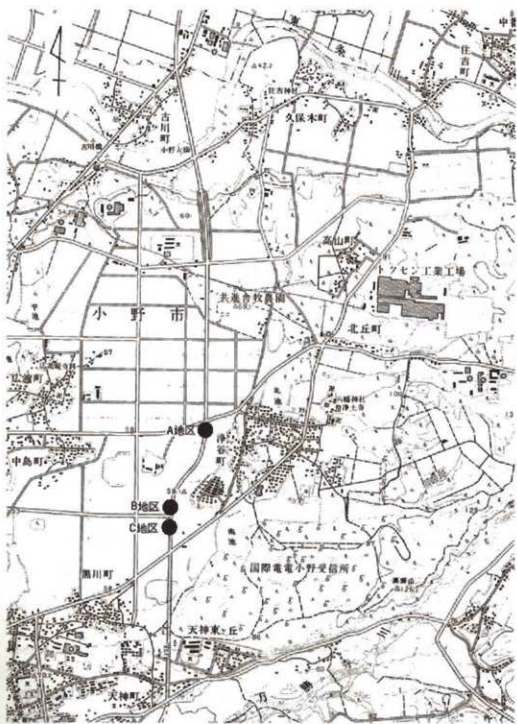
B地区は東西方向に調査区を横断する溝と、多数の土壌を検出した。

C地区ではほとんどすべての坪で遺構・遺物を検出した。遺構には土壌・溝・柱穴などがある。柱穴の存在から集落の可能性が考えられた。出土した遺物は13～14世紀にかけてのものである。

全面調査

全面調査の調査区は確認調査のデータに基づいて、A地区・B地区・C地区の3カ所に分かれる。範囲については後述した通りである。

調査区内の地区割りについては各地区ごとに道路のセンター杭を基準に設定した。遺物の取り上げはこの地区を基準として行った。調査はA地区・B地区・C地区の順に進めた。調査面積はA地区が1992㎡、B地区が1099㎡、C地区が3629㎡である。



第1図 調査地区位置図 (1/25000)

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

浄谷遺跡は小野市浄谷町地蔵池ノ下・帝釈前、南山古墳群は小野市市場町南山に所在する。

小野市は、瀬戸内海に面した明石市から国道175号線を北へ約20km行った東播磨の内陸部に位置し、調査地区浄谷町は市街地からさらに北東へ約2km、市場町南山は市街地から南東へ約2kmの地点にある。この地は、兵庫県最長の河川、長さ86.5kmを測る加古川の中流域にあたり、年間平均気温14.7℃・年間平均降水量1,335mmの温暖な気候と、肥沃な土壌に恵まれた面積約94km²・人口約46,000人のどかな田園都市である。交通関係では、前記175号線・JR加古川線が南北に、神戸電鉄粟生線が北西から南東に走る。

市内の地形は、西部を加古川が南北に貫流し、両岸には加古川が形成した氾濫原・河岸平野（標高30m）、河岸段丘（「葉多面」標高30～40m・「小野面」標高40～70m・「浄谷面」標高70～100m）がよく発達しており、その間を東条川・万勝寺川・山田川・桜谷川・万願寺川等の中小河川が流れる。左岸は、主に氾濫原・河岸平野が水田、低・中位段丘が水田及び居住域、上位段丘は畑地として利用されている。

浄谷遺跡は加古川左岸の標高約60mの段丘上、南山古墳群は山田川左岸の標高約70mの低丘陵の端に立地し、周辺にはそれぞれ国宝浄土寺、野入古墳群等の関連建築物・遺跡が所在する。

第2節 歴史的環境

市街地西北の広大な河岸平野・低位段丘部は、水田地として農業生産の主流をなしてきた地域である。播磨国風土記によれば、当該地は賀毛郡の南東部にあたり、肥沃な土壌に支えられ、生産力が増大し、古代豪族層の抬頭をきたしたようである。

この事実は、市内各所に散在する古墳時代以降の遺跡をみれば明らかである。

旧石器・縄文時代

小野市最古の遺跡は、西域に拡がる青野ヶ原台地の鶴池遺跡である。ナイフ型石器・有舌尖頭器が出土したという。現在、他に遺跡は見当たらず、縄文土器を出土する遺跡も確認されていないが、今後この青野ヶ原台地や加古川左岸の段丘上では、遺物の発見される可能性が高い。

弥生時代

弥生時代に入ると、加古川沿いの自然堤防・低位段丘上に集落があらわれてくる。前期の土壌を抽出した高田古苗代遺跡（第2図1、以下番号のみ）、中期の土壌・溝を抽出した高田地蔵ノ

本遺跡(2)、敷地カノノ下遺跡(3)、後期の多角形竪穴住居跡を発見した垂井遺跡(4)、同じく後期の竪穴住居跡を発見した高田宮ノ後遺跡(5)、船木高町遺跡(6)等がある。

弥生時代を特徴づける青銅器は、市内では発見されていないが、北の龍野町に高岡銅碑、南の三木市に正法寺銅剣出土地がある。

古墳時代

古墳時代の遺跡は、低位段丘上に集落跡と中位段丘上に古墳があり、後期になると高位段丘上に群集墳が出現する。加古川左岸の高田宮ノ後遺跡・船木高町遺跡では、弥生時代に続き古墳時代前期の竪穴住居跡が見ついている。

明らかに前期と考えられる古墳は見当たらないが、加古川右岸青野ヶ原台地の南に延びる粟生三ツ塚出土の銅鏝に古式のものがあり、小規模な円墳が存在したのであろう。

中期には、標高50mの段丘上に古墳が築造される。しかし、それは前方後円墳ではなく、中型の円墳であった。加古川左岸の敷地大塚古墳(7)・小野王塚古墳(8)である。前者は敷地古墳群、後者は王子古墳群の盟主墳と考えられ、両者と周辺約30基の古墳をあわせ大部古墳群とも呼称されている。敷地大塚古墳は昭和13年に土取りで破壊されたが、径47m、埋葬施設は粘土槨と推定され、七面の仿製鏡をもっていた。王塚古墳は昭和27年に発掘調査され、径45mで周囲に円筒埴輪をもち、竪穴式石室を埋葬施設とする。出土遺物には甲冑と三輪玉等がある。なお、この周辺には敷地北東遺跡(9)等の集落遺跡も存在する。

後期になると、標高70mの段丘上や丘陵端に群集する古墳が築造される。加古川左岸には、南から櫻山古墳群(10)円墳150基以上木棺直葬と横穴式石室、池尻古墳群(11)円墳5基本棺直葬、野入古墳群(12)円墳15基本棺直葬と横穴式石室、今回報告する南山古墳群(13)、市場古墳群(14)円墳28基本棺直葬、焼山古墳群(15)帆立貝古墳と円墳100基以上木棺直葬等がある。さらに、北の段丘部には浄谷古墳群(16)円墳6基本棺直葬、久保木古墳群(17)円墳18基本棺直葬、南山古墳群(18)円墳9基本棺直葬、高田古墳群(19)円墳21基本棺直葬、高山古墳群(20)円墳10基本棺直葬、船木・中番古墳群(21)前方後円墳と円墳100基以上木棺直葬と横穴式石室と箱式石棺と窯形粘土槨(横穴式木室)等がある。また、加古川右岸では南端部に勝手野古墳群(22)円墳10基横穴式石室、毛無山古墳群(23)円墳3基横穴式石室、下米住古墳群(24)円墳5基本棺直葬と横穴式石室等がある。これらのうち、櫻山古墳群、焼山古墳群、高山古墳群、船木・中番古墳群、毛無山古墳群の一部が発掘調査されている。

奈良・平安時代

当該地域でこの時代に注目される遺跡は、寺院跡である。加古川左岸の広波町には、奈良時代前期創建という広波廃寺(25)薬師寺式伽藍がある。右岸の青野ヶ原台地東にあたる新部町と河合中町には、同じ時期の大寺(新部)廃寺(26)薬師寺式伽藍、河合廃寺(27)法隆寺式伽藍が所在する。さらに、平安時代後期では河合西町に河合西廃寺(28)浄土伽藍がある。このうち、大寺(新



第2圖 遺跡分布圖 (1/50000)

部) 廃寺は昭和43年から46年にかけて発掘調査を実施している。また、広渡廃寺も昭和48年から50年に発掘調査を行い、国指定史跡となっている。

中世

中世には荘園と城跡がある。平安時代末、加古川左岸に東大寺領大部荘が立荘される。そして鎌倉時代建久年間には、東大寺再建の勧進職後栗房重源がその経済基盤とするために、大部荘再開発の拠点として、浄谷町に浄土寺(29)天竺様式を建立した(浄土堂と阿彌陀如来像は国宝)。なお、この寺院は先に記した広渡寺の隣とも大きく関係し、広渡寺の本尊をここに移しているのである。周辺には本報告の浄谷遺跡A地区・B地区・C地区(30)と、南山窟跡(31)、通池窟跡(32)、長尾町に雲光寺-長尾寺(33)等がある。室町時代では、荘園に垂井荘、東河合荘があり、城跡に河合城(34)、葉多城(35)等がある。その他、集落跡は高田町・敷地町所在の遺跡を中心に随所に見られる。

表1 浄谷遺跡・南山古墳群周辺遺跡地名表

No	遺跡名	所在地	No	遺跡名	所在地
1	高田古苗代	小野市高田町古苗代	19	高田古墳群	小野市高田町山畑他
2	高田地蔵ノ本	高田町大上権	20	高山古墳群	久保木町高山
3	敷地カノノ下	敷地町カノノ下	21	船木中番古墳群	船木町北山他
4	垂井	神明町小池ノ内	22	勝手野古墳群	妻田町勝手野
5	高田宮ノ後	高田町宮ノ後	23	毛無山古墳群	妻田町毛無山
6	船木高町	船木町高町	24	下米住古墳群	下米住町狐塚他
7	敷地大塚	敷地町宮林	25	広渡廃寺	広渡町竹ノ本他
8	小野王塚	王子町宮山	26	大寺廃寺	新部町大寺
9	敷地北東	敷地町アオノ	27	河合廃寺	河合中町宮ノ前
10	櫻山古墳群	櫻山町深谷他	28	河合西廃寺	河合西町宮ノ端
11	池尻古墳群	池尻町東山他	29	浄土寺	浄谷町北谷他
12	野入古墳群	市場町南山	30	浄谷A・B・C	浄谷町イロハ他
13	南山古墳群	〃	31	南山窟	古川町南山
14	市場古墳群	市場町玉崎他	32	通池窟	久保木町通池
15	焼山古墳群	二葉町向山他	33	雲光寺-長尾寺	長尾町池ノ谷
16	浄谷古墳群	浄谷町狐塚他	34	河合城	新部町構
17	久保木古墳群	久保木町出晴	35	葉多城	葉多町城ノ前
18	南山古墳群	古川町南山			

第3章 A地区の調査

第1節 概要

A地区は今回の3つの調査地点のうち最も北側にあり、B地区とは約550m離れている。調査範囲は、確認調査で遺構が検出された水田2筆分であるが、調査区の中を水路が東から北へ横切するため、この部分は調査を行っていない。また、SD3がさらに南へのびることが明らかになったため、SD3の部分についてのみ予定道路幅いっぱいまで遺構のつながりを追跡した。

A地区で検出された遺構には、奈良時代の土壌群・奈良時代から平安時代の溝のほか、時期は不明であるが、ピットがある。

溝は、SD2を除き、いずれも調査区を斜めに横切るように、おおむね北東方向から南西方向へと流れるが、後述のように、時期はやや異なる。

土壌群は、調査区の中央部付近から北東隅まで幅約15mの帯状に分布し、調査区外にも広がっている。土壌群の分布域は、第3図に示すように、基盤層の粘土(シルト)層の分布範囲とはほぼ一致し、砂礫層が基盤となる部分にはほとんど存在しない。

ピットは、調査区の西側で11基が検出された。径約20cmほどの小規模なものばかりで、構造物を復元できるような並びは認められなかった。

なお、A地区では、SK48の埋土中から有舌尖頭器が1点出土したため、土壌群の調査終了後、周辺の断ち割りを実施した。しかしながら、当該期の遺物の分布は認められず、遺跡からは遺離した遺物であることを確認した。

第2節 遺構

SD1

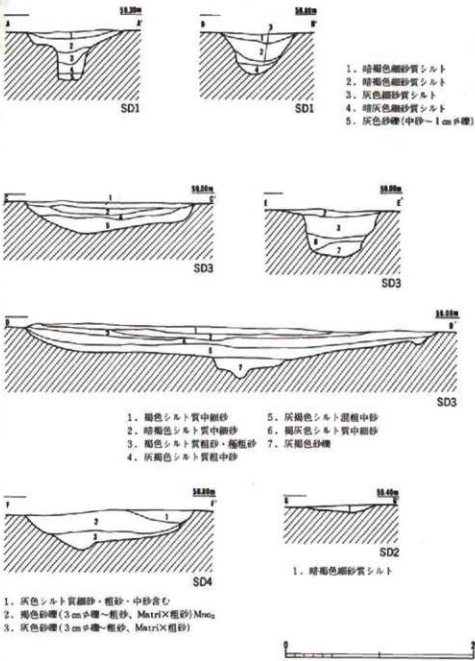
北北東から西南西の方向へ、調査区の中央を横切るように蛇行しながら流れる。水路の西側の地区では2方向に分岐し、一方は西側へと方向を変える。いくつかの土壌はこの溝に切られている。溝の断面形は、水路の東側の調査区では2段に掘り込まれた箱形を呈し、西側の調査区では「U」字形を呈する。箱形に掘り込まれているところで幅約30cm(上面幅約105cm)、深さ約50cm、「U」字形の部分で、幅約



第3図 SK48 石器出土状況



第4图 A地区 透视图(1/400)



第5図 溝断面図(1/40)

80cm、深さ約40cmを測る。埋土は上部は砂質シルトが堆積しているが、最下層には砂礫層が認められ、流れのある溝であったことがわかる。出土遺物には、須恵器杯・鏡・鉢・台付壺・丸底壺など8世紀～10世紀のものが認められ、中でも「良西」の墨書のある鏡の出土していることが特筆される。

SD 2

調査区の北東隅で検出された南北方向の浅い溝である。西端は溝1につながる。幅約75cm、深さ約10cmを測る。遺物は出土していないが、土壌群を切って掘られていることとSD1との関係から、SD1に近い時期のものと考えられる。

SD 3

調査区の南東隅で検出された。北東方向から南西方向へ流れる溝である。溝の北東部では幅が広がり、平面形が乱れているが、断面ラインE-E'より南西側では断面が箱形に近い「U」字形を呈し、やや蛇行しながら調査区外へと延びている。この部分での溝幅は約80cm、深さ約50cmを測る。埋土は最下層に砂礫やシルト混じり粗中砂が堆積しており、流れのある溝であったことがうかがわれる。出土遺物はほとんどが8世紀前半～9世紀前半のものである。

SD 4

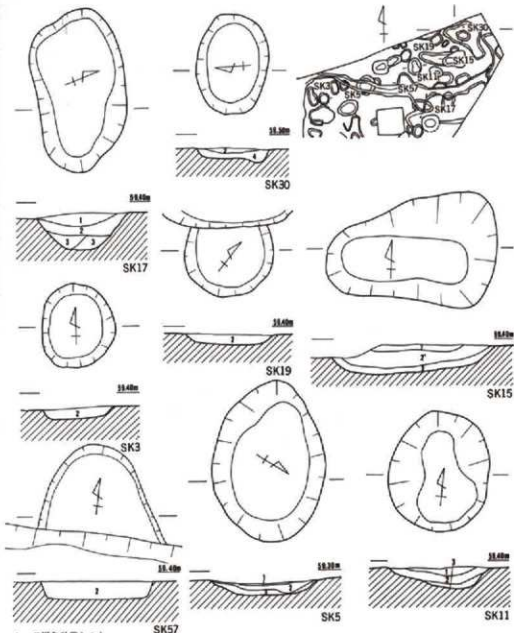
調査区の西隅で部分的に検出された溝である。幅約180cm、深さ約30～40cmを測る。埋土はほとんど砂礫で、遺物はまったく出土しなかった。

土壌

土壌は106基検出されているが、そのほとんどが調査区の中央部から北西隅に帯状に集中して分布し、これ以外の場所では数基が点在するに過ぎない。集中部の土壌の内、35基について平面図と断面図を示した(第6～10図)。

平面形では楕円形あるいは不整形なものが多く、定形的なものではない。土壌の規模は長軸方向で250cmから80cmのものがみられ、変異に富んでいる。深さは浅いものでは約10cm、深いものでは約55cmのものがあるが、30cm未満の比較的浅いものが多くみられる。こうしたことから、これらの土壌が、規格性をもって掘られたものではないと判断できよう。

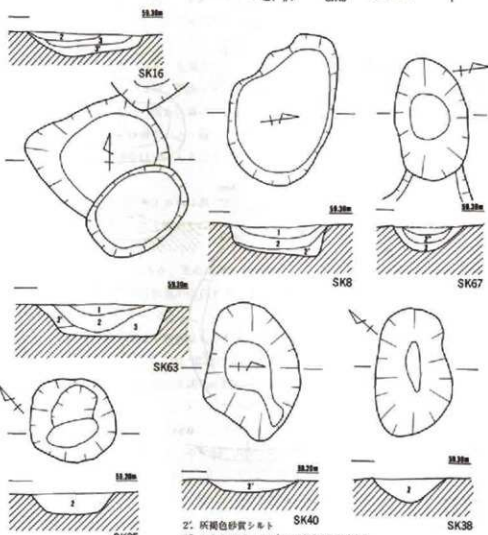
次に、土壌の埋土は褐色～暗褐色のシルトが主体となるが、堆積の状況から大きく二つに分けることができる。一つは、暗褐色シルト層が単層で堆積しているもので、深さはほとんどが20cm未満の浅い土壌である。SK3、SK13、SK19、SK24、SK34、SK35、SK38、SK40、SK65などがこれにあたる。もう一つは、埋土が2層以上に分かれるもので、最上層には地山のシルト層に類似した黄褐色のシルト層が堆積し、その下層に暗褐色のシルト層が認められるものである。暗褐色のシルト層は「U」字状に堆積しており、両端はやや色調が淡くなるものの遺構検出面まで立ち上がっている。このため、掘削前の土壌は、一見、ドーナツ状に見える。SK8、SK11、SK15、SK49、SK62、SK63などに顕著に認められる。しかし、両者とも、人為的に埋め戻しを行ったよ



1. 黄褐色砂質シルト
2. 褐色砂質シルト
- 2'. 灰褐色砂質シルト
3. 1と2のブロック
- 3'. 3より1を多く含む
4. 灰白色砂質シルト(炭化物層をラミナ状に含む)



第6図 土坑(1) (1/40)

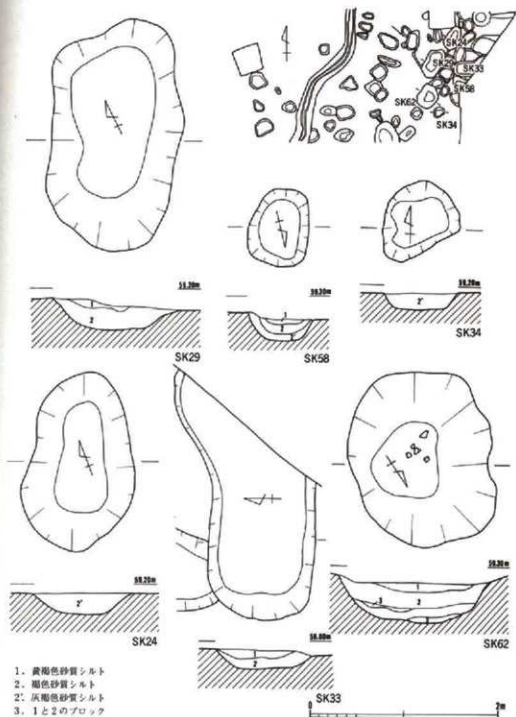


- 1. 黄褐色砂質シルト
- 2. 褐色砂質シルト

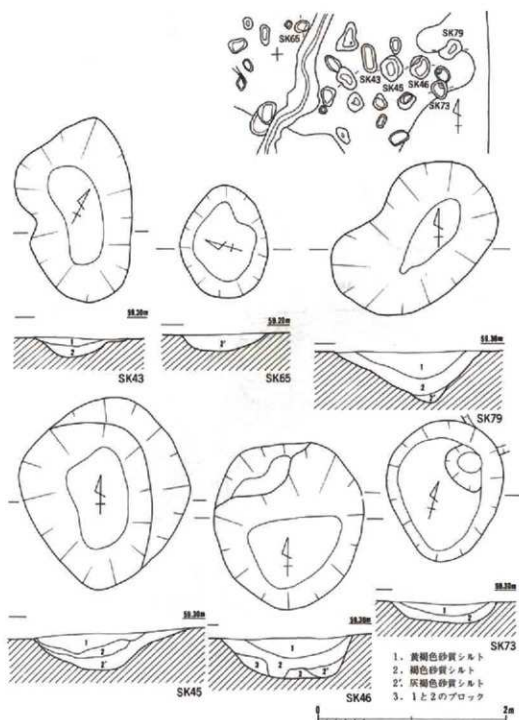
- 2': 所開色砂質シルト
- 2'': 1と2のプロップ(1cm以下の礫を含む)
- 3. 1と2のプロップ
- 3': 3より1を多く含む



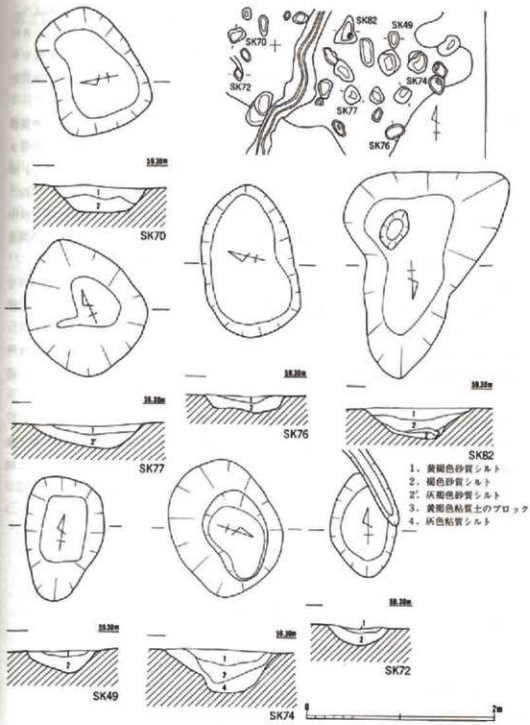
第7図 土坑② (1/40)



第8図 土坑(3) (1/40)



第9圖 土坑(4) (1/40)



第10図 土層(5) (1/40)

うな痕跡は認められない。後者のような埋土の成因としては、堆積環境の変化が考えられよう。

土壌のうち遺物が出土しているものは16基にすぎず、さらに実測が可能なものは3例で、8世紀に属するものである(第12図)。これをもってすべての土壌の時期を代表させることはやや無理があるかも知れないが、SD1との切り合い関係なども併せて、大きなずれはないと想定される。

次に、これらの多数の土壌の性格について考えておきたい。先述のように、土壌平面形や規模には規格性は認められないが、これらの土壌のほとんどがかなり集中して分布することが特筆される。土壌の分布域は付図1に示すように、地山がシルト層で構成されている部分と重なり、砂礫の混入が多くなるところにはほとんど存在しない。この点と、土壌の集中度、規格性の欠如、規模、出土遺物の少なさを考え合わせた場合、神戸市西区神出町の神出古窯址群周辺で検出されている粘土採掘土壌との類似性が指摘できる(神戸市教育委員会1984年、妙見山麓遺跡調査会1985年・1986年)。

神出古窯址群周辺で検出されている粘土採掘土壌の特徴として、妙見山麓遺跡調査会の報告では次のような点が挙げられる(妙見山麓遺跡調査会1985年)。1)土壌群の所在する位置の土質が周辺とは異なる。2)隅丸方形のものがやや目立つものの、形状・大きさは多様である。3)深さは約50cm以下で、粘土層を取り尽くす深さに達するものではない。4)土壌内に人為的な汚れはほとんど無く、出土遺物も少ない。5)掘り上げた土を前の土壌に埋めこんで行く痕跡の認められるものがある。

A地区で検出された土壌群は5)の点以外は、これと比較的よく類似しているといえよう。しかし、採掘された粘土が陶土として適当であること、周辺に窯跡が存在すること、という粘土採掘土壌としての根本的な条件は、A地区の北側にある池で以前窯跡らしきものが発見されたと地元で伝えられている以外確認されていない。したがって、ここでは粘土採掘土壌の可能性を提示するにとどめて置きたい。

註

(1) 小野市教育委員会西田猛氏の御教示による。

参考文献

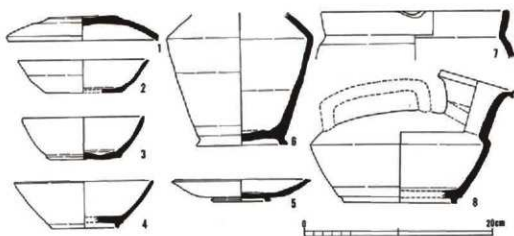
- 神戸市教育委員会 1984年 「神出古窯址群発掘調査概報」
妙見山麓遺跡調査会 1985年 「神出 神出古窯址群に関連する遺跡群の調査」
妙見山麓遺跡調査会 1986年 「神出1986 神出古窯址群に関連する遺跡群の調査」

第3節 遺物

1. SD3出土の遺物(第11図)

SD3からは少量の土器が出土しているが、時期を判断でき、図化できるものは下記に示す須恵器のみである。器種としては杯・杯蓋・台付杯・台付皿・台付壺・片口鉢・平瓶等があり、いずれも8世紀前半から9世紀前半に属するものである。

杯蓋(1)は口径約15.9cm、器高約2.7cmをはかる。体部はわずかに丸味を持ち、口縁端部の外面は、小さく内傾して納まる。天井部はヘラキリ後周囲をわずかにナデアが、握みを持たない。杯(2)は口径約14.8cm、器高約3.5cmをはかる。体部上半は小さく外反し、口縁端部は丸い。(3)は体部が内湾気味に開き、口縁部をわずかにつまみ上げる。底部径は大きく、小さな段によって体部と区別され、外面はヘラキリのままである。口径約13.1cm、器高約4.5cmである。台付杯(4)の体部は直線的に大きく開き、口縁部はそのまま丸く納まる。細い高台は低く、体部との境付近に内傾気味に付く。高台端部は外傾し、外面が接地する。口径約14.9cm、器高約4.9cmである。台付皿(5)の口縁部は外方に小さく握み、その端部に外傾する狭い水平面を作る。高台径は口径に比してかなり小さいうえに低い、外面が大きく張りだし、外方に踏張る。器高約2.7cmであるのに対し、口径は約13.8cmをはかり、口縁部はわずかに内湾しながら大きく開く。台付壺(6)は腹部がほぼ直線的に開き、肩部は「く」の字に折れ曲がる。平底の底部には体部との境付近に、短く外方に大きく踏張った台が付く。底径約9.6cm、現高約14cmをはかる。片口鉢(7)の頸部は、緩やかな「く」の字型に屈曲する。口縁部はわずかに外反する。口縁端部は内側に極小さく肥厚させることにより、狭い水平面をなす。頸部から肩部にかけて強くヨコナデアする。口径



第11図 A地区出土遺物 測(1)

約19.8cm、現高5.2cmをはかる。平瓶(5)の体部はほぼ直線的に開き、その天井部は高さ約10cmと高く丸味をもつ。底部は欠損するが、体部との境付近に短く細い高台が付く。口縁部は短い水平に近いほど大きく開き、端部を上方に積み上げる。把手部は欠損するが、かなり大型になると思われる。復元底径約12.1cm、口径約8cm、器高約14.5cmである。

2. SD1出土の遺物(第12図)

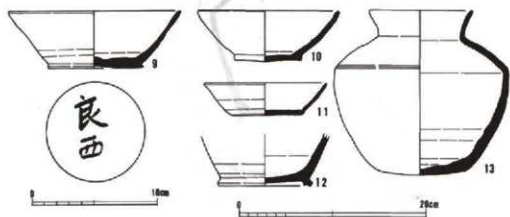
出土した土器は細片が多く、図化でき、時期が明確なものは下記に示す数点のみである。出土した土器は杯・碗・台付壺・丸底壺であり、いずれも須恵器である。時期的には(11~13)が8世紀代、(9)が9世紀前半、(10)が10世紀代に属するものである。

杯(11)の体部は直線的に開く。口縁端部は小さく外弯した後、丸く納まる。口径約13.2cm、器高は3.5cmをはかる。

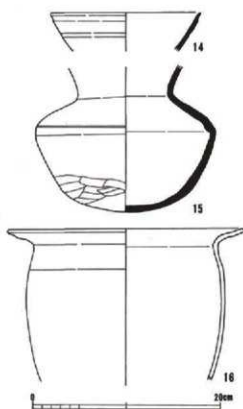
台付壺(12)は腹部以上を欠損するため、形態は不明である。短い台は腹部との境に付き、外方へ大きく肥厚する。底径約9.9cm、現高約5.3cmを残す。丸底壺(13)は腹部は緩やかに内弯しながら開き、肩部から頸部へと連続する。肩部はわずかに丸味を持ち、外面には、二条の沈線が巡る。頸部は「く」の字状に屈曲する。口縁部も極わずかに外弯しながら開き、端部は丸く納まる。底部はわずかな丸底となる。口径約10.8cm、器高約17.6cmである。

碗(9)は体部が直線的に開き、端部はそのまま丸く納まる。底径は約10cmをはかり、ヘラケリのまま未調整のため、その端部が一部外方に張り出す。底部外面には、「良西」の墨書がみられる。口径約18.1cm、器高約6.1cmである。

碗(10)の口径は約15.1cm、器高は約5.5cmである。体部は直線的に開き、口縁端部が小さく内弯する。底部はヘラケリし、高台を作り出すのに伴い見込みは小さく落ち込む。



第12図 A地区出土遺物(薄2)



第13図 A地区出土遺物 土壺

16と63内からの接合資料である。体部は長胴型になると思われる。口縁部はわずかに波打ちながら、水平近くまで外反する。その端部は内傾する狭い面となって納まる。頸部部境には、ヨコナデによるわずかな段を持つ。遺存状態がかなり悪いので、内外面とも剥離が著しく、調整は不明である。口径約25cm、現高約16.5cmである。

4. 包含層出土の土器 (第14図)

A地区は包含層自体が薄かったため出土土器の点数も少なく、その内図化できたものは6世紀後半の高杯・平瓶、8世紀代の杯・鉢・台付鉢・壺、さらに9世紀～10世紀に属する小壺である。それらの多くは須恵器であり、土師器は15世紀に属する鍋1点のみである。出土点数は少ないものの、あまりローリングを受けていない状態にある。

高杯 (17) は、脚部以下を欠損する。体部外面の中央部下方に、一条の突帯を有する。口縁部は欠損するがわずかに外反するものと思われる。平瓶 (18) は、口径約8.8cmで、「く」の字に開く口縁部のみが残存する。

3. 土壺出土の遺物

土壺は多数検出されたがその壺内からは、その遺構の性格によるためか、ほとんど遺物が出土していない。図化できたのは、以下に示す須恵器の壺2点と土師器の壺1点のみであり、それぞれ個別の土壺内より出土している。いずれも8世紀代に属する土器である。

SK 57 (14 第13図)

(14) は極わずかに内傾しながら開く壺あるいは壺の口縁部と思われるが、以下を欠損する。端部は外方に小さく積み出し、中程には浅い沈線が巡る。口径16.3cmである。

SK 8 (15 第13図)

丸底壺 (15) は口縁部を欠損する。肩部は大きく張り出し、頸部は、「く」の字に屈曲する。肩部外面には一条の沈線が巡る。丸い底部外面は不定方向のヘラケズリを行う。肩部径は約19.4cm、現高約15.3cmをはかる。

SK 16・63 (16 第13図)

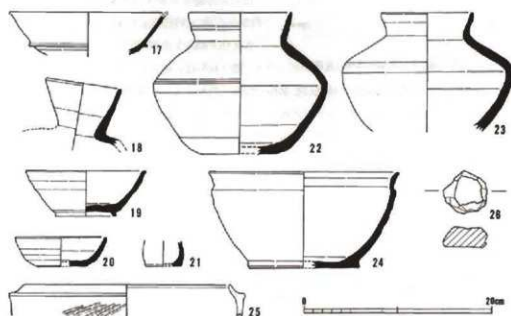
壺 (16) は、唯一の土師器の壺であり、SK

杯(20)の体部はわずかに内弯しながら開き、口縁端部は丸く納まる。口径約9.7cm、器高約3.2cmをはかる。壺は2点とも肩が大きく張り、体部は「算盤玉」型となる。(22)は外面肩部に二条の沈線を持つ。口縁部はいずれも外傾しながら開き、(22)は外面に沈線が一条走り、(23)は端部が外方に幅広く肥厚する。口径は(22)が10.8cm、(23)が9.5cm、(22)の器高は約15.1cmである。(23)は現高12.8cmである。高台付杯(19)の体部は直線的に開く。細い高台は短く、わずかに外方に肥厚する。口径12.7cm、器高4.8cmをはかる。鉢(24)の体部は内弯しながら立上がり、口縁部は大きく段をなした後外弯して納まる。口径約20.0cm、器高約10.2cmである。

小壺(21)の体部は吊鐘型になるものと思われるが、上半部を欠損する。底部はわずかにすぼまり、極低い段による平底となる。現高約2.6cmをみる。

鍋(25)は唯一の土師器である。口縁部はわずかに外弯しながら大きく内傾し、端部は丸くおさまる。口縁部直下には、肥厚気味に作り出された小さな受部を持つ。体部外面は右上がりに叩き、内面はナデ調整する。口径約21.8cm。

円盤状瓦製品(26)は平瓦を打欠き、円盤状としたものである。長径約4.6cm、短径約4.2cmである。



第14図 A地区出土遺物 包含層

第4章 B地区の調査

第1節 概要

B地区は今回の3つの調査地点のうち中央にあり、A地区とは約550m、C地区とは約100m離れている。調査範囲は、確認調査で遺構が検出された水田1筆分である。

B地区で検出された遺構には、土壌群と溝がある。

溝は、調査区のはほぼ中央を東から西へと流れ、土壌群は、敷基を除き溝の北側、東半部に分布する。これらの遺構は、すべて基盤層である淡黄色の粘土層あるいは砂礫層の上で検出された。

なお、B地区ではA地区で見られたような遺物包含層の堆積は認められなかった。

第2節 遺構

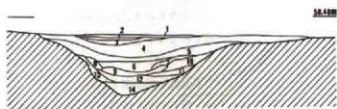
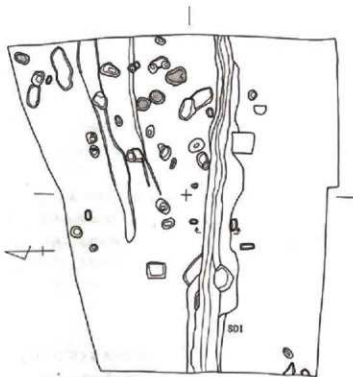
溝1

東から西の方向へ、調査区のはほぼ中央を流れる。溝は上面が大きく開いた断面「U」字形を呈しているため、はっきりとした肩が捉えにくい。幅は東端で約130cm、中程で約200cm、西端で約240cmを測り、西に行くほど幅広くなっている。深さは東端で幅約50cm、中程から西端にかけては約70cmあり、幅と同様に西へ行くほど深くなっている。埋土は砂質シルト～極細砂が主体となるが、最下層付近には中砂～粗砂が存在するため、流れのある溝であったものと思われる。また溝の底部付近では壁が抉られて段が形成されているところもある。出土遺物は極めて少なく、僅かに瓦など11～12世紀と考えられるものが数点認められるにすぎない。

土壌

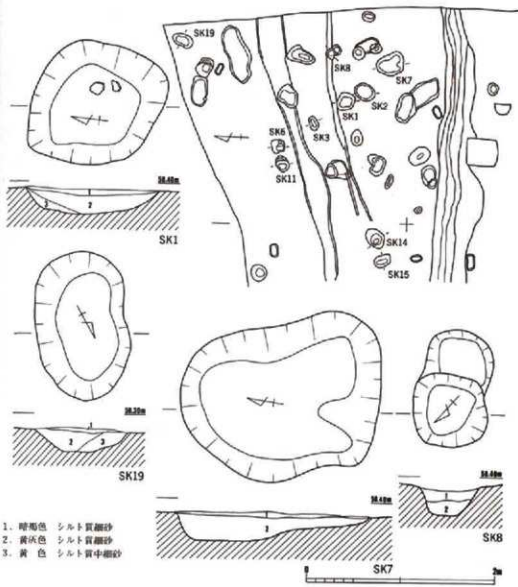
土壌は41基検出されている。このうち10基について平面図と断面図を示した(第16・17頁)。平面形では楕円形あるいは不整形なものが主体を占め、定形的なものは少ない。土壌の規模は長軸方向で80cmから450cmのものがみられ、変異に富んでいる。深さは浅いものでは約10cm、深いものでは約55cmのものがあるが、30cm未満の比較的浅いものが多くみられる。こうしたことから、A区と同様、これらの土壌が規格性をもって掘られたものではないと判断できよう。

41基の土壌のうち、遺物が出土しているものは8基にすぎず、そのほとんどが細片で、実測図は示していない。このうち6基の土壌(SK1、SK2、SK7、SK13、SK14、SK16)では弥生土器のみが出土しており、残る2基(SK15、SK18)では須恵器と土師器がみられる。したがって、土壌のうち弥生時代まで遡るものが存在することが想定されるが、遺物量も少なく、埋没の過程での混入の可能性も否定できない。

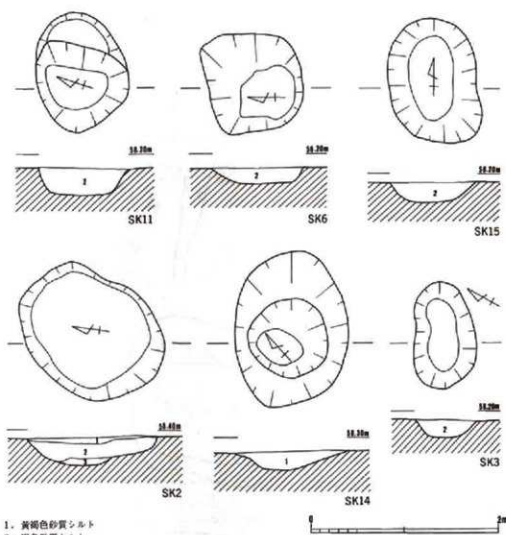


- | | | | |
|-----------|---------------|-------------|----------------|
| 1. におい淡灰色 | シルト～細砂 灰黄色土含む | 8. におい淡灰色 | 極細砂、若干粘質 |
| 2. 褐色 | シルト～極細砂 | 9. におい淡乳灰色 | 極細砂～細砂 灰黄色土粒含む |
| 3. 暗灰色 | シルト・褐色粒含む | 10. におい淡灰黄色 | シルト～細砂 褐色粒含む |
| 4. におい淡灰色 | 極細砂、若干粘質 | 11. におい淡乳灰色 | 極細砂～細砂 灰黄色土粒含む |
| 5. 茶灰褐色 | シルト～細砂 灰黄色土含む | 12. 灰黄色 | 極細砂～粗砂 |
| 6. におい淡灰色 | 極細砂 | 13. 灰黄色 | シルト～粗砂 |
| 7. 淡灰黄色 | シルト～細砂 褐色粒含む | 14. 淡灰褐色 | 中砂～極細砂 |

第15図 B地区遺構配置図 (1/400)・溝断面図 (1/40)



第16図 土坑(1) (1/40)



第17図 土壇(2) (1/40)

第5章 C地区の調査

第1節 概要

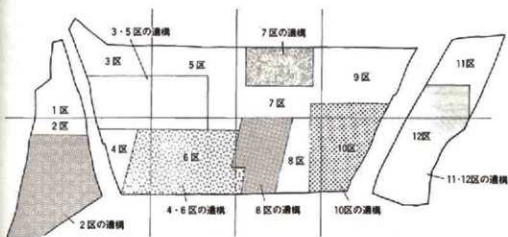
浄谷遺跡の南端に位置する地区で、B地区とは50mの距離にある。この地区はB地区と同じ微高地に位置しており、調査区の大部分はこの微高地の上に乗るが、南端については微高地から谷に下る傾斜面にあたる。周辺も含め大きく地形を観察すると、C地区は北東から南西に向かって傾斜する地形と考えられる。当地区の現地表面は標高58.5～59.0m前後である。

調査の結果、全面に広がる集落の存在が明らかとなった。これらの集落を構成する遺構としては掘立柱建物・柱穴・土壇・溝・素掘井戸などがあり、加えて、集落に面して通る道路遺構も検出した。

遺物については須恵器・土師器・瓦質土器・中国産の磁器・瀬戸産の灰釉陶器・瓦・金属器などの出土を見ている。C地区から出土した遺物の量はコンテナ30箱分であった。この遺物量は今回の調査の9割以上を占める量である。

遺構検出面は表土下20～40cmで検出され、遺構群は段丘化した黄色シルトを掘り込んで形成されていた。ただし、各遺構は検出状況から考えて、かなり削平された状態と思われ、実際の遺構面は現表土前後と考えられる。

土層の堆積は基本的には耕作土・床土・灰褐色シルトないし褐灰色シルト（中世包含層）の順



第16図 C地区 地区割図

である。第19図は土層の模式断面図である。この図を見ても明らかなように、中央に見られた道路の段を境にやや土層堆積は異なるようである。東側は耕作土直下が遺構検出面となっている。西側についても若干の堆積は見られるが基本的には浅い堆積で遺構が検出できた。

調査に際しては、図(第18図)のように1~12区に地区割りを行って調査を進めた。各地区は調査区中央を軸に東西に分割し、南北には20m間隔で分割した。但し、調査区の間は農道・用水路などが存在するため、調査区が分割される場所については、この箇所を地区境とした。

この地区割は南北軸が座標北に対してN1°Wの角度に設定した。しかし当然のことながら、遺構のまとまりは地区に関係なく検出されているため、報告にあたっては便宜的に図のスクリーントーンの範囲を1単位として記述した。この範囲を呼称するにあたっては代表的な地区名をタイトルとして用いている。従って、複数の地区にまたがる場合でも全ての地区名をタイトルとしているとは限らない。また、道路遺構については各地区を縦断する形で検出されたため、最後に別項目を設けた。

第2節 遺構の調査

1. 2区の遺構(第21図)

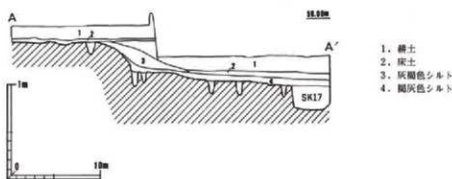
溝と楕円形ないし不定形の土壌が多数出土した。これらの土壌は形状や埋土から粘土取りの土壌の可能性が高い。

SD3(第21図)

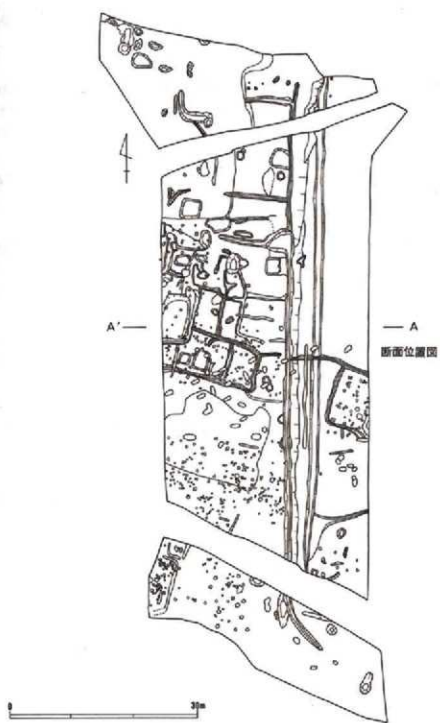
浅い溝で東西方向から南北方向に中程で屈曲する溝である。断面はU字形を呈しているもので東端側はやや膨んでいる。溝幅は1.5m、深さは0.4mである。

SK1・2(第21図)

切り合う2つの土壌で、SK2がSK1を切るものである。SK1は不定形で長軸長2.9m、



第19図 土層断面図 (横 1/400 縦 1/40)



第20圖 C地区 全体圖 (1/600)

短軸長2.7m、深さ0.38mの規模を測る。SK2は円形に近い形状を持つ。長軸長2.0m、短軸長1.8m、深さ0.12mの規模である。

SK3 (第21図)

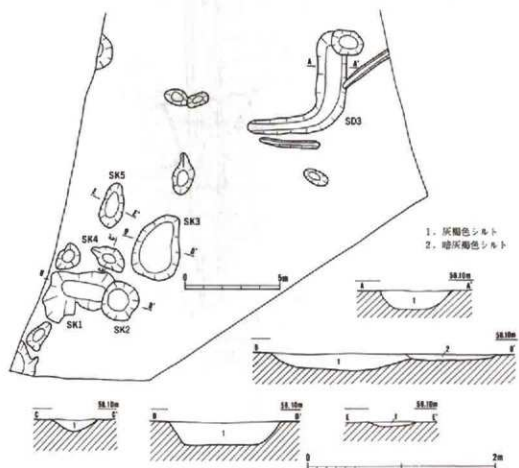
規模は長軸長3.5m、短軸長2.4m、深さ0.45mで、この地区最大の土壇である。平面形は東西に長い卵頭形を呈している。断面は箱型になるもので、壁が急角度に掘られ、底との境が明瞭である。

SK4 (第21図)

SK1・2・3・5に囲まれた小さな土壇である。平面形は南北にやや長くなる不定形である。規模は長軸長1.9m、短軸長1.1m、深さ0.25mである。

SK5 (第21図)

規模は長軸長2.4m、短軸長1.1m、深さ0.1mで、東西に長い楕円形を呈する。断面はU字形を



呈している。

2. 3・5区の遺構 (第22図)

道路遺構の西側に5基の土壇が掘削されている。2区の土壇と同じく大小様々なものがあり、形状も楕円形や不定形なものなど種々である。

SK6 (第23図)

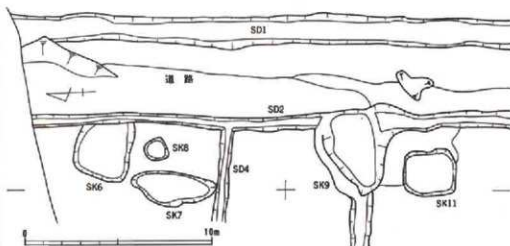
SD2に接して検出された土壇である。規模は長軸長3.2m、短軸長3.0m、深さ0.2mである。平面形は方形に近く、土壇底は平らで、壁は緩く傾斜して掘削している。埋土は灰褐色シルトないし褐色シルトであるが炭・焼土や地山の黄色シルトを斑状に多く含んでいる。この他、土壇底には図示したような焼土塊が検出された。片面が赤変し、背面が黄色を帯びるもので一方から火を受けたと思われるものである。しかし検出状況からすると、焼土塊はブロック状に砕かれたもので、他の場所から運ばれて投棄されたと思われる。

SK7 (第23図)

規模は長軸長4.6m、短軸長1.8～1.9m、深さ0.2mを測る。南北に長軸をもつ長細い形状の土壇である。断面形状はSK6と同様、緩く傾斜して掘削されている。当土壇からも多くの焼土を検出した。出土状況などから、やはり他の場所から運ばれて投棄したものと考えられる。但し、SK6に比べると焼土塊はさらに細かく、土壇の埋土についてはSK6に酷似している。

SK8 (第23図)

規模は長軸長1.3m、短軸長1.0m、深さ0.1mで、円形に近い形状を持つ小さな土壇である。断面は箱型を呈する土壇で、埋土は褐色シルトに炭・焼土を含んだものである。



第22図 3・4区の遺構 (1/200)

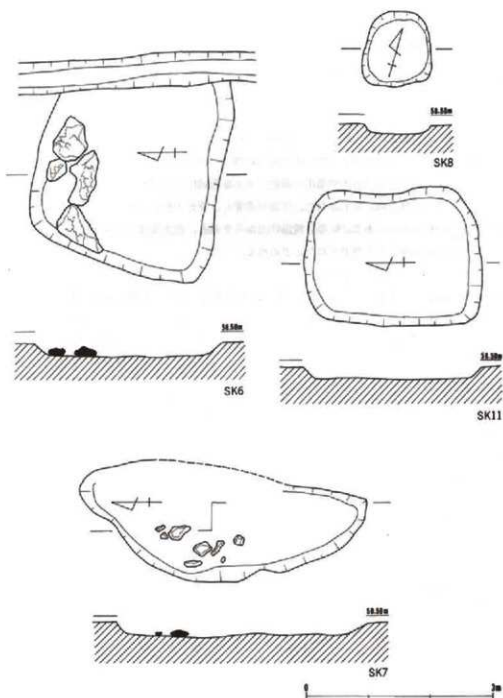


图23 图 SK6~8·11 (1/50)

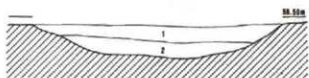
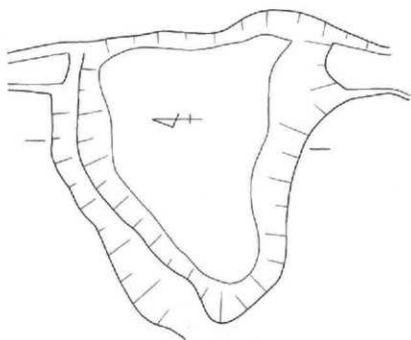
SK9 (第24図)

SD2に接して検出された。規模は長さ4.7~5.0m、幅4.5m、深さ0.5mで、平面は不定形である。SD2とSD12が合流する地点に検出された。溝底とのレベルの差からSD2の排水を一時SK9に溜めた後、SD12に流したものと思われる。従ってSK9は道路側溝の会所的な機能を果たしていたと思われる。この土層からは軒丸瓦1点(瓦の1)が出土している。

SK11 (第23図)

SK9の南隣に検出された。位置から考えて、SK2・SK9に関連して設けられたのではないと思われる。この土層の上面は浅く広がるものでSD2・SK9と繋がっている。

規模は長軸長2.85m、短軸長2.2m、深さ0.2mで、平面は方形に近い形状を持ち、断面は壁がやや急相斜に立ち上がり、土壇底はほぼ水平になる。出土遺物には土師器小皿・皿、須恵器碗・鉢がある。



- 1. 灰褐色シルト
- 2. 褐色シルト

第24図 SK9 (1/60)

3. 4・6区の遺構 (第25図)

最も遺構が集中した地区である。掘立柱建物・柱穴・溝・土塙・炉址などが出土している。遺構の切り合いから何時期かに渡って継続して営まれたと考えられる。掘立柱建物・溝・土塙・炉址に分けて報告する。

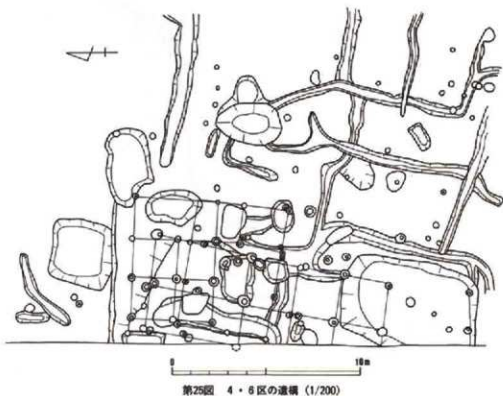
SB1・2 (第26・27図)

4・6区では掘立柱建物3棟が検出された。3棟は重なって検出されていることから、同時期には存在しない。そして、SB1・2はP1がP2を切っていることから、SB2→SB1の順に建てられたことがわかる。

SB1は桁行3間(6.9m)×梁行2間(4.9m)の東西棟で、面積は33.8㎡を測る。建物の方位はN79°Wをとる。柱間は桁行が2.2～2.3m、梁行は2.8～2.0mを測るもので、梁行がやや不揃いである。

建物の検出レベルは標高58.1～58.2m前後、柱底のレベルは標高58.1～58.2m前後である。柱穴の幅方は円形のものが多く直径25～40cm前後である。柱の直径は柱痕跡の観察から直径20cm前後と考えられる。

SB2は桁行3間(6.4m)×2間(4.2m)のやはり東西棟で、面積は26.0㎡を測る。建物の方



位はN89°Wをとる。柱間隔は桁行が2.1～2.2m、梁行が2.2m前後である。建物の検出レベルは標高58.0～58.2m前後で柱穴の深さは30～40cm前後である。

柱穴の掘方は円形のものが多く直径30～50cm前後である。柱の直径は柱痕跡の観察から直径20cm前後と考えられる。

SB3 (第26・28区)

建物1・2に覆い被さるように検出された。建物3は桁行5間(12.5m)×梁行2間以上(5.1m)、面積63.7㎡(検出範囲での計算)以上の規模を持ち、柱構造から竪柱建物になる。建物の棟方向は南北方向をとり、方位はN13°Eを向いている。

柱間は桁行が2.3～2.5m、梁行が2.5m前後である。検出面のレベルは標高58.1m前後、柱底のレベルは標高57.6m前後である。

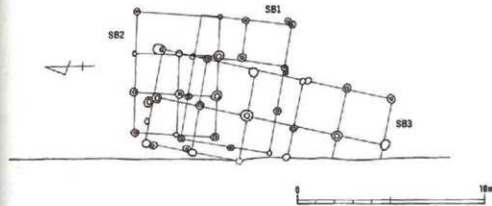
柱穴の掘方は円形のものも多く直径30～45cm前後を測る。柱の直径は柱痕跡の観察や柱材の遺存したのから直径15～18cm前後と推定される。

柱穴掘方には華大の礎が根固めに入れてあるものが見られた。また、P6はSK21の埋土に掘り込んだものである。その他、P6・P7には柱材の芯が遺存していた。

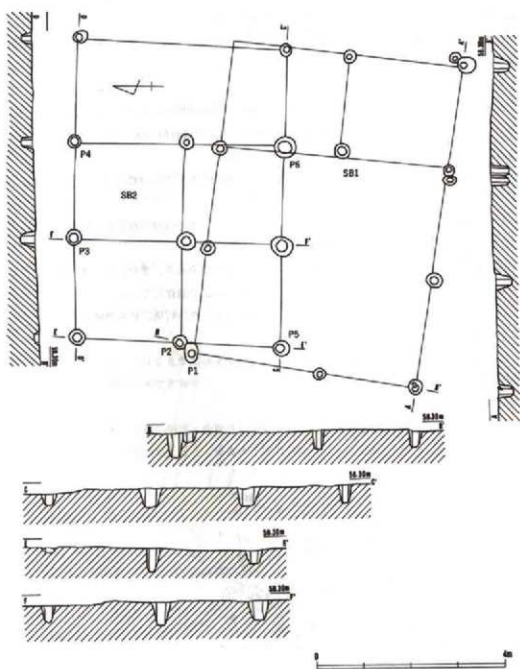
これらの柱材は後述のように樹種を同定することができた。その結果、P8の材はコウヤマキ、P7の材はヒノキであることがわかった。

出土遺物は土師器・須恵器の細片が何片もあるが時期を特定できるものはない。しかし、建物の南東隅にあたるP8はSK17の埋土を掘り込んでいることが確実であるため、この土壌より建物は新しいと考えられる。

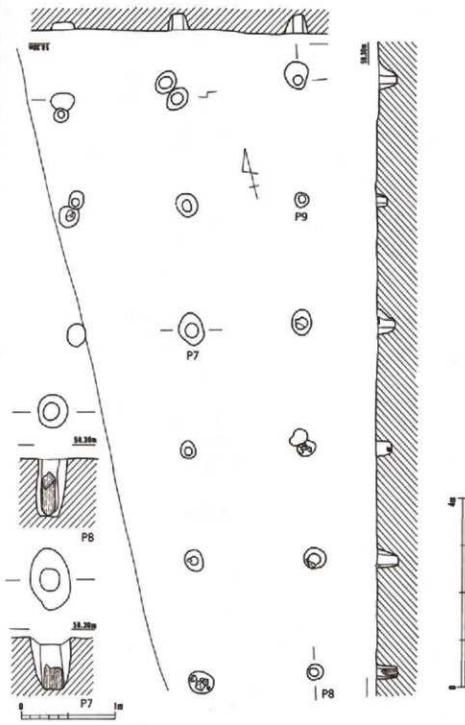
以上のように、SB3はSB1・2に比べるとかなり構造・規模の異なる建物である。どちらかといえばSB1・2は小規模な小屋という印象であるが、SB3は西側にさらに広がれば、屋



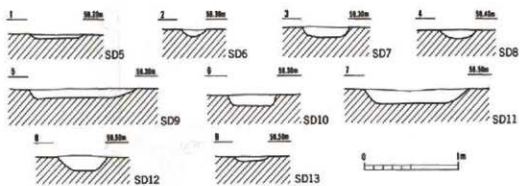
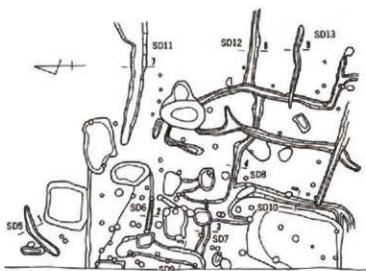
第26区 4・6区の建物 (1/200)



第27圖 SB1・2 (1/80)



第26回 SB3 (1/80) P7・8 (1/40)



第29図 4・6区の溝 (断面 1/40)

敷の中心的な建物と考えてもよい規模である。

4・6区の溝 (第29図)

4・6区には多数の溝が検出された。いずれも浅く、短く途切れるものが多い。ここでは検出した溝の主な断面を提示しておく。溝の幅は0.6～1.0m、深さは0.15～0.2m前後で断面はU字形のものが多い。これらの溝の埋土は褐色シルトで炭を含むものが多く見られた。

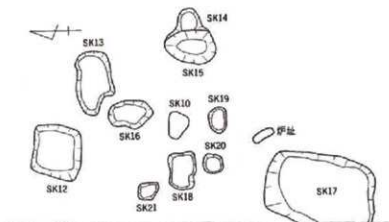
SK10 (第31図)

東側がやや尖る卵頭形を呈した土壇で、長軸長1.75m、短軸長1.2m、深さ0.33mである。土壇の上面には東側に華大の礎が集中して検出された。底からは土師器・須恵器等の遺物が出土している。

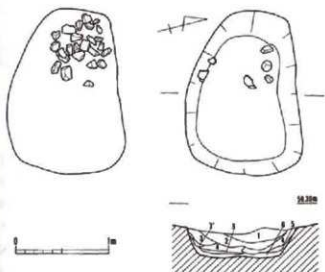
尚、土壌底の有機分を含んでいると思われる第6層については、土壌サンプルを採取し、分析を依頼した(付載)。その結果、No.1の土壌から、高等生物のアミノ酸を検出しており、この分析結果によれば本土壌は墓の可能性も考えられる。しかし、検出状況や周囲の土壌からすると墓とするには疑問が残る。

SK12 (第32図)

規模は長軸長3.4m、短軸長3.2m、深さ0.25~0.27mである。平面形は方形を呈し、大型の土



第30図 4・8区の土壌・伊址



1. シルト質細砂暗褐色黄色ブロック層
2. 暗黄色細砂
3. 褐色シルト質極細砂炭化物若干包含
- 3'. 炭化物層
4. 2よりやや暗色
5. 3よりやや暗色
6. 暗灰細砂混りシルト

第31図 SK10 (1/40)

墳である。土墳底はほぼ平らで、壁はやや斜めに掘削される。出土遺物には土師器皿・小皿、須恵器碗・鉢がある。これらの遺物から遺構の時期は13世紀前半と考えられる。

SK13 (第34図)

東西に長軸を持つ不定形の土墳である。規模は長軸長4.1m、短軸長2.5m、深さ2.5mを測る。浅い土墳で埋土は黄褐色シルト・灰褐色シルトが堆積している。

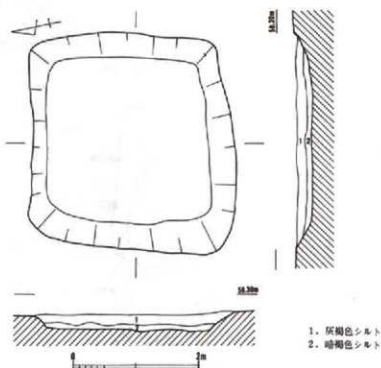
SK16 (第34図)

SK16は長軸長3.1m、短軸長2.1m、深さ0.2~0.3mである。南北に長軸を持つ楕円形に近い形状をした土墳である。両側は中段が2段掘りになる。壁は緩やかに傾斜するもので土墳底はやや南側に傾斜している。出土遺物は土師器小皿・皿、須恵器碗・鉢、瓦質土器羽釜がある。

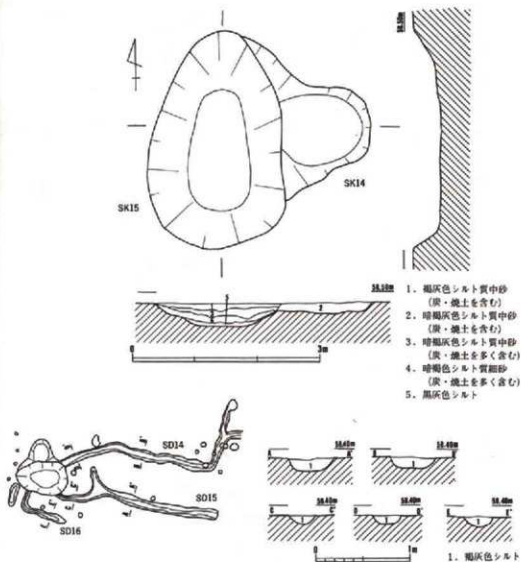
SK14・15・SD14・15・16 (第33図)

SK15は長軸長3.45m、短軸長2.0m、深さ0.35mである。埋土には炭・焼土を多く含んでいた。特に3・4層には大量の炭・焼土の他、地山の土がブロック状に含まれていた。SK15はSK14の東辺に添うようにして検出されたもので、切り合いからはSK14→SK15の順が考えられる。しかし、検出状態からSK15と一連の遺構とも考えられる。

SD15・16・17はSK15に流れ込むものである。幅は30~50cm、深さ15~25cm前後である。



第32図 SK12 (1/80)

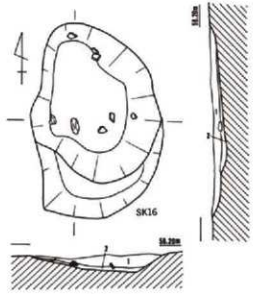
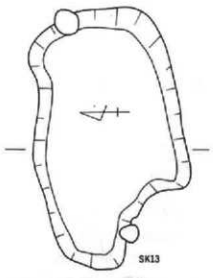


第33図 SK14・15 (1/80) SD14~16 (断面 1/40)

SD14は先端が2段に別れ一方の先端がSD18の手前で途切れるように終わっている。これに対して、SD15は先端がSD18に合流し、さらにSB5に接している。SD16はSK15の西側に合流する。途中で屈曲し、全長4m程が検出できた。

SK17 (第35図)

南北に長軸を持つ長方形の土壇である。長軸長7.35m、短軸長4.7m、深さ0.3mを測る。比較的深い土壇で、南側と東側は垂直に近い壁を持つが、北側と西側の壁は緩やかな傾斜で立ち上がっている。土壇底は平らに穿たれている。



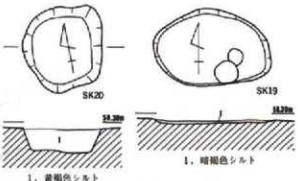
- 1. 黄褐色シルト
- 2. 灰褐色シルト



- 1. 黄褐色シルト 極細砂
- 2. 灰褐色シルト

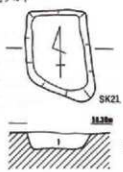


- 1. 暗褐色シルト



- 1. 黄褐色シルト

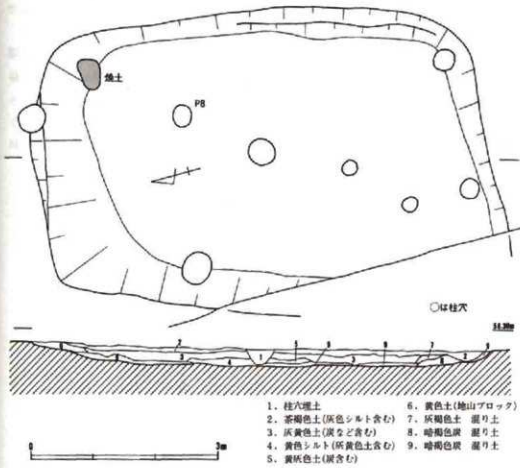
- 1. 暗褐色シルト



- 1. 黄褐色シルト



第34図 SK13・16・18～21 (1/90)



第36図 SK17 (1/60)

土壌内の埋土には焼土・炭が大量に含まれ、少量の土器の細片を出土した。北東隅には壁から底部にかけて焼土が集中している（スクリーントーン）部分が観察され、土壌底自体も火を受けた状態である。そして、焼土が集中する部分周辺には焼土塊が多数出土している。明らかに土壌の一角で火を焚いていたと考えられる。

SK18 (第34図)

土壌の両端にはSB3の柱穴が切り込む。平面形は東西に長い隅円方形で、壁は直に立ち上がる。土壌の規模は長軸長2.45m、短軸長1.8m、深さ0.2mを測る。土壌内には炭・焼土が多く、汚れた土がブロック状に含まれていた。土壌の北東隅には土器片に混じて焼土塊が出土している。

SK19 (第34図)

楕円形の土壌で東西に長軸を持つ。規模は長軸長1.9m、短軸長1.2m、深さ0.05~0.08mを測

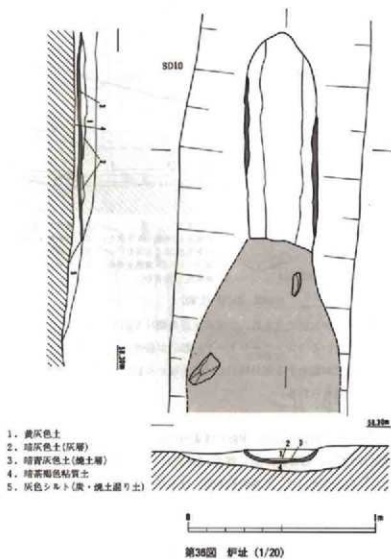
る。遺物は須恵器の筒1点(140)がある。

S K20 (第34図)

不等辺5角形を呈する土壇で、最大長1.4m、深さ0.4mを測る。壁は直に立ち上がり、土壇底は平らに掘削されている。埋土は黄褐色シルトで、炭・焼土を多く含んでいる。規模のわりには遺物が多く出土した。出土遺物には土師器小皿・皿、須恵器碗・鉢などがある。

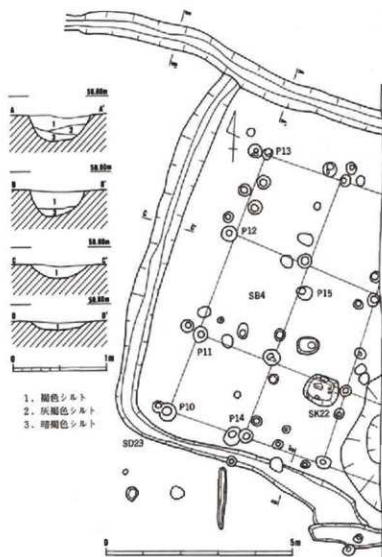
S K21 (第34図)

規模は長軸長1.45m、短軸長1.05m、深さ0.27mを測る。小規模で、浅い土壇である。平面は台形で、南北方向に長軸をもつ。

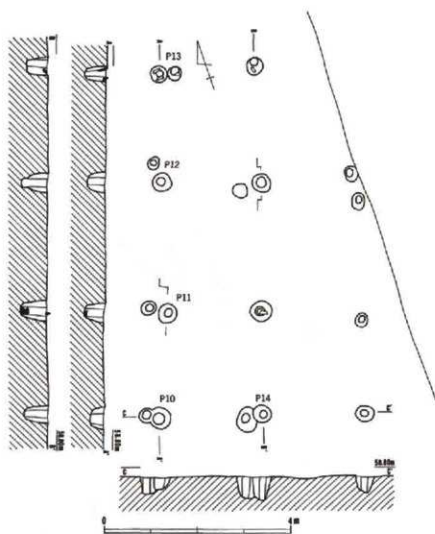


炉址 (第36図)

焼土面が検出され、その前庭部と思われる部分に炭・焼土を多く含んだ層を検出したことから炉址と考えた。この遺構は溝内 (S D10) に納まっており、溝の窪みを利用して構築されている。焼土面の規模は長さ1.1m、幅0.4mを測る。焼土面は細長く火を受けた部分が観察でき、やや赤みを帯びている。厚さは1cm前後である。焼土面の断面はU字形を呈しており、両端は立ち上がっているが、溝の上端面で削平され上部構造は不明である。側壁が存在したと思われる。前庭部分は溝の幅一杯に長さ約0.9mの範囲に広がっていた。



第37図 7区の遺構 (平面 1/100 断面 1/40)



第38図 SB4 (1/80)

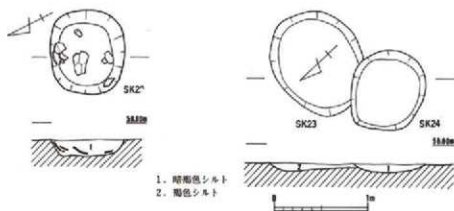
4. 7区の遺構 (第37図)

建物 (SB4) を中心に溝が囲む地区である。建物はさらに東に延びている。また、道路の東側で遺構が検出されたのは7区周辺のみである。

SB4 (第38図)

建物の西側部分を検出したもので、南北3間×東西2間 (7.3m、4.4m以上)、面積32.1㎡以上の規模を持つ総柱建物である。周囲にはSD23が流れており、雨落ち溝として建物に伴っていたと思われる。建物の方向はN20°Eを向いている。

建物の柱間隔は南北2.2～2.3m、東西2.0～2.2mで、北辺の隅を除くと柱間隔に狭長の差は



第39図 SK22~24 (1/40)

小さい。なお、当建物のP10~P14にはそれぞれ近接して同規模の柱穴が見られる。これらの柱穴は切り合うものもあれば隣接しているものもある。形状や埋土の状況から、いずれも建物の前後に掘削されたことは確実である。そして、柱穴はSD23を越えたり、この溝と切り合っているものが見られない。さらに、柱穴のうちP10・P14は近接する柱を切るものである。このことからSB4に先行する建物が存在したと考えられる。ただし、先行する建物は調査区の制約もあって並びを完全に復元するには至っていない。

建物の検出レベルは58.6m前後、柱底のレベルは58.3mである。柱の掘方は円形ないし楕円形のもので、直径30~40cm前後のものが多い。柱の直径は柱穴の断面の観察から、15~20cm前後である。

SD23 (第37図)

SB4の周囲を取り囲む溝である。建物同様、調査区の東側にさらに延びると思われる。溝の西端は道路を跨いでSD2まで流れ込んでおり、排水は道路の側溝に行っていたと思われる。検出状況からこの溝はSB5の雨落ち溝と考えられる。ただし、溝の北側は幅が広く、深いもので、東側からの用水路の役目も果たしていた可能性がある。

溝の幅は40~70cmである。深さは北側が深く、次いで西側、南側の順になる。西側と北側の溝の接合点には段差がある。主として北側を水が流れていたと考えられる。溝の北側は深さ30cm前後、西側が5~20cm前後である。西側から南側にかけて溝は徐々に浅くなるもので、南側の東端では深さ5~7cm程度になっている。

SK22 (第39図)

建物内に検出された土壇で、平面は隅円の方形に近い形状を呈する。直径0.9m、深さ0.18mの規模である。建物と同時期に築かれた遺構と考えられ、中からは土師器・須恵器などの遺物が出土した。埋土は褐色のシルトで炭・糞土を多く含んでいる。

S K23~24 (第39図)

建物の南側に検出された土壌でS K24がS K23を切っている。平面はS K23が楕円形、S K24が円形である。

S K23は最大長1.1m、深さ0.15mで、埋土は褐色シルトである。出土遺物には土師器・須恵器などの遺物があり、時期は13世紀前半と思われる。S K24は直径0.85m、深さ0.2mである。

5. 8区の遺構 (第40図)

S D18に囲まれ、S B5を中心とする遺構群である。建物・溝・土壌からなる。当該地区内にはS K17・S D10なども含まれる。しかし、既に前項で報告しているのでここでは省いた。

S B5 (第41図)

桁行5間×梁行2間(12.5×4.4m)、面積55.0㎡の規模を有している。建物の方向はN72°Wを向く。竪柱構造の建物で東西棟になる。建物の周囲にはS D18が流れ、建物を「コ」の字に囲繞している。

柱の間隔は梁行が2.1~2.3m、桁行が2.2~3.2m前後である。柱通りはほぼ直線に通るが、桁行の柱間隔には長短が見られた。棟の東側2間は桁行が2.2m前後の間隔で、西側はこれより広く3.0~3.2mである。

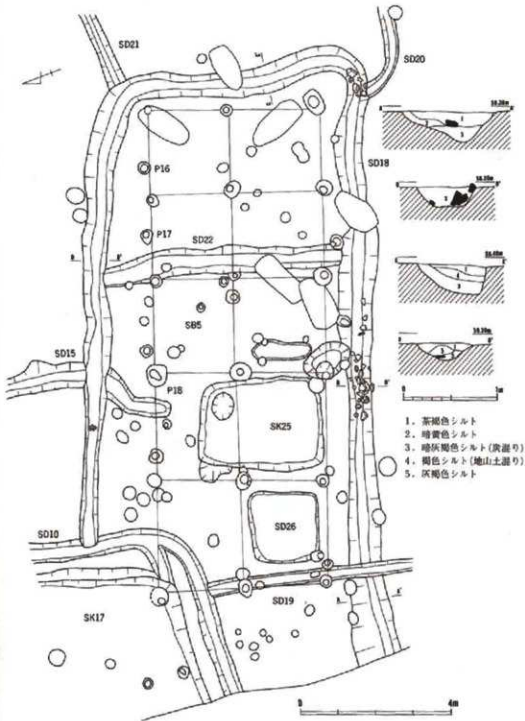
建物の検出レベルは標高58.1m前後で、柱底のレベルは標高57.8m前後である。柱穴の掘方は楕円形ないし円形のものが多く、直径は30~50cmである。柱芯の観察から柱は10~20cm前後と考えられる。

この建物は規模や柱間隔などの構造を比較すると、S B3(検出範囲内)とはほぼ同じと考えられる。東西に細長い構造で、当時の一般的な住居とは趣きが異なる。また、この建物の範囲内にはS K23・24が作られているが、これらの土壌は出土遺物や方向から建物に併存すると考えてよい。後述するように検出状況から作業工房などの機能が考えられ、建物は工房として使用された可能性が考えられる。この建物の出土遺物は細片のため図化できたものはないが、13世紀後半~14世紀前半頃と考えられる。

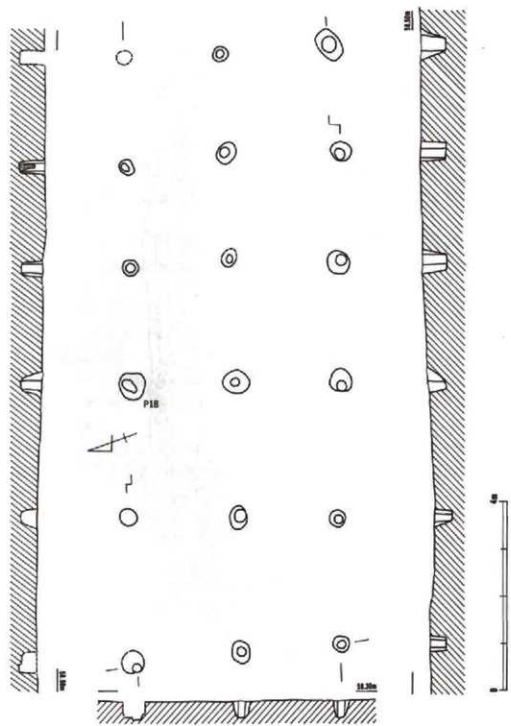
柱穴 (第40・42図)

建物に並ぶ以外の柱穴の中には、柱材の芯(P16)が遺存しているものや、柱の抜き取り痕跡に土師器を埋納したものも見られた(P17)。P16は平面円形のもので直径0.4m前後の柱穴である。柱材の芯の部分が辛うじて残っており、辛うじて樹種を鑑定できた。柱材の樹種は(分析・鑑定)後述のとおりタブノキであった。P17は柱の抜き取りのため西側が拡大して扇形を呈している。

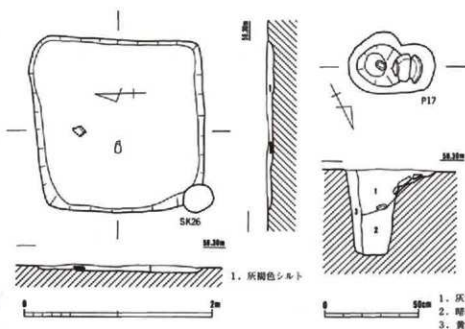
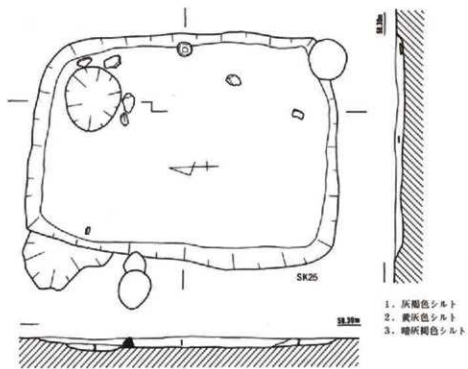
(尚、建物周辺の南東側に多く見られる長方形の土壌は無縁鉄塔の支柱である。これについては後述した。)



第40図 8区の遺構(平面 1/100 断面 1/40)



第41圖 SB5 (1/80)



第42図 SK26・26 (1/40) P17 (1/20)

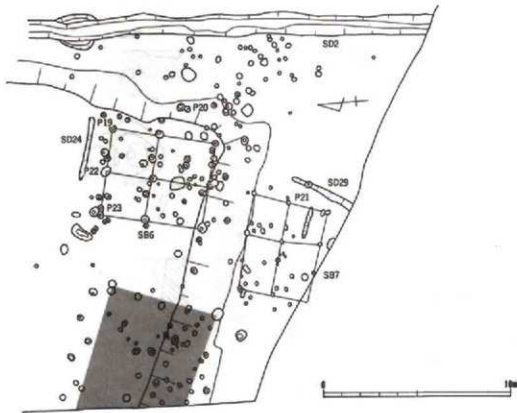
SD18 (第40図)

建物周囲を取り囲む溝である。東西2.1m、南北9.8mが検出された。幅0.6~1.0m、深さ0.25~0.4m前後である。但し、SD18の北西側は徐々に浅くなっておりSD10と重なるあたりではほとんど消滅してしまっている。このためSD10との切り合いを確認することはできなかった。SD19とSD10についても同様である。また、SD18は、南辺に礫を無造作に集中して投げ込んだ所がみられた。これらの礫は拳大から大きいものは人頭大のもので、中には火を受けたものもある。SD18の東辺に取り付くのがSD20とSD21である。

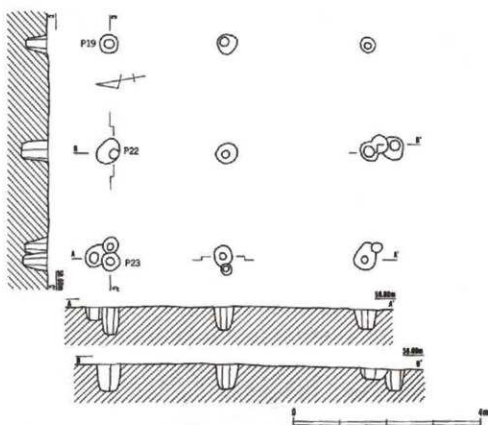
SK25 (第42図)

南北に長い長方形の土壇である。規模は長軸長3.35m、短軸長2.4m、深さ0.08~0.1mを測る。壁は傾斜して立ち上り、底はやや起伏を持っている。北東隅には炭と若干の焼土を含んだ窪みが見られた。浅い土壇である。平面は円形で周囲に人頭大の礫が置かれていた。窪みの規模は直径0.69mである。

SK26 (第42図)



第43図 10区の遺構 (1/200)



第44図 SB6 (1/80)

SK25の西隣に検出した。平面正方形を呈する土坑である。規模は1辺1.8m、深さ0.08mを測る。壁は傾斜して立ち上がるもので、底は水平である。土坑の埋土には炭と若干の焼土を含んでいる。

6. 10区の遺構 (第43図)

多数の柱穴を検出した。建物に復元できたものは、SB6・SB7の2棟のみであるが、実際には未だ何棟かの建物が存在したと思われる。その1つに考えられるのが図のストリーントーンで示した範囲である。

SB6 (第44図)

南北2間×東西2間(5.5×4.6m)、面積25.3㎡の建物である。柱間隔は南北2.4～3.0m、東西2.3mで、南北にやや長い構造を持ち、建物の棟方向はN9°Eを向く。この建物周辺は10m四方の広さで他の場所より30cm程高くなった、壇上地形の上に建っている。

建物の検出レベルは58.4m前後、柱底のレベルは57.9m前後である。柱の断面は円形ないし楕円

形のもので、直径0.3～0.5m前後のものが多い。柱の直径は柱穴の断面の観察から、0.15～0.21m前後である。

建物の周辺には切り合うものも含めると多数の柱穴が検出できた。SB6以外には建物の並びを完全に復元することは出来なかったが、この前後に建て替えが行われた可能性が考えられる。例えば、P23は近接する柱を切っているなど、この建物の柱の周囲に何度も柱穴が掘られた形跡が窺える。

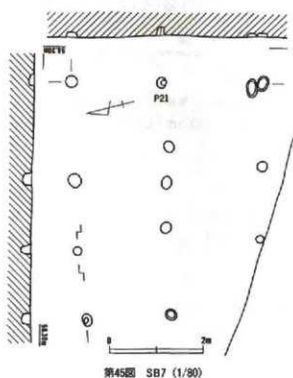
この建物の柱穴から出土した遺物で図化できたものはなかった。但し、時期を辛うじて知ることができる須恵器碗によれば13世紀代と考えられる。

SB7 (第45図)

桁行3間×梁行2間(5.1m×4.1m以上)、面積20.9㎡以上の建物である。建物は南側が調査区の外側に出るため全容は不明である。柱間隔は桁行1.5～2.0m、1.8～2.1mである。

建物の検出レベルは58.1m前後、柱穴底のレベルは57.1m前後である。柱の掘方は円形ないし楕円形のもので、直径20～30cm前後のものが多い。柱の直径は柱穴の断面の観察から、15cm前後と考えられる。建物の方向はN78°Wを向いている。

この建物の柱穴から出土した遺物は土師器と須恵器の磨滅した細片のみで図化できるものはなかった。

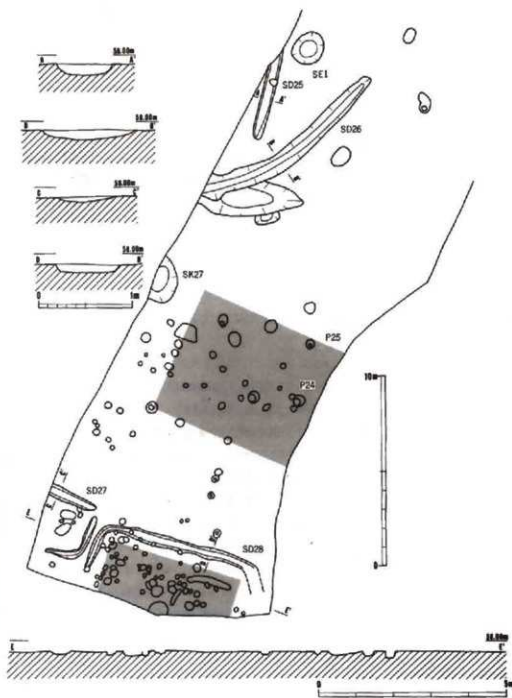


7. 11・12区の遺構 (第46図)

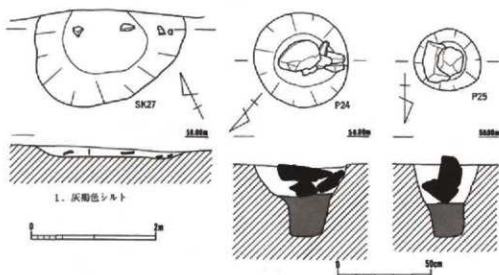
多数の柱穴・井戸・溝・土壌などが出土した地区である。当地区の検出面のレベルは標高57.4～57.8m前後と、C地区の中では最も低い場所に位置する。地形的には段丘の頂部を外れ、谷に下る傾斜面にあたる。

柱穴は建物に復元できるものはなかったが、密に集中している地点が2か所認められた(第45図参照、柱穴の集中箇所は図のスクリーントーンの範囲)。特にこの範囲の内、西端に見つかっているものは、雨落ち溝のSD28を伴っており、ほぼ建物の1辺の規模を予想できる。SD27周辺についても同様に建物区画を想定できる可能性がある。

また、図の中程のスクリーントーンの



第46図 11・12区の遺構(平面 1/200 断面A~D 1/40・E 1/100)

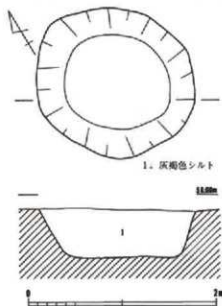


第47図 SK27 (1/60) P24・25 (1/20)

範囲にはP16・P17など礎石や板石を据える柱穴が多い。この他、この範囲には当道跡で、唯一の井戸を検出している。

SE01 (第48図)

本道跡で唯一見つかった井戸で、直径1.67mの平面円形の素掘井戸である。深さは0.5mと浅い。埋土は灰褐色シルトである。また、遺物は土師器の細片が少量出土した。この土師器は中世のものと思われるが、詳細な時期は明らかにできなかった。SD25・26 (第46図)



第48図 SE1 (1/40)

11区で検出された溝である。いずれも北側の調査区外に延びており全容を知ることはできなかった。SD25はSE01付近に検出されたもので長さ4.5m、幅0.9m、深さ0.15mで、断面はU字形を呈している。

SD26はSD25の南側に検出されたもので長さ11.0m、幅0.9m、深さ0.15mで、断面はU字形を呈し、北側から流下しながら東に湾曲している。溝内からは中世の遺物が出土したが、埋土の状況から時期は近世以降の可能性が高い溝である。

SD27・28 (第46図)

12区で検出された溝である。いずれも柱穴の集中

地点を取り囲んで検出された。両溝とも浅いもので、規模は概ね幅0.6～0.7m、深さ0.05～0.15m前後である。断面は基本的にはU字形を呈しているが、各部分で若干形状が異なる箇所も見られる。

出土遺物は土師器・須恵器の細片がある。埋土は褐色シルトに黄色シルト（地山土）が少し混じり、炭も含まれていた。この溝は埋土から明らかに中世の遺構と思われるもので、柱穴群と同時期に機能した遺構と考えられる。このことから、前述したように両溝は建物の雨落ち溝であると考えられる。

S K 27 (第47図)

平面円形を呈する土坑である。北側半分は調査区外のため未調査となった。土壌は浅く、壁は緩やかに立ち上がる。土坑底はほぼ水平に掘削している。

規模は直径2.4m、深さ0.18～0.2mを測り、検出レベルは57.9m前後であるが、検出面は土器の出土状況からかなり削平を受けていると思われる。この周辺はもともと傾斜面であったが、開田のために後世削平したため、以降の上面が破壊されたものであろう。

土坑の埋土には炭と焼土を多く含んでいた。中からは土師器羽釜・丹波焼甕・須恵器鉢が出土している。丹波焼はC地区で唯一の出土品である。

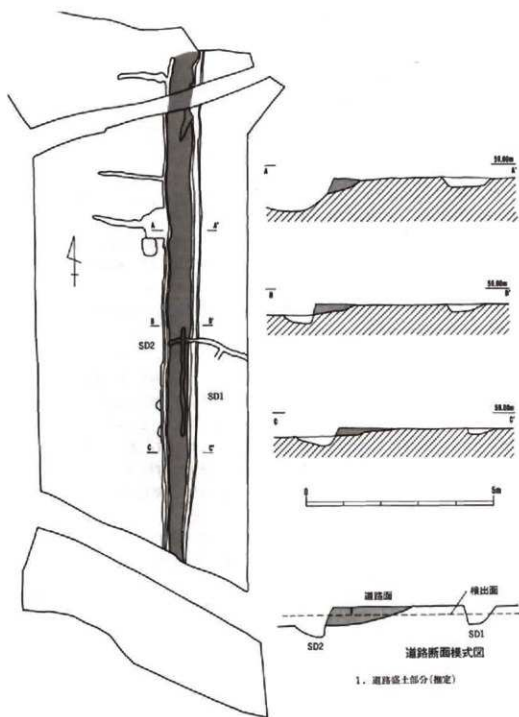
P 24・P 25 (第47図)

当地区には幾つか根石を伴う柱穴を検出した。特に、大きな石を据えるものがP 24・25の2基の柱穴である。P 24は平面円形で、直径0.5m、深さ0.45mである。底から0.25mまでは多くの土器片を砕いて詰め込んでおり、この上に根石を据えた構造となっている。最上部の石は、平石で最も大きいものである。この石は、上面を水平に据えているため礎石と考えられる。P 25は平面楕円形で、最大直径が0.3m、深さ0.39mである。この柱穴もP 24と同じ構造をしている。但し、根石の上面は水平ではなく、柱が据えられるような状況ではない。礎石が既に失われたと考えられる。

明らかに礎石を残しているのはP 24のみであるが、この他の柱穴についても、柱穴内に根石を据えたものがある。柱穴の並びから、建物が復元できないことも考え合わせると、この周辺の建物は礎石建ちの可能性がある。

但し、礎石構造の建物は重量物（瓦）を上層に持つことを想定することが一般的であるが、この建物周辺には瓦はほとんど出土しない。またC地区全体でも瓦の出土量は少数である。このことは、建物が瓦葺きではないことを示している。

また、前述したように周辺は傾斜面にあたり地盤の悪い立地である。しかしこの建物はP 24・25に見られるように、礎石構造にする他、かなりの地盤固めを行っている。このことはS B 7やS D 28内に想定される建物が掘立柱建物であることと相違しており、建物の重要性を窺わせる。



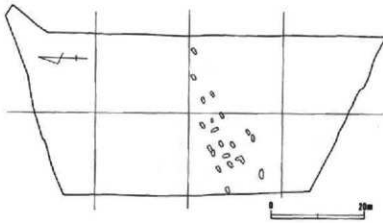
第49图 道路 (断面 1/100)

8. 道路遺構 (第49図)

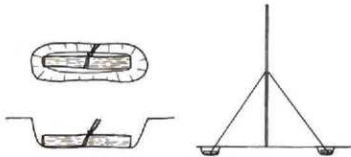
C地区を南北に縦断して道路遺構が検出された。道路の両側には側溝 (SD1・SD2) を伴うもので道路幅は3.5m前後、側溝を含めると5.5m前後である。検出長は全長で81.0mである。側溝はSD1が幅0.7~1.3m、深さ0.15~0.25m、SD2が幅0.8~1.0m、深さ0.2~0.25mである。

この側溝は西側が段下りになる。道路は標高58.6m前後であるが、西側の側溝は約20cm程低くなっている。また、道路普請にあたっては道路面の西側半分に大きな盛土を行っている。

周辺の旧地形は道路の途中から西側にかけてスロープをなしているが、図の模式断面図のように造成工事を施して道路面を確保したようである。但し、この段下りは北に行くほど小さくなる傾向があり、盛土の造成も狭い範囲で納まるようになっている。そして、断面A-A'以北では段差は道路よりも西側に移動している。調査区の中に限れば、この道路が微細な地形を無視し、



第50図 無線鉄塔支柱 (1/300)



第51図 無線鉄塔支柱概念図

直線的にひかれたことが窺える。

検出状況は、耕作土直下で検出されたこともあって余り良くない。さらに、11・12区では検出できなかった。この部分にはSD26が見つかっているが、この溝は近世の可能性のある遺構で、これらによって道路は既に攪乱され破壊されたと考えられる。また、道路の北端1・2区についても、削平が激しく、一部で側溝が検出できなかった。その他、3・4区では近世の水田開発に伴って道路面に凹凸を生じている。

調査区の北側3区・5区周辺では溝1と東西方向の細い溝が接しているものが多い。いずれも前後関係は認められず、同時に機能していた可能性が高い。

道路側溝には多くの遺物を出土しているが、道路上には他の遺構が形成されることはない。唯一例外として、7区のSK23が流れ込むが、道路と併存しているものである。また、側溝SD2の出土遺物を観察すると12世紀～14世紀までのものが見られ、道路は12～14世紀にかけて継続していることが考えられる。

以上この道路遺構は両側に側溝を持ち、調査区内では地形を無視して直線的に設定されていることがわかった。また機能している期間も長期間に渡るもので、本遺跡の評価に大きく関わると思われる。

9. 無線鉄柱支柱 (第50・51区)

C地区の中世の遺構群に重なって昭和初期の無線鉄塔の支柱土塊とこれを支持するワイヤー留めの土塊が検出された。検出された遺構は平面が長楕円形を呈するもので、長さ1.8m、幅0.6m、深さ0.5m前後のものである。土塊の底には長さ1.4m前後の丸太材ないし長方形のコンクリート材を据えていた。丸太材は電柱を切って使用したもので、材の表面にはタール状の付着物が認められた。

この据えた材の中程にはワイヤーを巻き付けているものと、支柱を建てて材に括りつけたものがある。ワイヤーを巻き付けたものは支柱を引っ張り支えるためのもので、支柱があるものは無線鉄塔本体を据えるための掘方と考えられる。

検出された土塊は横列には3個を単位として北東から西南方向に並びようであるが、この並びと関係のない位置にもかなり検出されている。恐らく、鉄塔は支柱を中心として何本かの支持ワイヤーが張られていたと思われる。しかし、現場作業を充分に行っていないので、支持ワイヤーと支柱の単位を復元することはできなかった。

この無線鉄塔は戦前に使用されていたもので、現在は浄谷遺跡の南東の丘陵に移設されている。

第3節 遺物

C地区からの遺物は4・6・8区の土壌群を中心に出土している。遺物の記述は遺構単位に行ない、最後に包含層について報告した。

出土遺物は多種に及ぶが、さらに同一器種のなかにも幾つかの異なる形態が見られた。そこでまず、これらについて形態別の名称を付しておきたい。

土師器は皿と羽釜に2種ずつがある。皿は小を小皿、大を皿とする。羽釜は小さいものを羽釜a、大きいものを羽釜bとした。aとbは技法が異なる。

瓦質土器の鍋は蓋受けが付くものを鍋a、付かないもので内傾しながら短い頸部が直に立ち上がるものを鍋bとする。

以上C地区から出土した遺物には次の器種が存在する。土師器小皿・皿・鍋・羽釜a・羽釜b・壺、瓦質土器鍋a・鍋b・羽釜、須恵器皿・碗・鉢・鉢・壺・甕、丹波焼壺、中国産磁器 青磁碗・白磁小碗・白磁碗、瀬戸産碗である。その他、土鍋、瓦が出土した。出土遺物はコンテナにして30箱分であるが、この内実測した個体は184点である。(なお、瓦・石器・鉄器については別項目を設けた。)

1. 柱穴の遺物

柱穴から出土した遺物は細片が多く図化できたのは15点である。大半が柱掘方に偶然混入した土器の破片である。但し、これらの出土遺物には地鎮めのために入れたもの(P17)や、柱穴の根固め(P22・P23)に入れた遺物なども見られた。

個々には記述していないが、柱穴の遺物は4・6・7・8区に検出された遺構に集中している。ただし、この周辺で柱穴に混入する遺物は細片が多く、8区のP9などの例外を除くと図示できたものは少ない。

P6 (27 第52図)

27は土師器小皿である。口径7.6cm、器高1.1cmである。体部を軽くナデ調整し、底部は未調整である。

P9 (28~33 第52図)

土師器小皿(28・29)は口径7.4~7.8cm、器高1.1~1.4cmで、調整手法は27と同じである。土師器皿(30・31)は口径12.4~12.6cm、器高2.0~3.0cmである。体部の上部2/3をナデ調整するが、底部は指頭痕を残す。

須恵器碗(32・33)は口径15.6~17.0cm、器高4.4~4.6cmである。

P15 (40 第52図)

須恵器碗は口径15.6cmである。

P17 (37・38 第52図)

柱穴の地鎮め祭祀のために用いられた土器である。土師器小皿(37)は口径7.7cm、器高1.5cmである。土師器皿(38)は口径13.3cm、器高3.0cmである。38はやや器高の高くなるもので、やや厚手に仕上がる。

P18 (34~36 第52図)

土師器小皿(34)は口径8.2cm、器高1.4cmである。須恵器碗と鉢がある。碗(35)は口径15.0cm、器高3.8cmである。鉢(36)は口縁部を上方につまみ、やや内面に折り、「く」の字に曲げるものである。口径33.0cmを測る。

P19 (39 第52図)

須恵器碗1点がある。底部と体部の境が丸くカーブし、体部は直線的に立ち上がる。

P20 (41 第52図)

中国産の青磁碗で、外面には蓮弁文を施す。蓮弁には鋸が観察でき、軸潤は浅い青緑色を呈している。

P24 (42~46 第53図)

遺物には土師器鍋・羽釜b、須恵器鉢・壺がある。土師器は2点を実測した。鍋(42)は口径21.6cm、器高3.4cmである。羽釜b(43)は口径37.4cmで、口縁部を外方に折り曲げる。

須恵器は壺と鉢があり3点を実測した。壺(44)は口径18.0cmである。鉢(45・46)は口径26.8~29.0cm、器高(45のみ)10.2cmである。45は口縁部を内面に折り「く」の字に曲げるものである。46は外面の下方にもやや口縁部を拡張している。

P25 (47~50 第53図)

土師器鍋4個体が出土した。口径19.6~22.8cmである。いずれも口縁部を肥厚させるか外方に引っ張るものである。

2. 溝の遺物

SD2・18で多くの遺物が出土した。実測した個体数は43個体である。溝出土の遺物は検出状況から埋土に混じったものが大半と思われる。

SD2 (51~69 第54・55図)

出土遺物には土師器小皿・皿・鍋、羽釜a・b、須恵器碗・鉢・小壺・甕がある。

土師器は11点がある。小皿(51・52)は口径6.9~8.0cm、器高1.2~1.6cmである。土師器皿(53~55)は口径11.0~14.0cm、器高2.2~3.3cmである。54は体部中位から上方を強くナデるもので、器高が高く碗に近い形態である。鍋(57)は口径26.3cm、口縁部を外方に強く引っ張るものである。羽釜a(56)は口径20.8cm、口縁部直下に小さい鈿を貼り付ける。羽釜b(58~61)は口径31.0~34.0cmで、口縁部の下4~5cm前後のところに鈿を貼り付ける、口縁部は端部を外方に引っ張り、内傾した端部上方に面を持つものである。

須恵器は8点がある。鉢(62)は口径26.6cm、器高11.2cmである。口縁部は端部を「く」の字

に折り曲げる。底部は糸切りであるが、磨滅が激しいためほとんど観察できない。碗は平高台が残存するもの(63)と痕跡程度に残るもの(64・65)がある。いずれも底部には糸切り痕跡を残す。63は口径13.0cm、器高4.8cmで、64・65は口径14.8cm、器高3.7cmである。63は10～11世紀前後のものと思われ、最も古い遺物である。小壺(67)は口径15.0cmのもので厚手の製品である。

甕(66・68・69)は口径27.6～43.0cmで、口縁部を外半させ、端部を上下両方に引っ張る。口縁部の外面には面を持つ。甕の外面には平行叩きの痕跡が観察され、内面は板ナデで最終仕上げを行うが、頸部付近では部分的にケズリ調整を施す。なお、161は土填9との接合部分で検出された。

SD14・15 (70～74 第55図)

出土遺物には土師器皿、須恵器碗・鉢、中国産の青磁碗がある。土師器皿(70・71)は口径12.1～12.6cmで、体部上半をナデ調整するものである。須恵器碗(72)は口径16.0cmで、底部糸切りのものである。73は須恵器の鉢で口径30.0cmである。74は青磁碗の底部辺である。内面底部に花模様を印刷する。

SD10 (75・77・80 第55・56図)

土師器皿(75)、須恵器碗(77)と鉢(80)が出土した。75は口径11.0cm、77は口径15.2cm、器高3.7cm、底径8.0cmで、底径が大きく杯に近い器形である。

鉢は口径18.7cmの小型のものである。体部は大きく内湾し、厚手の器壁を保ったまま口縁部上端に面を持って終えている。

SD29 (76 第55図)

土師器鍋1点が出土した。鍋は口径18.4cmで、口縁端部をやや外方に曲げ肥厚させる。

SD7 (78 第55図)

須恵器碗1点が出土した。口径16.2cmである。

SD18 (79 第55図)

須恵器碗1点が出土した。底部に糸切りの痕跡を残す。

SD25 (81 第56図)

口径30.2cmの須恵器鉢である。口縁部を上下に拡張し、底部と体部の境は丸く上がる。

SD18 (82～94 第56図)

出土遺物には土師器皿、甕、須恵器碗・鉢・甕、中国産の青磁碗がある。

土師器は8点がある。全て土師器皿で口径12.0～12.9cm、器高2.6～3.1cmである。いずれも体部上半を強くナデるもので特徴的である。83は口縁端部にさらに細かい仕上げのナデを施している。

甕(89)は口径21.4cmで、口縁端部を外方に「く」の字に折り曲げるものである。

須恵器は4点がある。碗(91)は口径15.0cm、鉢(92・93)は口径22.2～27.8cmである。甕

(94) は口径45.0cmで、口縁部を外半させやや上方に引っ張るものである。

3. 土壌の遺物

土壌は最も多くの土器を出土した。特に、4・6区の遺構に多い。大半の土壌のものは埋土に混入した状態で出土しているがSK10・SK22については底から遺物が出土している。

SK3 (95~97 第57図)

土師器甕、瓦質土器羽釜、須恵器鉢が出土した。土師器甕(96)口径27.0cm、瓦質土器羽釜(97)は口径25.6cmである。

SK1・2 (98~101 第57図)

瓦質土器鍋a・b、須恵器鉢が出土した。瓦質土器の鍋a(99・100)は口径28.2~35.0cmで体部が直線的に立ち上がるものである。鍋b(98)は口径28.0cm、小片のため全体の器形を知ることはできない。須恵器鉢(101)は口径26.0cmである。

SK12 (102~105 第57図)

土師器小皿・皿、須恵器碗・鉢が出土した。土師器小皿(102)は口径7.6cmである。皿(103)は口径11.0cmで両者とも手づくね成形で仕上げている。須恵器碗(104)は口径15.5cm、器高4.8cm、底径7.5cmである。底径が大きいのが特徴である。鉢(105)は口径30.0cmで口縁端部を上方につまむものである。

SK14 (106~110 第58図)

土師器皿・鍋、須恵器碗・鉢がある。土師器皿(106)は口径13.0cm、器高2.3cmである。鍋(107)は口縁端部を鋭く外方に引っ張るもので、口径25.4cmを測る。須恵器は碗・鉢が出土した。碗(108)は口径15.4cm、器高4.2cmである。鉢(109・110)は口径30.0~33.0cmのものでいずれも底部を欠く。

SK16 (111~123 第58図)

土師器小皿・皿、瓦質土器羽釜、須恵器碗・鉢が出土した。

土師器は6点がある。小皿(111~113)は口径6.6~7.8cm、器高1.5~1.8cmである。皿(114~116)は口径12.1~12.8cm、器高2.6~3.4cmである。皿は磨減が激しく調整を詳細に観察出来ないが116のように体部を強くナデるのが特徴である。

須恵器はやはり6点がある。碗(117~121)は口径15.4~16.3cm、器高3.7~5.0cmで器高の割りに底径が大きいのが特徴である。いずれも底部余切りになるものである。鉢(122)は口径26.0cmで口縁部はやや肥厚するものである。瓦質土器(123)は羽釜1点がある。口径23.8cmで、器高11.5cmである。厚手の器壁の上部に断面三角形の罫が貼り付けられている。

SK17 (124 第58図)

須恵器甕(124)1点が出土した。口径48.0cmで、口縁部を上下に拡張するものである。

SK10 (125~135 第59図)

土師器小皿・皿・須恵器碗がある。土師器は3点がある。土師器小皿(125・126)は口径7.0~7.8cm、器高1.2~1.6cmのもので、125は内面のナデの方向が観察できた。皿(127)は1点で口径12.0cm、器高2.6cmである。

須恵器は碗(128~135)が8点ある。口径14.7~16.8cm、器高4.0~5.1cmである。いずれも糸切り底になるもので器高の割りに底径の大きいのが特徴である。

SK18 (136~139 第59図)

土師器羽釜b、須恵器碗、瓦質土器鍋bがある。土師器は羽釜b(137)は、口縁部を欠くが、恐らく底部は短く折れて直立するタイプと思われる。胴部の外面に焼土を軸着させている。外面の叩き痕跡は磨滅のためにほとんど観察できない。

須恵器は碗(138・139)が2点ある。口径16.6・17.0cm、器高4.2~4.9cmである。いずれも糸切り底になるもので器高の割りに底径の大きいものである。瓦質土器鍋b(136)は口径34.0cmの口縁部片である。短く立ち上がる口縁部が特徴的である。

SK19 (140 第59図)

須恵器碗(140)1点が出土した。口径15.8cm、器高4.5cmである。

SK25 (143・144 第59図)

須恵器碗(143)・鉢(144)各1点が出土した。碗は口径16.2cm、器高4.6cm。鉢は口径27.4cm、器高4.1cmである。

SK26 (141~142 第59図)

土師器皿(141・142)2点が出土している。口径11.1~11.5cm、器高3.0~3.4cmである。

SK20 (145~159 第60図)

土師器小皿・皿、須恵器碗・鉢が出土した。土師器小皿(145・146)は口径7.4~7.5cm、器高1.2~1.6cmである。皿は口径10.0~13.4cm、器高2.4~3.3cmである。須恵器碗(154~158)は底部糸切りのもので口径15.0~16.6cm、器高3.5~4.5cmである。鉢(159)は口径5.6cmの小型のものである。口縁部は台形を呈している。

SK22 (160~162 第60図)

土師器皿・鍋が出土した。皿(160・161)は口径10.9~13.8cm、器高1.8~2.5cmのもので、160は底部と体部の境が明瞭でなく器高も低い。但し、両者とも体部の上半部分のみを横ナデして仕上げている。

鍋(162)は口径24.0cmで、口縁部を大きく外方に鋭く引っ張るものである。体部は袋状を呈し、頸部から上は「く」の字に折れる。

SK23 (163~164 第60図)

土師器羽釜b(163・164)2点が出土した。口径31.8~38.0cmである。比較的大きい鈿を貼りつけるもので163は口縁端部を外方に引っ張る。164は口縁部を直立させている。

SK27 (165~172 第61図)

土師器羽釜 a・b、須恵器鉢、丹波焼小壺が出土した。

土師器は3点がある。羽釜 a (165・166) は口径23.0~23.8cmで、口縁部の直下に短く小さな罫が付く。外面の叩き痕跡はナデ消さずに残る。羽釜 b (167) は口径32.0cmのもので、体部は直線的に立ち上がる。口縁部は玉縁状になり外面にはナデの凹凸が残る。罫は口縁部のやや下がった所に貼り付けた。

須恵器は4点で全て鉢である。口径21.8~38.0cm、器高(170) 8.5cmで、口縁部は断面三角形に肥厚している。170の内面底部は磨滅しており、かなり使用されたものと思われる。

172は丹波焼小壺である。口径30.0cmで、器形は算盤玉に近く胴部が下方に位置し、体部を軽く「く」の字状に曲げている。口縁部は「N」字に折り曲げる痕跡を残すもので内外面に指頭痕跡を顕著に観察できる。

4. 包含層の遺物(第62・63図)

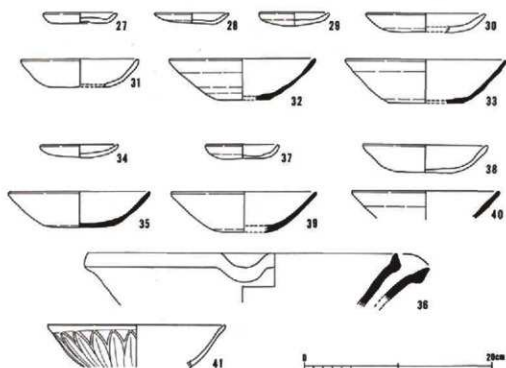
包含層の遺物についても4・6区から出土したものが多く、包含層からの出土遺物には土師器小皿・鍋・羽釜 a、瓦質土器鍋 a・羽釜・羽釜の脚、須恵器皿・碗・鉢、中国産の青磁碗・白磁小杯、瀬戸産の碗、土製品土器がある。

土師器は9点がある。小皿(173~177)は口径7.2~8.3cm、器高1.2~1.5cmである。鍋は口縁部を鋭く外半させるもの(179)、折り曲げるもの(180)、丸く肥厚させるもの(181)などがある。これらの鍋は口径21.3~22.8cmである。羽釜 a (182) は小さな罫が付くもので口径21.0cmである。土鉢(178)は棒状のもので長さ5.2cm、幅1.7cmを測る。

瓦質土器は5点がある。鍋 a (184・185) は口径34.0cmのものである。外面に平行叩き、内面に同心円文のあて痕跡をわずかに残す。羽釜(183)は口径19.8cmを測り、厚手のものである。186・187は鍋の脚である。面取りはせず、断面は円形で、器壁外面の底部付近に貼り付けていたと思われる。

須恵器は13点が出土した。小皿は今回の調査で唯一のものである。口径8.0cm、器高1.4cmを測る。碗は口径15.0~16.0cm、器高4.1~4.9cm、底径5.5~6.8cmで、高台はすでに退化しており、やはり底径の割に器高の低いものが多い。鉢は口径25.6~30.0cm、器高は203で9.4cmである。いずれも断面を肥厚させるが、202のみは口縁部を肥厚させない。この鉢は口縁部がやや内傾し、上端部に面を作っている。

中国産の青磁碗(188・189)は2点がある。188は口径16.9cmで、外面に筋蓮弁模様の施す。189は口径16.0cmのもので、内面に花卉を陰刻する。191は青磁碗の底部である。白磁(192)は小杯で口縁端部の軸を掻き取る、所謂口壳碗である。190は瀬戸産の碗である。内外面に黄緑色の釉を施す。口径18.0cmを測る。



第52図 C地区出土遺物 柱穴1)

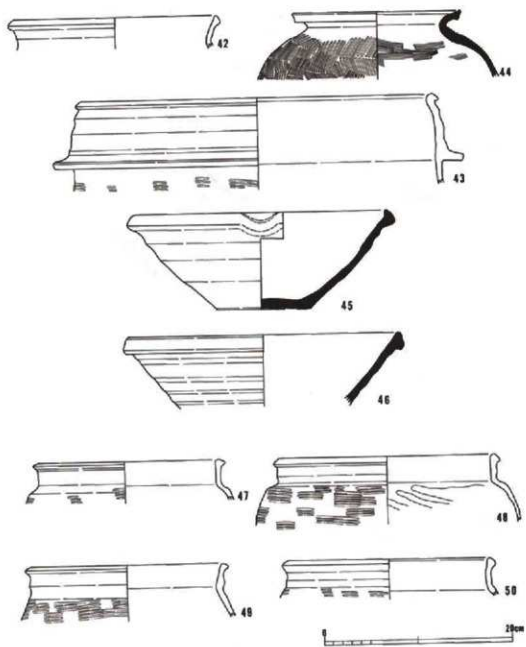
5. 器種の特徴

土師器 - 小皿は口径7~8cm前後で全て手づくねである。皿も手づくねで仕上げる。皿の口径は10cm前後のものや、13~14cmのものもあるが、11~12cm前後のものが主体である。総じて口径が小さく、体部中程の強いナデに特徴があり、全体に重みのある個体が多い。煮沸具は甕形態のものと銅形態のものが出土している。銅には①頸部が「く」の字に折れ、口縁部を外方に突き出すもの、②頸部が直立ないしやや外半するもので、口縁部を外方へ引っ張るもの、③口縁部が玉縁状に近くなり、頸部が短くなるもの3種類が認められる。羽釜には2種があり、①口縁端部を外反あるいは外方へつまみ、鈎が比較的大きいものと、②口縁端部が玉縁状になり、鈎が小さくなるものがある。

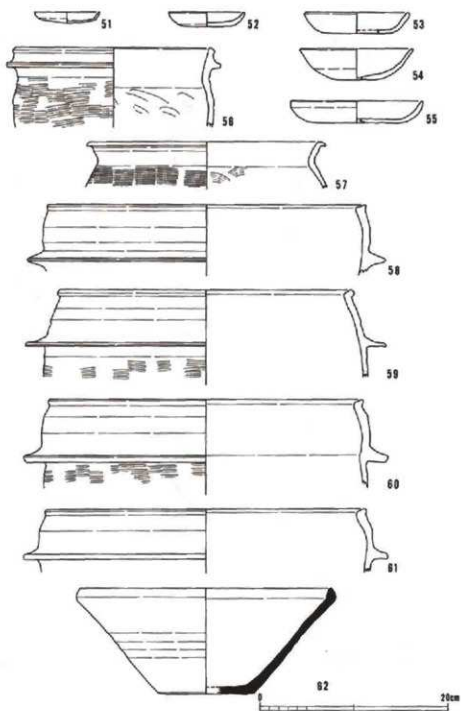
瓦質土器 - 全体に少量であり、煮沸具(銅a・銅b・羽釜)に限られている。銅bは特徴的なもので口縁部から下の形態が不明である。あるいは羽釜の可能性もある。

須恵器 - 甕は高台が無く、器高のわりに底径が大きくなる。鉢は①口縁部を上方につまむもの。②口縁部を上下両方につまむもの。③口縁部が肥厚し、玉縁に近い形状をなす3種類がある。その他、鉢には小型のもの(80)や、口縁部の上端に面を持つもの(202)もある。

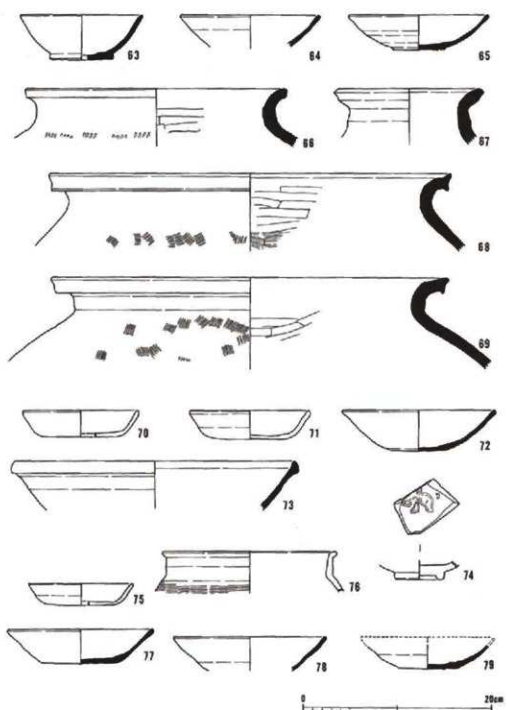
陶磁器 - 総じて少量で、特にSK27で丹波焼が僅かに1点出土している。



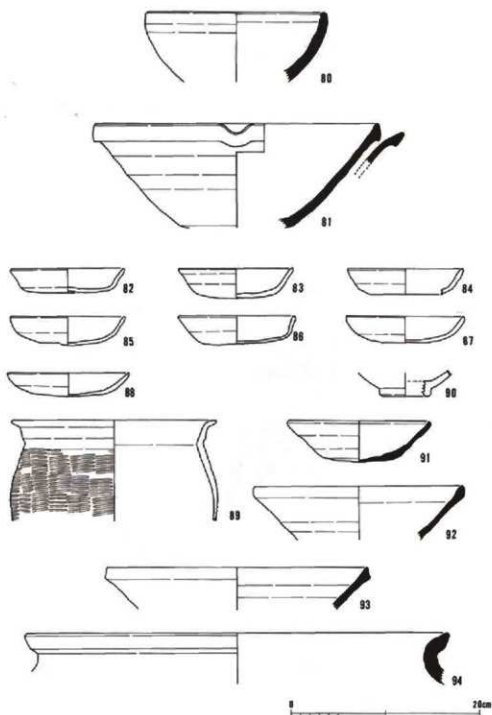
第53图 C地区出土遗物 柱穴2



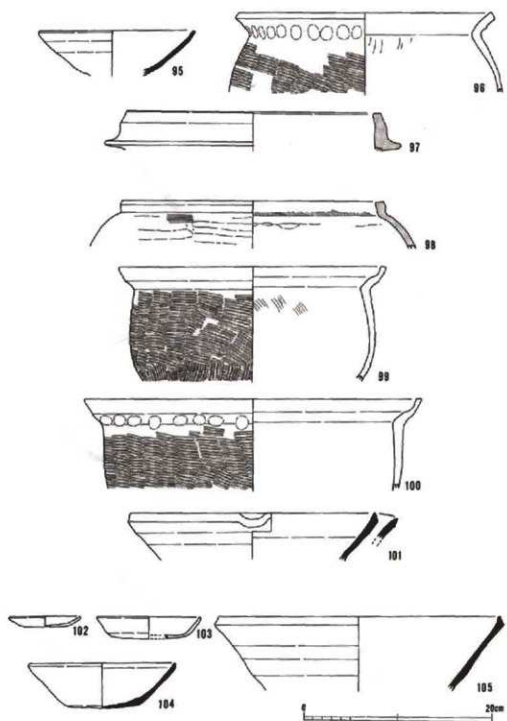
第54區 C地区出土遺物 清(1)



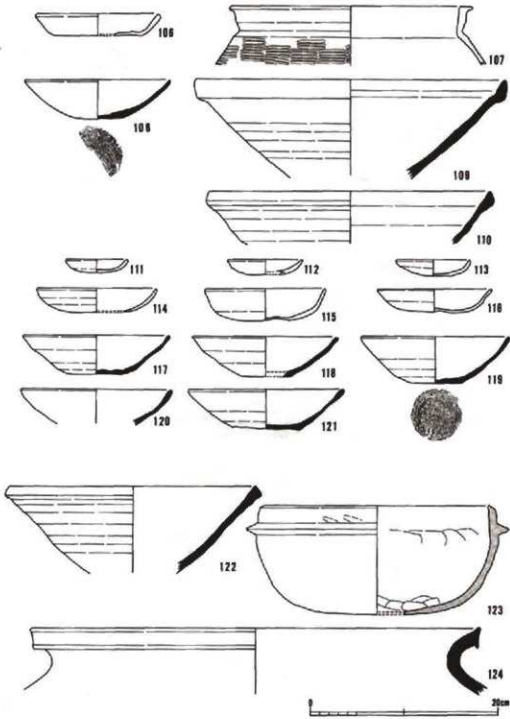
第55图 C地区出土器物(2)



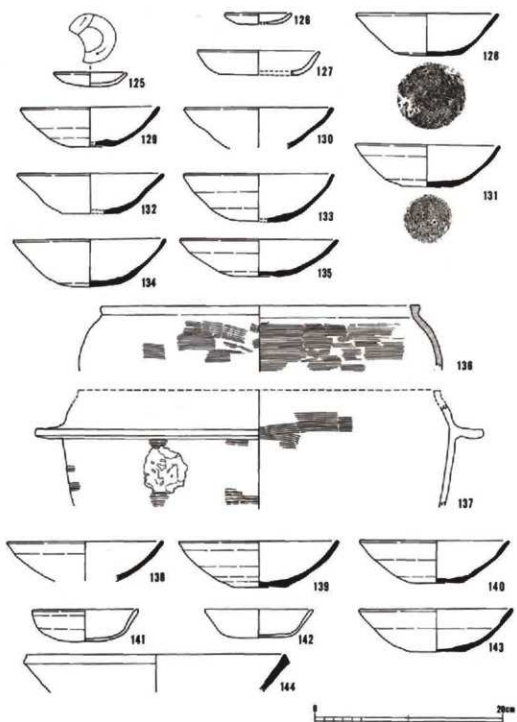
第66圖 C地区出土遺物 清3



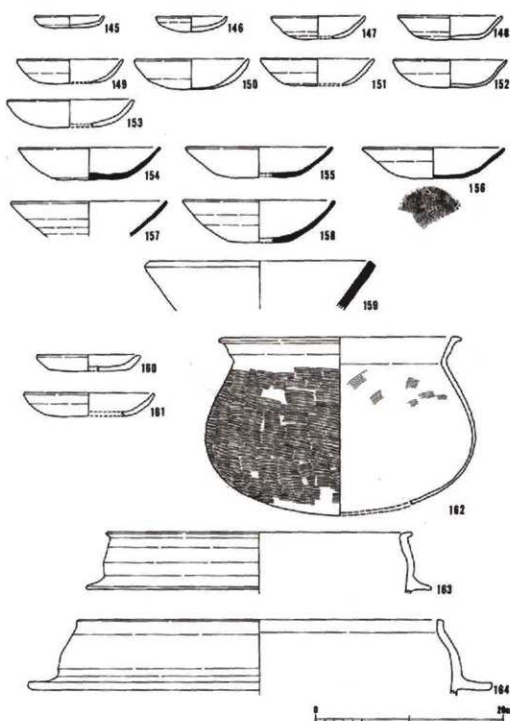
第57图 C地区出土遗物 土器(1)



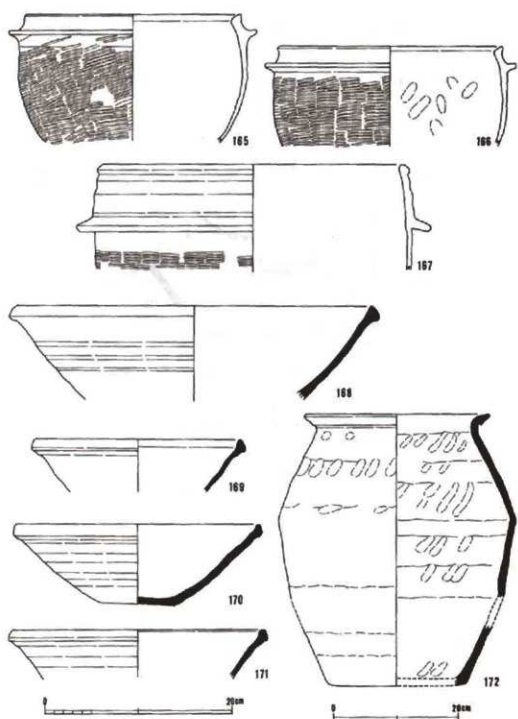
第58回 C地区出土遺物 土壙(2)



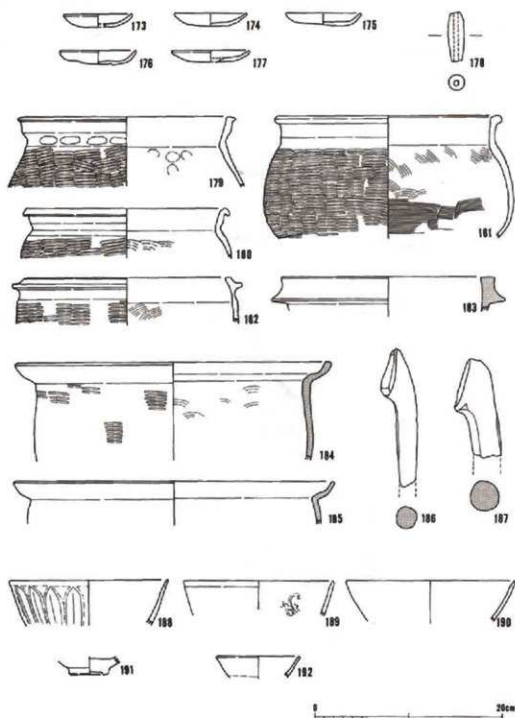
第56图 C地区出土遗物 土器(3)



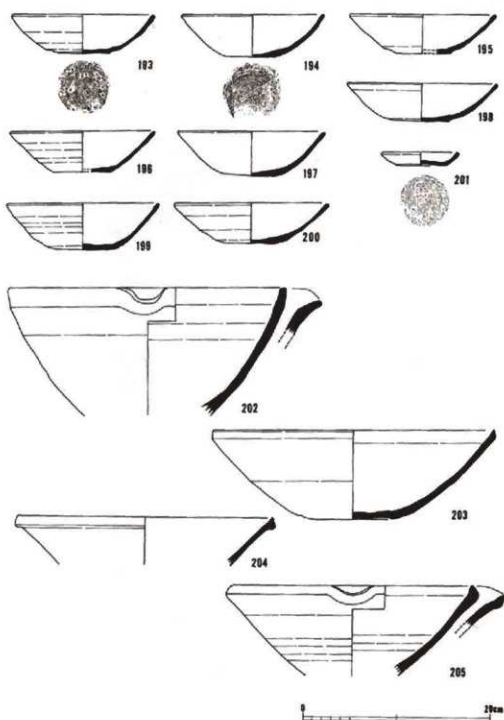
第60圖 C地区出土遺物 土壙4)



第61图 C地区出土器物 土质(5)



第62圖 C地区出土遺物 包含層(1)



第63图 C地区出土遗物 包含层(2)

第4節 小 結

1. はじめに

C地区では多数の遺構が検出され、何時期にも渡って遺構が築かれていたことがわかった。例えば、4・6区で検出されたSB1・2・3は重なっており、明らかに同時期に存在したものではない。そして、周辺に多数見つかった土壌群についても繰り返し掘り返されたことがわかっていいる。そこで、重なり合う遺構群について、時期ごとの整理を行い、その経過について若干述べることにはしたい。ただし、個々の遺構の前後関係は個別の遺構の項で既に述べているので、ここでは概括的な観察を行いたい。

2. 集落周辺の微地形

集落周辺の地形は第64図に示した。(図のコンタラインは10cm単位である。)

C地区は東側から延びてくる微高地に立地している。この微高地は標高57.5mのコンター付近まで広がり、河岸段丘面を下っている。

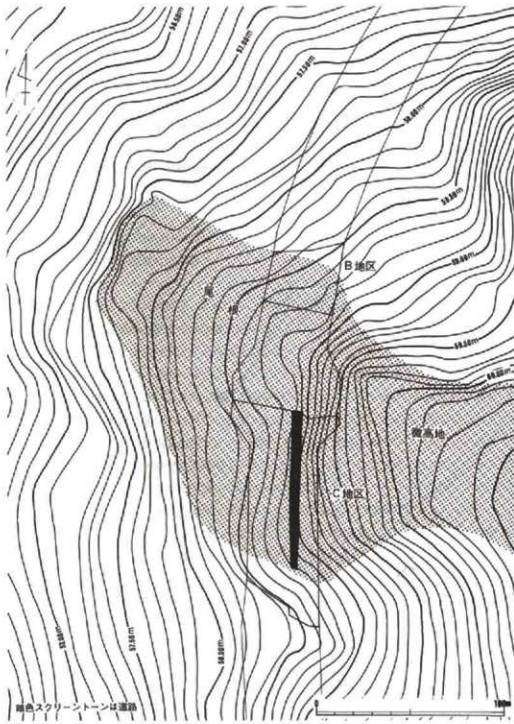
微高地は第64図のように調査地区周辺でやや膨らんでおり、巨視的に見るとB・C地区周辺は平坦な場所が最も広く確保できる位置にある。C地区は微高地の南側に位置し、B地区は北側にそれぞれ立地する。但し、B・C地区とも一部は微高地から下る傾斜面までを含んでいる。

さらに、微高地はC地区道路遺構の標高59.0mラインより東へは序々に上る緩い傾斜地形となる。道路の西側側溝(SD2)の段差は、この傾斜の影響と考えられる。その他、微高地上の尾根がB・C両地区の間を抜けて、東西方向に細長く隆起して伸びている。両地区間に遺構が検出されなかったのは、この尾根の影響であろう。微視的にはC地区周辺はこれらの地形の影響で北東から西南方向に緩く傾斜する。また、C地区の2・4区周辺は小規模な谷状地形を形成し、東側に向かって開口している。このように微高地には細かい起伏があるが、C地区の集落が立地する中心(6・8・10区)は最も平坦地を確保できる適地と考えられる。

C地区の集落は1～9区が微高地の平坦地上にのり、10・11区は南側谷斜面にあたるもので、平坦地とその周辺にも遺構が形成されたようである。そして、微高地の酒地(平坦地)はさらに西側にも続いており、集落はこの方向にも広がっていると思われる。

調査区の東側は傾斜地であるが、道路遺構は東側の傾斜地との地形変換点付近を通過する。これは標高59.0mのコンターに沿うものである。そして、道路がC地区の方向で直線に通ると、当然B地区を通ることになるが、しかしB地区には溝が東西に横断するのみで南北方向の道路が存在した形跡がない。このことは、道路が東に逸れ、標高59.0mのコンターに沿って続くことを示唆している。つまり道路は調査区内では直線であるが、大きくみると地形に沿って通っていることが予想される。

また、遺構の多くは道路の西側に集中しており、逆に東側にはSB4などを除くと遺構が立地



第64図 B・C地区周辺の地形図 (1/2000)

しない。地形も傾斜地との境にあたることから、当時道路の東側は荒蕪地か山野だったのではないだろうか。だとすれば、道路は当時の山野との境を地形に合わせて通っていた可能性がある。

3. 各遺構の時期と遺物の様相

C地区で出土した遺物は前述のように多種のものに渡る。

炊器具には土師器皿・須恵器皿・碗、青磁碗、白磁皿、瀬戸産碗などがある。しかし、量的には土師器皿と須恵器皿が大多数を占めている。

煮沸具には土師器鍋（甕）・羽釜、瓦質土器鍋・羽釜がある。土師器では鍋・羽釜 a・b・c 型が存在する。また、瓦質土器では鍋 a・b・羽釜（これにも 2 タイプが存在する。）がある。さらに、瓦質土器の鍋 b の中でも 99・100 と 184・185 とは技法が異なる。その他、瓦質土器の羽釜 123 は作りも丁寧でやや特殊なものと思われる。

調理具は須恵器の鉢のみであるが比較的多い。

貯蔵具については須恵器甕のみで少量である。

遺物の割合は須恵器・土師器が圧倒的である。須恵器は鉢・碗が多く、土師器は皿・鍋・釜などが多いようである。瓦質土器は全体的に少量である。器種も鍋・羽釜など煮沸具に限られる。実測個体は合計 11 点で全遺物量（実測）の 5.9% を占めている。陶磁器も少量である。中国産の青磁・白磁と瀬戸産の碗などが占める割合は 8 点で 4.4% である。丹波焼に至っては S K 27 で出土した小甕 1 点のみである。

次に遺物の年代について考えてみたい。須恵器の鉢には前述の 3 タイプが見られる。これらは神崎勝氏によれば①が C 1・2 タイプ、②が C 3 タイプ、③が D タイプに相当すると考えられる。土師器鍋については①～③がそれぞれ須恵器鉢に平行すると考えられる。実年代では①が 12 末～13 世紀初、②が 13 世紀半ば頃、③が 14 世紀代である。（上述の○数字は第 3 節 5 項参照）

土師器皿は 13～14 世紀前後のもので、小型化が進んだものである。全体に歪みが大きく、個体差が激しい。須恵器碗では 13 世紀前後が考えられる。そして、須恵器碗は須恵器鉢（D タイプ）とは共伴しないのが特徴である。

以上を総合すると、遺物は 12 世紀末～14 世紀代までのものが含まれ、大きく①～③の 3 時期に分かれる。

これらの遺物を出す遺構については、以下のようなグループに分けられる。

①の時期の遺物を出す遺構は S K 1・2・12 などの遺構群で 1・2・4 区に多い。②の時期の遺構は S K 10・14・16・17・18・19・25・26 など 4・6・7・8 区に多く、最も遺構が多い時期である。③の遺構は P 22・23、S K 27、S D 29 など 10～12 区周辺を中心とする遺構群に集中する。

4. 集落の変遷

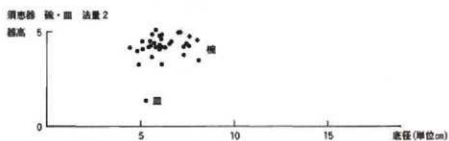
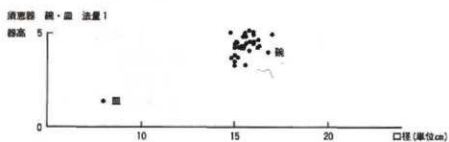
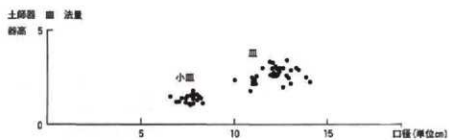
遺物から大きく 3 時期の遺構が存在することがわかった。そこで、各遺構群は①を第 1 期、②

を第Ⅱ期、④を第Ⅲ期と呼称することにする。

遺構群は大きく観察するとC地区の北側から南側へ時期ごとに移動していると見られ、第Ⅱ期が最も盛行する。遺物の量についてもやはり第Ⅱ期に多く、第Ⅰ期段階の遺物は少量である。第Ⅲ期については柱の根固めなどに投げ込まれた遺物が多い。

個々の遺構間の切り合いではSB2→SB1、SB5→SK17→SB3、SK20→SB3が確

表2 土師器皿、須恵器碗・皿法量表



実である。

各建物の時期はSB1・2が4・6区の土壌群と密接にかかわるもので、これらの土壌のいずれかと併存することは確実であるから、第Ⅱ期に機能している。SB4は建物内のSK22の時期に機能していたと考えられるから第Ⅱ期と考えられる。SB5は柱穴(P18)の出土遺物から第Ⅱ期と考えた。SB6は小区画に納まっていることからやはり第Ⅱ期とした。

SB3はSB1・2より新しく、SKI7が埋まった後に建てていることから第Ⅲ期とした。SB7は雨落ち溝と考えられるSD29の出土遺物から第Ⅲ期と思われる。

さらに、10～12区には第Ⅲ期の遺物が集中しているため、この地区の遺構は大半がこの時期のものと思われる。一方、2区の土壌群については、形状やSKI・2の出土遺物から第Ⅰ期と考えられる。

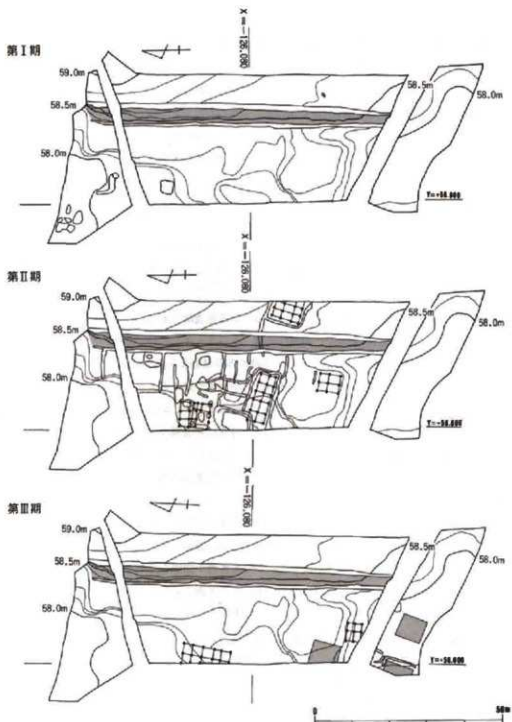
この他、遺構群の変遷を考える材料として次のことも考慮に入れた。①道路遺構、②この側溝であるSD2から流下する溝SD4・12・13・20などに囲まれた区画の存在、この区画をある時期の屋敷区画と考えた。③建物の方位、以上3点である。

①まず、遺構分布に大きな影響を及ぼしているのが道路遺構である。この道路遺構は調査区の中央を分断して一直線に通るもので、両側に側溝(SD1・2)を持つ本格的なものである。道路幅は約2間(3.5m)前後で一定しており、道路の方向は南北を向く。

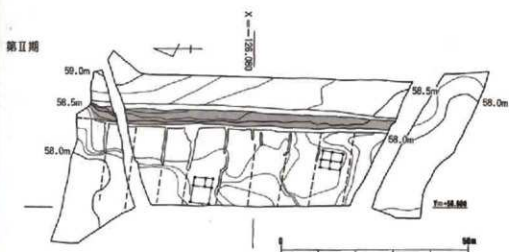
さらに注目されるのが、この道路を境に遺構分布が大きく異なることである。西側には稠密に遺構が存在し、各時期に渡る柱穴・溝・土壌などが分布する。しかし、東側には7区の遺構群を除くと全くの空地である。また、道路内には何時の時期にも遺構が存在した形跡は見られない。これらの分布状況は道路が各時期を通じ継続して使用されたことを示すものである。そして、道路幅が一定で他の遺構に影響されないことは道路自体が各遺構に先んじて存在し、しかも計画的に設定されたことを窺わせている。

②次に問題になるのがSD1・2から流下するSD4・11・12・13・20の存在である。これらの溝は6～8m程度の間隔を置いて同方向に流れている。道路に対してはやや北方向に振るもので直角ではないが、道路側溝と密接に関わり、しかも各溝が間隔を置いて見られることから第66図に見られるような区画の境をなす溝と思われる。この区画にはSB1・3・4などの建物が納まっているため、小規模な屋敷区画を形成していると考えられる。

③建物方位は3つに分類できる。小区画内に納まるSB1・6・7と、この方向に近似しているグループSB3・4・5などと、これに対して建物方向がやがずれるSB2である。但し、前述したようにSB1・3～6は遺物の時期からSB2と同じ第Ⅱ期になる。従って建物は第Ⅱ期に一時的異なる方位のものが登場するが、全体的には変化なく推移していると考えられる。但し、細かくはSB1とSB4・5は若干のズレが生じ、後者の2棟は小区画の中に納まらない。SB2も含め第Ⅱ期は激しく建て替えが行われたようである。



第05図 遺構変遷図 (1/1000)



第66図 第二期概念図 (1/1000)

5. 各時期について

遺構の時期変遷を表したのが第65・66図である。特に第66図では第二期の小区画について模式図を提示した。

第1期

道路が調査区を縦断して設定された時期である。この時期にどの遺構が併存したかは明確にできないものも多いが、当該時期の遺構は少なく、調査区内には集落はまだ形成されていない。総じて遺構は1～4区に集中しているようである。確実にこの時期と思われる遺構は、2区のSK1・2と4区のSK12、7区の土壇25・26など少数である。

道路については前述したように直線であること、幅が一定していること、側溝を伴っていることから集落間を行き来した自然発生的なものではなく、計画的な設定が考えられる。設定にあたってはかなり強力な権力が働いたと考えられる。

また、この時期に見られる土壇群であるが、第二期にも共通して多くが掘削される。2区のものはその形態などから粘土取りの土壇と考えられる。

第2期

最も多くの遺構が検出され、遺物も多い時期である。但し、後述するようにこの時期はさらに細分が可能である。この時期にも道路は維持され、これに面して集落が形成される。

この時期の特徴は粘土取りや、工房として利用された様々な土壇が多く掘削されることである。土壇の機能についてはほとんどが不明といわざるを得ない。しかし、SK18で出土した焼土塊の付着した羽釜や、SK6・7・12・14・17・18などで出土した焼土塊などの存在から、生産活動を行った集落の遺構の一部とも考えられる。但し、鉄滓が出土していないことや瓦の出土量が少数であることから、鍛冶工房や瓦窯の存在は考えにくい。

また、A地区・B地区では多くの粘土取りと思われる土壌が出土している事実があること、浄土寺付近に須恵器焼成の窯（前掲、奈良時代）があることから、C地区においても時期は異なるものの土器生産に関わる生産活動が行われた可能性が有力と思われる。

この時期から建物が登場するが、前述のようにすべてが一時期に存在したわけではない。第Ⅱ期の中で少なくとも3時期の変遷が考えられる。SB2→SB1→SB4・5の順で建物が建て替えられる。SB2は道路に対して直行方向に建つもので、SB4・5についてはSB1と方位を異にし、小区画ともややずれる。これに対してSB1は小区画に納まる。

以上から、調査区の西に展開する小区画は第Ⅱ期中頃になり、これをやや壊しているものは第Ⅱ期後半の遺構群と考えられる。

小区画は間口8～10mの間隔をおいて位置する。区画の西端については明らかではないが、調査区より西外側に続いている可能性がある。このため、1区画の面積は150㎡以上と考えられる。また、小区画の方位はN77～81°Wを向くもので、道路に対して斜行する。

この他、道路が他の建物や遺構群と切り合うものは認められない。そして、建物は道路に隣接して建つことはなく、やや奥まった場所に立地する。

第Ⅱ期後半には、SB4・5などが小区画をややほみ出すようであるが、大きくは小区画を踏襲していると考えられる。

土壌群は第Ⅰ期から存在し、Ⅱ期に至っても盛行している。この傾向は第Ⅱ期の期間を通じ変わらない。従って生産活動は、第Ⅱ期の全期間を通じて活発に行われたと考えられる。

第Ⅲ期

SB3・6や9～12区（南側）の遺構群の大半がこの時期の遺構と考えられる。遺物の分布から観察すると、遺構は10～12区に中心があるようである。そして、集落はこの時期から微高地の頂部から傾斜面及び調査区西隣接地周辺に移動している。

また、建物方位が第Ⅱ期のものと大きく相違しないことから、小区画の屋敷割り自体は廃れるが、小区画の地割り方向は根強く遺存していることが窺える。

そして、建物の一部には礎石構造を持ったものが見られた。地盤の悪い土地に建つためか、P22・23で紹介したように柱の根固めは嚴重である。この建物がどのような機能を持っていたかは不明であるが、この時期の集落の性格を考える上では大きい意味を持つと思われる。（但し、瓦の出土量が少量なため、瓦葺建物は存在しないようである。）

土壌群についてはSK27を除くとこの時期のものは見当たらない。土壌中には焼土・炭などは混じっておらず、第Ⅱ期のものとは様子が異なる。第Ⅲ期になると集落の性格が変化したか、土壌群などの工房が移動したことが予想される。

遺物には丹波焼がわずかに搬入されており、陶器の流通も始まっているのが注目される。

6. 最後に

以上C地区の遺構の変遷を概観し、この地区が13～14世紀前後にかけて大きくは3時期の変遷を経たことが判った。

ここで問題になるのが、大部荘と浄土寺⁽²⁵⁾の存在である。大部荘は東大寺領として立荘されたと言われる荘園で、小野市域の加古川東岸地区がその荘域とされる。平安時代末期に一時衰退するが、治承4年(1180)の兵火で焼失した東大寺再興のための料所として取り上げられる。東大寺再興については勤道僧徒兼房重源上人が活躍したことは有名であるが、大部荘には重源の弟子の観阿が入荘し、荘務を執ったという。

この荘園経営の拠点であり、播磨の別所と呼ばれる浄土教の道場として創建されたのが浄土寺である。浄土寺は大部荘の9カ寺の古仏を集めて建久4年(1193)に草堂(のちの薬師堂)を建立したのが最初といわれる。

浄土寺はA地区の東部約0.85kmにあって、当地区からは北東約1.4kmの距離にある。そして同寺はA地区の北東に開口する谷の深部に立地する。A地区とC地区は0.65kmの距離がある。

C地区の第I期は13世紀前半頃と考えられ、浄土寺の創建に近い時期である。道路遺構はこの時期前後に築かれたもので、遺構の検討から権力者による計画的な設定・普請が考えられた。成立時期、寺の東側谷開口部へ続くことと予想されることなどを考えると、寺の創建に深く関わる可能性がある。

一方、集落は第II期(13世紀中～後半)に成立し、第III期(14世紀代)まで継続している。成立当初(第II期前半)の集落は道路に対して斜行する小区画を並べた景観を呈する。

小区画は6～8m前後の開口を持つもので、長方形を呈している。その後、小区画は序々に廃れるが、第II期の間は基本的には残っているようである。そして、屋敷地は前者・後者とも道路を侵食することはなく、道路と密接に結びついて営まれている。また、小区画は非常に当時としてはコンパクトなもので、密集した形で形成されている。

同じような密集した集落に和泉佐野市の上町遺跡⁽²⁶⁾がある。この遺跡は15世紀代に盛期を迎えるが、屋敷同士がモザイク状に無秩序な関係で接し、間を縫うように道路が通るものである。また、屋敷地個々の面積もやや広い。

これに比べると浄谷遺跡のものは小面積ながら計画的で、しかも直線の道路に面している。自然的に形成した村とは異質な構造といえる。

また、第I～II期にかけては多くの粘土取りや作業場内に掘られたと思われる土壌が存在するなど、他集落に見られない特殊な状況がある。そして、第II期段階では集落内部で何らかの生産活動を行っていることが確実である。

計画的に設定され、生産活動を担っていること。道路に面し、寺への道路上に位置する可能性があること。以上のことから、道のみならず集落についても、浄土寺によって作られ、経営され

ていた集落の可能性があると思われる。

次に第Ⅲ期の集落についても、中心がやや南の斜面地に移動するが道路を跨ぐことはない。このため道路に面していることに違いはなく、建物方向も第Ⅱ期後半と同方向にある。但し小区画は既に廃れており、屋敷地は異なる区画を持っていたと思われる。

そして、問題は多数見られた土壇群が消滅していることである。この時期になると集落の性格が変わるのか、または作業場が移動しているのか、今回の調査では明らかにできなかった。

しかし、道路は機能しており、遺構群がこの道路に面する形で形成されていることは疑いが無い。また、この時期になって浄土寺が築れた記録も見られない。従って、この時期の集落も浄土寺 - 大塚荘 - の経営と深く結びついたものと考えられる。

註

- (1) 山伸道「神出窟における系譜・編年・構造」『神出 神出古窟址群に関連する遺跡群の調査』妙見山麓遺跡調査会 1966刊による。
- (2) 大塚荘、浄土寺の歴史については『兵庫県史 第二巻』兵庫県史編纂委員会 代表今井林太郎 兵庫県 1974刊によった。
- (3) 大塚荘については『播磨国大塚荘現況調査報告書Ⅰ』小野市教育委員会 1991刊、『播磨国大塚荘現況調査報告書Ⅱ』小野市教育委員会 1992 刊など荘園調査の成果が報告されている。
- (4) 岡本圭司「上町遺跡の調査」『関西近世考古学研究Ⅰ』関西近世考古学研究会 1991年刊による。

第6章 その他の遺物

第1節 瓦

瓦は、C地区から軒丸瓦と軒平瓦の破片各1点を含め86点が出土した。その内訳は表3のとおりで、大半が平瓦である。

軒丸瓦は、道路側溝(SD-2)からの出土で、軒平瓦はその近辺に位置する土壌(SK9)の発見である。平瓦の発見は、その多くが包含層中であり、軒瓦を含め、建物に伴うものではなくよそからの廃棄品と考えている。

以下、各類ごとに説明を加えよう。

軒丸瓦(第67図 1)

破片であり、中胴部を欠いている。内区に線書きの単弁蓮華文を施し、外区には棒状の浮文をめぐらせその間に珠文(かなりくずれている)を配置する。丸瓦部とのつなぎは、いわゆる包み込み技法をとる。胎土は精良であり、少量の白色と黒色の中～粗砂を含む。色調は青灰色、焼成は須恵質で極めて堅緻である。復元すると互当径約18cm、八葉の蓮華文瓦となる。小野市浄土寺に同文(同范か)の瓦が出土している。平安時代末から鎌倉時代初頭の時期のものであろう。

軒平瓦(第67図 2)

瓦当面は内区に半截の蓮華文を施し、外区に珠文を配置する。瓦当縦幅は7.5cm、周縁高は0.8cmを測る。平瓦部とのつなぎは、包み込み技法と呼ばれる特徴をもつ。胎土は、クサリ礫を含む礫と粗砂が多く認められる。色調は灰黒色、焼成はいまひとつ良くない。軒平瓦と同様、小野市浄土寺の宝寺院北での表採資料に同文の例があるが、これ以外あまり知られていない瓦である。珠文の配置と間隔から平安時代後期のものと考えている。

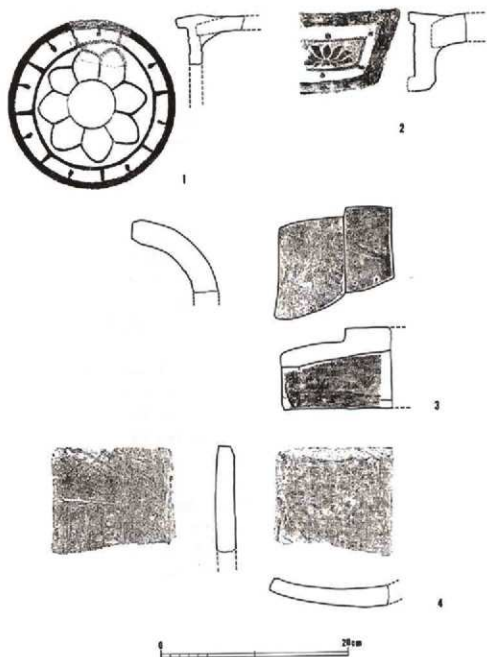
丸瓦(第67図 3)

玉縁の一部が残る丸瓦である。玉縁長は約7cmを測る。玉縁部と側端面の面取りは、浅く幅広くに施している。凸面はナデ調整、凹面には細かい布目の痕跡があり、布をつづり合わせたと思える圧痕も認められる。胎土は精良で、少量の白色と黒色の中～粗砂を含む。色調は青灰色、焼成は須恵質で極めて堅緻である。軒丸瓦(1)と胎土・焼成とも類似し、同時期のものとする。

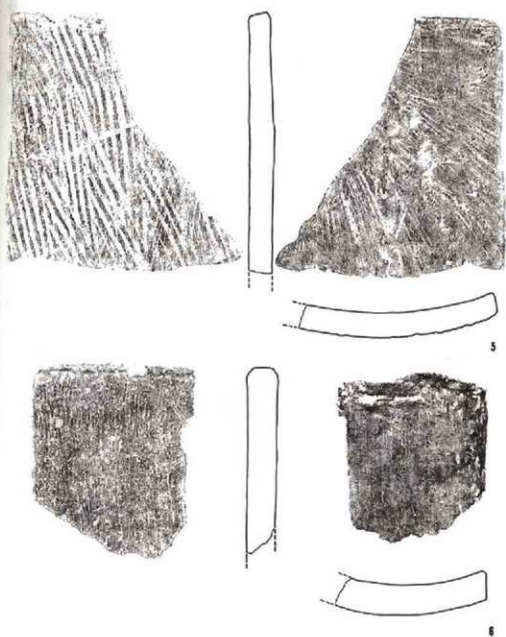
平瓦(第67・68図 4～6)

大振りと小振りのものがあるが、全体の形がわかるものはない。そこで、凸面の叩き目文様と整形技法から抽出したものを取り上げる。(5)のみSK17出土、他は包含層中の出土である。

(4)は斜格子叩きの後、これをほとんどナデで消している。凹面には細かい布目の痕跡があり、端面に浅い面取りを施す。瓦厚は比較的薄く、胎土は精良である。色調は灰白色、焼成は良好である。須恵質。



第67图 C地区出土遗物 瓦1



第66圖 C地区出土遺物 瓦2

(5) は平行条線叩き(4本1単位幅約4cm)が認められる。凹面には細かい布目の痕跡がある。胎土は白色の中へ粗砂を含む。色調は暗灰色、焼成は良好である。須恵質。多量の焼土と炭を含む土壌(SK17)からの出土である。共存遺物には須恵器甕があり、遺構は13世紀後半の年代と考えられる。

(6) は縄目叩きの後、これをナデで消している。凹面には、細かい布目の痕跡がある。端面はナデ調整。胎土は少量の礫と、白色と黒色の中へ粗砂を含む。色調は灰白色、焼成はいまひとつ良くない。須恵質。平安末から鎌倉時代初期の時期のものであろう。

(7 図版34) は櫛状工具で縦方向にナデを施す。凹面には細かい布目の痕跡がある。胎土は精良で、少量の白色と黒色の中へ粗砂を含む。色調は青灰色、焼成は須恵質で極めて堅緻である。軒丸瓦(1)と丸瓦(3)に胎土・焼成とも類似し、これに対応するものと考えられる。

以上、軒丸瓦(1)と軒平瓦(2)から明らかのように当該遺跡の瓦は、小野市所在の浄土寺創建時ないしはその直後のものと推定できよう。但し、軒平瓦(2)と平瓦の一部についてはさらに時期の遡るものもあり、神戸大学所蔵の『播磨浄土寺縁起』にあるように創建時に周辺寺院の瓦を集めた可能性を指摘しておきたい。

その他、平瓦では当地域の特徴なのか、(5)の平行条線叩き目と(7 図版34)の櫛状工具によるナデ(条線文)のあるものが注目されよう。小野市広波庵寺に類例(平瓦I・J類)がある。なお、小野市新部大寺庵寺や加西市殿原庵寺では、丸瓦にこの条線文が認められるという。

註

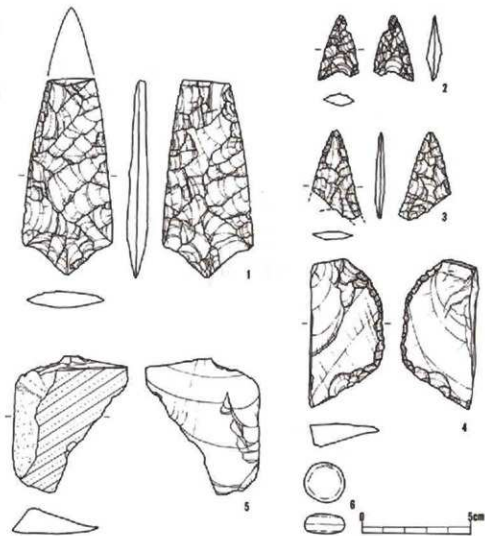
- (1) 島田 清 「播磨浄土寺の一出土瓦」『史迹と美術』第171号 1946年
- 今里 幾次 「小野市長尾寺跡の出土瓦」加古川史学会 1968年
- (2) 小野市教育委員会の所蔵品
- (3) 高井棟三郎 「播磨広波庵寺跡」小野市教育委員会 1980年
- (4) 井内功・廣 「東播磨古代瓦聚成」井内古文化研究室 1990年

表3 瓦種別破片点数

種 類	軒丸瓦	軒平瓦	丸 瓦	平 瓦	合 計
点 数	1	1	9	75	86

第2節 石器・石製品

石器・石製品はA・C両地区あわせて8点出土している。このうち6点を図示した(第69図)。A地区では、有舌尖頭器(1)・石鏃(3)・剥片(5)が各1点ずつ出土している。C地区からは、石鏃(2)・削器(4)・砥石・剥片・礮石(6)が各1点ずつ出土している。これらの遺物は遺構から出土しているものもあるが、遺構の時期とは整合せず、量的にも少ないことから、ま



第69図 A・C地区出土遺物 石器・石製品

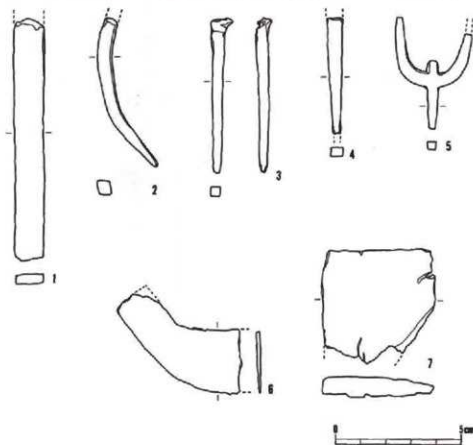
とめて報告しておきたい。

1はサヌカイト製の有舌尖頭器である。先端部が欠損しており、現存長で6.9cm（推定復元長約9.5cm）、幅3.2cm、厚さ0.7cmを測る。形態的には、やや幅広の身部に両側縁が緩やかに内湾する逆三角形の短い舌部が直接付くもので、明瞭な「返し」はもたない。器体表面は風化が進んでいるが、身部には両面とも並列剥離が顕著に認められ、幅に対してかなり薄く仕上げられている。

2は黒色を呈するチャート製の凹基式石鏃である。基部の一部を欠くが、長さ2.3cm、幅2.0cm、厚さ0.5cmを測り、やや厚みがある。

3はサヌカイト製の凹基式石鏃である。基部を欠損しており、現存長3.1cm、現存幅1.8cm、厚さ0.3cmを測る。片面には素材剥片の剥離面を残すが、かなり薄く仕上げられている。

4はサヌカイト製の削器である。長さ5.2cm、幅2.7cm、厚さ0.8cmを測る。打面部から剥離軸に沿って2分した剥片を素材とし、側縁に外湾する刃部を背腹両面からの調整加工により形成して



第708図 A・C地区出土遺物 鉄製品

いる。

5は打面部を欠損するチャート製の剥片で、長さ4.8cm、幅4.0cm、厚さ1.0cmを測る。

6は深緑色を呈する扁平な円盤状の石製品で礫石と考えられるものである。表面は光沢をもち、側面には緩やかながら稜が形成されている。直径1.9cm、厚さ0.7cmを測る。

第3節 金属器

金属器はA・C両地区で11点出土している。いずれも鉄製品で、このうち7点を図示した(第70図)。7がC地区(C-3区SD3)から出土している以外はいずれもA地区から出土しており、ここではまとめて報告する。なお、A地区のものはすべて包含層から出土したものである。

1は小柄で、身部は欠損し柄部のみが遺存するものである。現存長9.6cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmを測る。

2・3・4は鉄釘である。3のみがほぼ完形に近い資料で、他は端部を欠損している。頭部の遺存する3では頭巻で、頭巻部は潰れている。長さは6.1cmを測る。鉄釘はこれ以外にあと1点出土している。

5~7は不明鉄製品である。5は三つ又状の鉄製品で、右側の先端部が欠損している事が左右の対称性から推定されるが、そのほかの部分は欠損の有無を判断し難い。したがって、三つ又の中央部が左右と同じ長さを本来有していたか、またそれぞれの先端部が鋭く尖っていたかなど、この鉄製品の性格を判断する情報にかけている。断面はいずれの部分でも一辺が0.3~0.4cmのほぼ正方形を呈し、長さ4.4cmを測る。6は屈曲する鉄製品で、右半部を大きく欠損する。厚さは0.2cmとごく薄く、断面では下方がより薄くなり刃部となる可能性がある。7は盤状の鉄製品である。上端部の幅4.5cm、厚さ0.8cmを測る。

第7章 まとめ

今回の浄谷遺跡の調査では以下のことが明らかになった。

A地区

- ・ 8～15世紀に渡る土壌群と溝を検出した。土壌群は粘土採掘穴の可能性が高い。

B地区

- ・ 土壌群と東西方向に調査区を横断する溝を検出した。

C地区

- ・ 12世紀末～14世紀代に渡って3時期（第Ⅰ～Ⅲ期）の遺構群を検出した。
- ・ 遺構の性格は第Ⅰ期段階は粘土取りの土壌群が検出され、第Ⅱ・Ⅲ期には集落が営まれる。
- ・ この集落に面して側溝を持つ道路が調査区を南北に横断する。道路は第Ⅰ～Ⅲ期にかけて継続するもので、集落は常にこの道路に面して機能する。第Ⅱ期段階が最も多くの遺構が検出でき、遺物も多量に出土している。集落の盛期と考えられる。
- ・ 第Ⅱ期の集落のある段階には道路に面した、幅6～8mの小区画が設定される。また、この時期は集落内部に多くの土壌を伴い、生産活動を行っている。生産活動の内容については、鉄滓が無く瓦が調査区内から多く出土しないため鍛冶工房や瓦生産は考えられない。土器生産の可能性が最も高いが確証はえられなかった。
- ・ 道路及び集落はその発生から衰退に至るまで一貫して、大郎荘・浄土寺と深く結びついて機能したと考えられる。

分析・鑑定は
公開していません

南山古墳群

第1章 概要

第1節 遺跡の環境

市場の南山古墳群は小野市市場町字南山に所在する。小野市内には古川町に同名の南山古墳群が存在していることから、必要がある場合は、大字の市場を冠して呼称することにする。

加古川の中流域の左岸には、標高150m、比高100m以下の丘陵が広がり、その中を東条川・万勝寺川・山田川・桜谷川そして美濃川といった大小の河川が西流して加古川へと流れ込んでいる。これらの河川に挟まれた丘陵上には、小野市域・三木市域とも多くの古墳群が作られており、この市場の南山古墳群もそのひとつである。南山古墳群は山田川と桜谷川に挟まれた丘陵上にあり、東から西へ伸びる尾根上に立地する。この尾根の北端を流れている山田川は約1.5km西流して、加古川に流れ込んでいる。

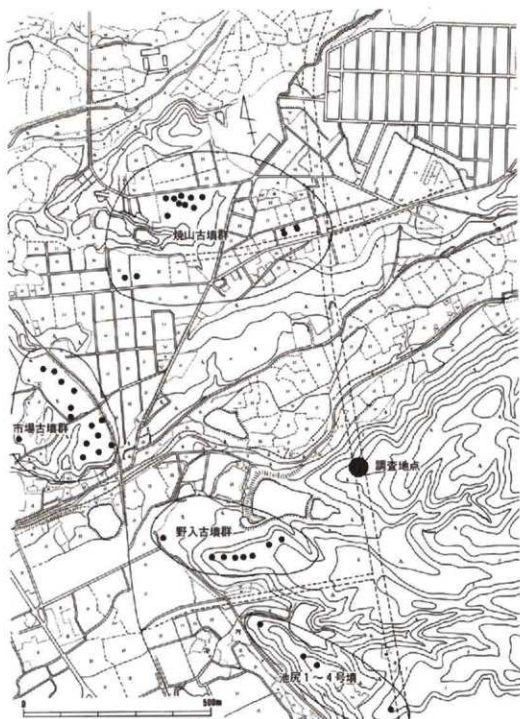
調査地点は尾根先端から約150m東に入り込んだ位置にあり、調査地点からの眺望は北側の山田川流域の谷内と、更に北側の焼山古墳群の乗る丘陵が望まれるに過ぎない。古墳群はこの尾根の先端にも広がっているものと思われるが、尾根の先端からも西の加古川流域への眺望はあまり良くない。

この尾根の更に南側の尾根筋には古墳時代後期の8基の古墳が連なる野入古墳群（市場町字南山）や5基の古墳が知られる池尻1～5号墳（池尻町字水ノ平・東山）があり、ここからはちょうど折れ曲がった加古川の流域や対岸の丘陵まで眺望が広がる。この野入古墳群や池尻1～5号墳は発掘調査はされていないものの、直径6～13m、高さ1m内外の小型の円墳で木棺直葬を内部主体に持つものとされる。但し、野入1号墳のみは直径15m、高さ1.4mの円墳で、横穴式石室を内部主体とするものとされる。

山田川を挟んだ北側の低平な丘陵上にはやはり古墳時代後期の焼山古墳群が存在する。竪立貝式の前方後円墳2基を含み、小規模・低墳丘の円墳100基に及ぶ古墳群であったが、現在では14基のみ残存している。木棺直葬を内部主体に持つものであるが、箱型の木棺の痕跡を初めて検出できたことも学史上に残る遺跡である。この古墳群は7支群にわけられるが、同様の支群として考えれば、この市場の南山古墳群も同じ市場町の野入古墳群や池尻1～5号墳を含めた一支群として考えることができる。

焼山古墳群の乗る丘陵の加古川に面する先端部には、現在では14基が残る市場古墳群が存在する。この古墳時代後期の古墳群も直径10m、高さ1m以下の小円墳が主体を占め、木棺直葬を内部に持つものである。

参考文献 小野市教育委員会『小野市遺跡分布図』小野市文化財調査報告書第12冊 平成4年



第1図 遺跡の位置

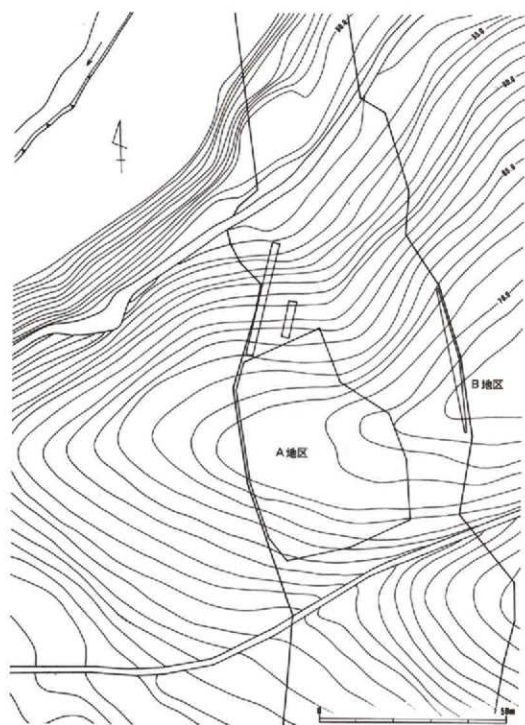


图2 南山古墳群調査地図

第2節 調査に至る経緯とその経過

確認調査

昭和63年に兵庫県教育委員会社会教育・文化財課の池田正男・平田博幸・西口圭介によって当該地に確認トレンチが入れられた。その結果、3ヶ所で古墳の周溝状の落ち込みが確認され、内1ヶ所では須恵器も出土した。また別の地点では土師器皿の包含層を検出した。

ところが連絡の不徹底のためか、西口がその約1ヶ月後に二次確認調査に訪れたところ、当該地の東側を大きくカットして工事用道路が作られていた。約20mもの崖面をもって作られた切り通し部分は当然遺跡は破壊されていたし、崖周辺も崩壊の危険があると判断されたためさらに崩す必要があった。翌日、吉田昇・平田の応援を得て、崖周辺を重機によって掘削し遺構の有無を確認した。その結果、尾根の頂部で溝状の落ち込みが確認できたが、そのほとんどが既に破壊された部分に延びており、全容は把握できなかった。古墳の可能性もある。

全面調査

以上のように、全面調査にはいる段階で、古墳群の乗る尾根の南北両側には道路の橋脚や路線敷設が既に完成しており、さきに述べたように当該地の東側を大きくカットして工事用道路が作られていた。当初は確認調査で遺構・遺物の検出が見られた西側の部分についてのみ全面調査をおこなう予定であったが、東側部分でも最大約3mの幅で元の地形が残されていたため、この部分も調査対象として取り扱うこととした。

その結果、今回の発掘調査で破壊部分の両側で古墳が検出されたことから、既に失われたこの部分に別の古墳やその他の遺構が存在したことはまちがいない。兵庫県の文化財保存の第1頁に記される焼山古墳群のすぐそばで、またしても遺跡が破壊されたことは開発側共々強く戒める必要がある。

以上のような状況下で全面調査がおこなわれ、切り通し部分の西側（尾根の先端側）をA地区（約1872㎡）、切り通し部分の東側の地区をB地区（約44㎡）とした。またA地区の北側に更に2本のトレンチを設定して遺跡のひろがりを確認した。

発掘調査の担当者は以下の通りである。

確認調査 池田正男 吉田昇 平田博幸 西口圭介

全面調査 西口和彦 別府洋二（調査補助員 小谷五郎 小谷義男）

第2章 A地区の調査

第1節 概要

A地区の全面調査範囲は南北最大長約66m、東西最大幅約41mを測り、尾根筋を挟んだ南北の両斜面も調査対象に含んでいる。標高は約63m～70mの範囲である。

A地区は北側が比較的急斜面であり、遺構の存在する可能性は低いと思われたため、幅2mのトレンチを2本(長さ約32m・約11m)設定して、遺跡が更に広がるかを確認した。その結果、遺構は全く確認されず、また土器等の遺物も流れ込みと思われる遊離した形で数点出土したにすぎない。古墳等はこの北側の斜面には作られず、遺跡の範囲も尾根上に止まることが確認できた。

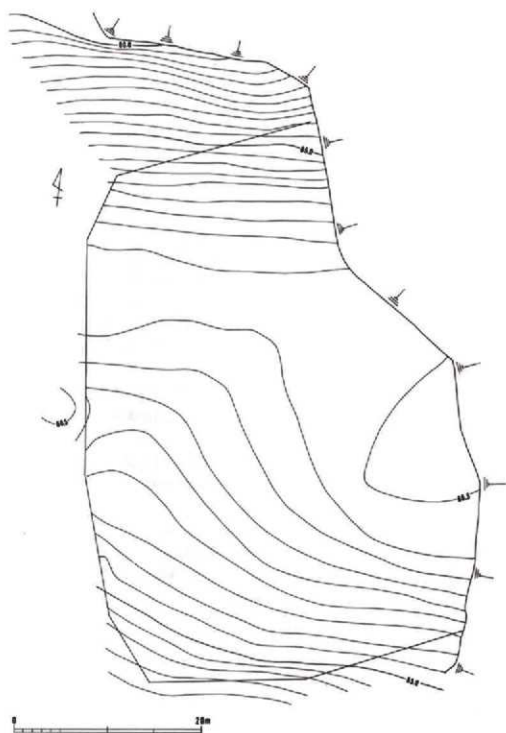
A地区の南側は北側と比べると緩やかな傾斜を持ち、北東から南西に向かう小さな谷が入り込んでいる。そのため尾根筋は調査区西半では細く馬の背状になる。調査前及び確認調査によって、調査区西端のほぼ中央にそのほとんどが調査区外となるが古墳状隆起(1号墳)が、また小谷の谷頭で尾根筋が最も細くなった位置に低い古墳状隆起(3号墳)の存在がわかっており、3号墳では確認トレンチによって周溝と思われる落ち込みから須恵器が出土している。また、小谷内からは土師器の皿が出土しており何らかの遺構の存在を示していた。調査区の東半部は尾根上の平坦面が南側に広がるため何らかの遺構の存在が予測されたが、二次確認調査の際には何ら遺構が確認されていない。

発掘調査は全て人力によって実施したが、小谷内を除くと腐食土を除去するとその直下が地山となり、検出できた遺構も浅く、本来深く掘られていた遺構は流失或いは削平されている可能性が高いと推測できた。

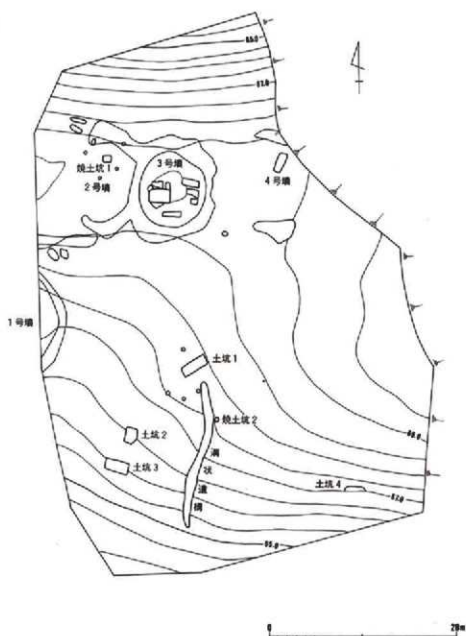
発掘調査の結果、最高所の尾根筋から南側の緩斜面にかけて、散漫ではあるがほぼ全面で遺構が検出され、また南斜面の小谷を埋める包含層からは古墳時代の須恵器や中世に属する土師器皿や銅片が出土した。調査区の東半部の尾根筋が広がる部分では、精査したが遺構は検出できなかった。

検出できた遺構には古墳、溝状遺構、土坑、柱穴状遺構、焼土坑がある。

尾根筋上には先の3号墳の東西に連なって2号墳・4号墳を検出し、A地区では合計4基の古墳を検出したことになる。1号墳は大半が調査区外であるため周溝のみの検出、また2号墳は3方の周溝を、3号墳は全周の周溝を検出したが、明確な埋葬施設は検出できなかった。4号墳は木棺直葬の主体部(土坑5)を検出したが、主体部の南北で不明確な落ち込みを検出したのみで明確な周溝をめぐらしたのではない。



第3图 A地区调查前地形图



第4図 A地区遺構配置図

第2節 遺構

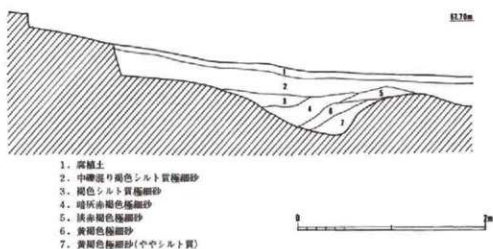
1号墳

1号墳は前述の通り、調査区外にそのほとんどがあるため、周溝のみの調査となった。発掘調査前でも墳丘東側で約1m、西側で約0.5mの高さを測っている。

今回の発掘調査で検出できた他の古墳と異なり、尾根の最も高い頂部ではなく南側斜面に立地する。南斜面の小谷状地形の西側の標高約67m～68.5mに位置し、調査区内での墳丘の規模は、南北約11m、周溝の幅約2m、周溝底からの高さは約1.5mを測る。周溝は斜面上方では明確に検出できたが、下方ではあまり深さをもたず不明確なものとなる。

出土した遺物は、周溝上層では後世の土師器皿や須恵器片が見られるが、溝底付近の墳丘斜面からは須恵器短頸壺（第15図1）が1点出土したにすぎない。一部分掘削した墳丘上からは遺物の出土は見られなかった。

以上のように、一部分の調査のみであったが、直径約11m、高さ約1.5mの円墳であることがわかった。他の2～5号墳と比べて墳丘が高いことが特徴であるが、他の2～5号墳が尾根の頂部に立地し、墳丘が流失或いは削平された可能性が高いのに対して、この1号墳は小谷内の斜面上に立地するため墳丘が高く残されていたのかも知れない。また、内部主体が石室である等の構造の差異によるものかも知れないが、2～5号墳との関係や周辺の古墳群の状況からも木棺直葬の可能性が高い。



第5図 1号墳土層断面図

2号墳

2号墳は尾根の頂部の標高約69mに立地しており、周溝のみが検出された。直径約8mの円墳と推定できる。周溝の幅は1.7~2.3m、深さは25cm足らずで、埋土は礫混じりの暗灰色極細砂である。但し、北側・南側の溝では礫の混入は少ない。

3号墳と東の溝を共有しているが、円弧を描く周溝が2号墳墳丘側にくいこんで掘られていることから、3号墳が後出するものと思われる。西側は明確な溝をもたない。墳丘は溝底から1m弱の高さで、盛土は全く残存していなかった。そのためか、主体部は検出できなかった。削平あるいは流失したものと考えられる。木棺直葬を主体部とするものであろう。

遺物は須恵器片が周溝内から数点出土したが、図化できるものはない。3号墳と共有する周溝から出土したものは全て3号墳のものとして取り扱った。

焼土坑1

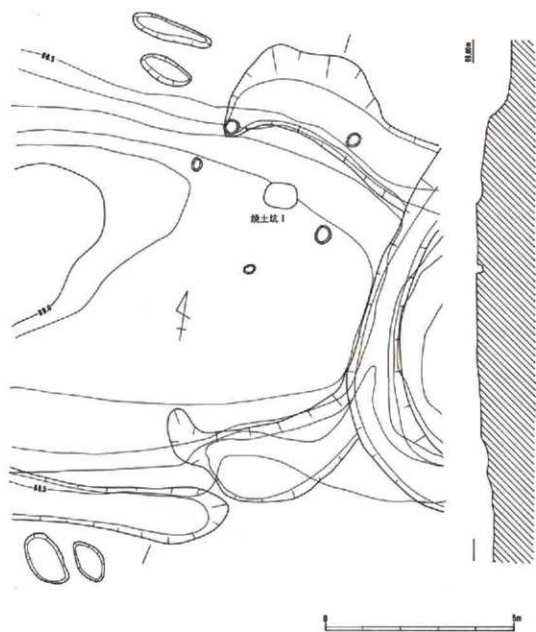
尾根の頂部の馬の背状の平坦部にあり、2号墳上で検出できた。直径約90cmの楕円形のもので、地面を掘り込んで作られたものではない。この焼土坑1から0.9~1.8m離れた周辺では5基の柱穴状の遺構が検出された。直径は25~50cm、深さは40cm内外である。内2基は2号墳の周溝埋土上から切り込んでいる。竈穴住居跡の可能性も考えられたが、古墳との先後関係や時期を決定できる遺物等は出土していないため、性格は不明である。

3号墳

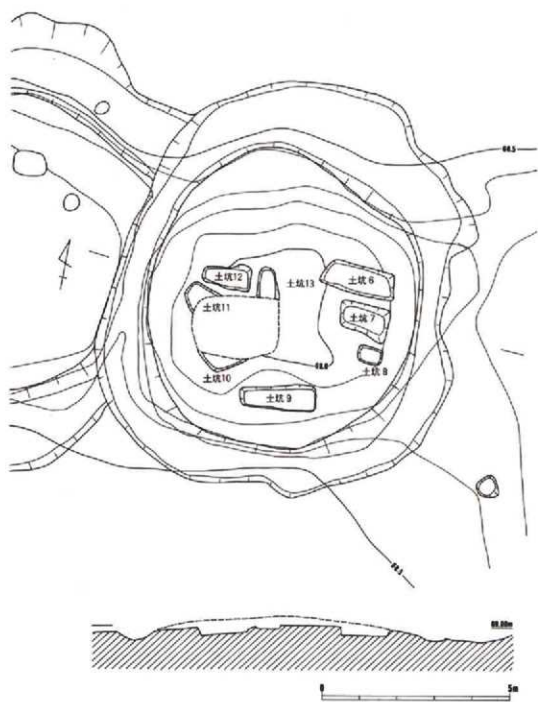
2号墳同様尾根頂部に立地し、南側から小谷が入り込むため尾根が最も幅を狭める部分に構築している。今回調査できた古墳の中で唯一、全周囲巡らせている周溝を検出できた。

墳丘は南北約8m、東西約7mの円墳で、周溝底から墳丘頂部までの高さは約65cmを測る。周溝の幅は1~2.5m、深さは約20cmである。西側の溝は2号墳と共有し、3号墳の溝が深いことや2号墳墳丘側に挟り込んでいることから3号墳が後出するものと思われる。周溝の埋土は上層は小礫がレンズ状に堆積しており、下層は小礫混じりの暗灰色極細砂である。

墳丘上は一部重機の爪跡が残されており、地山が露出していた。小礫を多く含む盛土の厚さは最高で約25cmを測る。墳丘上を精査したところ、不明確ではあるが、小礫を含む灰褐色極細砂の単一埋土をもつ8ヶ所の大小の土坑を検出することができたが、全て墳丘の周辺部に不規則に配置し、内3基は攪乱坑に切られている。土坑6は約200cm×75cmの不整な長方形を呈しており、底面は平らではない。土坑7も約135cm×75cmの不整な長方形を呈している。土坑8は小型のもので、約65cm×45cmの長方形を呈している。土坑6~8は墳丘の東端に長軸方向を東西に揃えて約50cmの間隔をおいて並んでいる。土坑9は墳丘の南端に長軸を東西方向にして検出され、約205cm×70cmの長方形を呈している。土坑10は隅部分が検出されたに過ぎないが長軸1m以上の長方



第6图 2号坑



第7圖 3号墳

形を呈するものと思われる。土坑11も攪乱坑で過半を失っているが、長軸1m以上の長円形を呈するものと思われる。土坑12は長軸を東西方向にして検出され、約130cm×60cmの不整な長方形を呈している。土坑13は墳丘のほぼ中央部で長軸を南北方向にして検出され、長軸80cm以上の長円形を呈している。

これらの土坑の深さは約15cm内外の浅いもので、地山の黄褐色シルト質極細砂をも切り込んでいる。しかしながら土坑底は平らではなく、また遺物は全く出土していない。確實な古墳主体部と考えられる4号墳の土坑5とは構造、内容とも異なっている。このことから当古墳の主体部として取り扱うことには無理があり、本来の主体部は既に失われたものと考えられる。

遺物は全て須恵器で破片の状態で周溝内から出土した。2号墳と共有する溝から出土した遺物は当古墳出土のものとして取り扱っている。図化できたものは有蓋高環4点と環蓋1点であるが、他に環の薄片も出土している。

4号墳

4号墳は尾根筋の2・3号墳に連なって検出された。但し、東側は工事によって失われており、南側も一部削平されている。

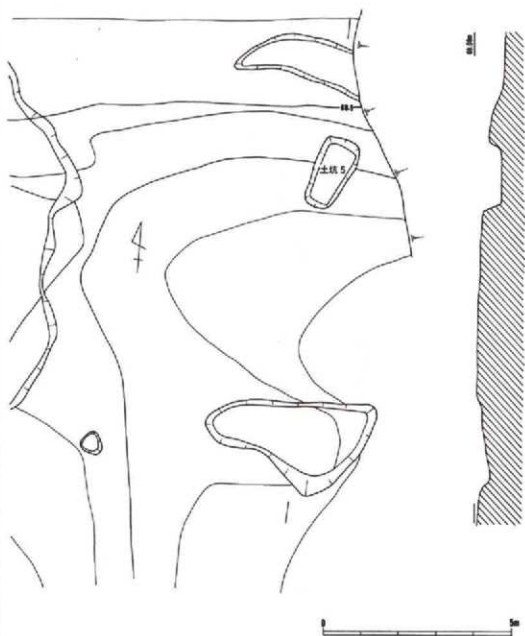
古墳を限る溝は南北の両側で検出できたが、尾根を切断する方向の溝は検出できなかった。墳丘は南北約8.5mで、北側の溝底から墳頂までの高さは約70cmである。2・3号墳と同様円墳であろう。溝の埋土は黄灰褐色極細砂であり、3号墳などは異なり小礫をあまり含んでいない。墳丘には盛土は残っていなかった。

墳丘の中心からやや北によった位置で、尾根筋と直行する方向に長方形の土坑(土坑5)を検出した。土坑5は長軸約206cm、短軸約80cmを測り、地山面から検出したにもかかわらず、深さ約48cmの樹根をもち、検出できた他の遺構に比べてしっかりしたものであった。

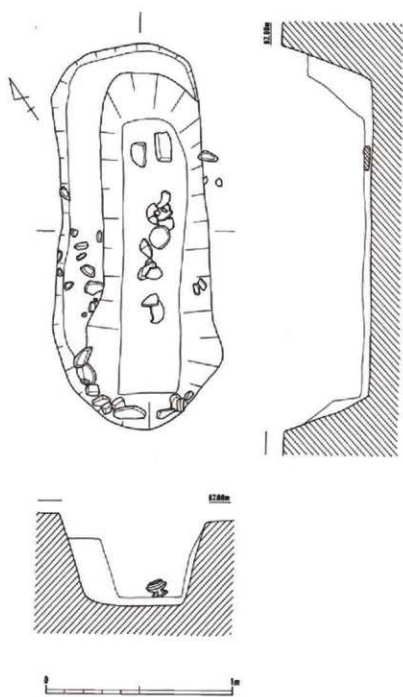
土坑の内部に木棺の痕跡を検出することができた。棺内の部分は暗褐色極細砂で充填されていたが、棺外の埋土は黄褐色極細砂の地山に近似するもので、そのなかに華大の垂角礫を多く入れ込んでいる。棺痕跡の平面形は上部ではいびつな形であったが、底部では約145cm×35cmの長方形を検出していることから箱形の木棺であると推測できる。木棺は墓坑の中央ではなく南東隅側によせて収められていた。

棺底の北側では2枚の厚さ5cm程で約15cm×5cm大の板状の石を約5cmの間隔で並べた形で検出した。これらの石は墓坑底に接しており、枕石の可能性はある。

棺内の中・上層からは須恵器製の破片や有蓋高環やその蓋の破片が出土しており、中層以下ではほぼ完形品のものも含めて数個体分の有蓋高環やその蓋、壺が出土した。おそらく棺上や墓坑上にあつたものが木棺の腐朽とともに落ち込んだものであろう。中・上層からはこの他須恵器製の胴部破片が出土している。



第4図 4号墳



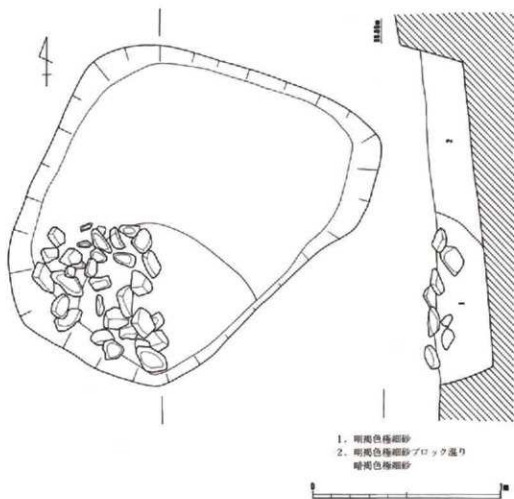
第9圖 土坑5 (4号墳主体部)

土坑 1

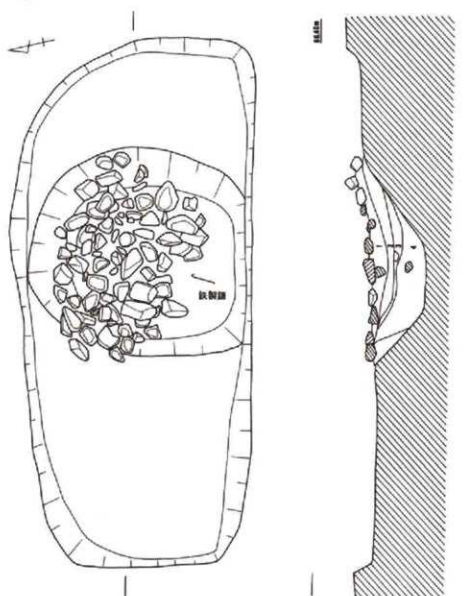
小谷内の谷筋から東に寄った位置で検出され、等高線に直行する方向に長軸を持つ。約3.2×1.3mの小判形を呈する土坑で深さは10cm弱と浅く、埋土は細かい炭化物であった。床面は明確には火化していない。床面は平坦だが、斜面上方と下方との比高差は23.5cmある。

土坑 2

丘陵の南斜面に立地し、小谷状地形内の東斜面で検出できた。約1.4m×1.8mのいびつな長方形の平面形を呈しており、長軸を等高線と直交方向に持つ。斜面下方の土坑内短辺側を埋土の上



第10図 土坑 2



1. 灰褐色極細砂
2. 黑灰色極細砂 (灰·炭)
3. 赤褐色極細砂 (壤土)
4. 明褐色細砂



第11圖 土坑3

から更に直径1mほど掘り込み、準大の亜角礫を入れている。礫は上層に多く見られた。角礫中
 や下から土師器皿片が出土している。

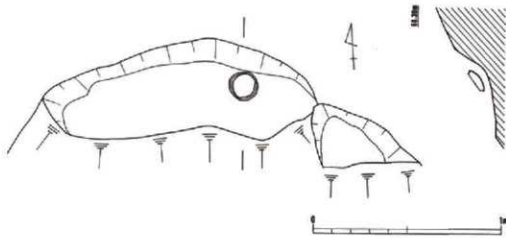
土坑3

土坑2の斜面下方2mで検出できた。約1.2m×2.8mの隅丸長方形を呈しており、長軸方向を
 等高線に平行して持つ。隅丸長方形土坑の深さは約10cmと浅いが、ほぼ中央部に深さ約30cmの円
 形の土坑を更に掘り込んでいる。隅丸長方形部分の埋土にも亜角礫がかなり認められたが、円形
 土坑部では特に埋土層で集中した形で亜角礫が入れられていた。埋土や角礫中から土師器皿片
 や鉄製鎌の破片が出土している。土坑2・土坑3は長軸方向等は異なるものの、同様の性格を持
 つ遺構と思われる。

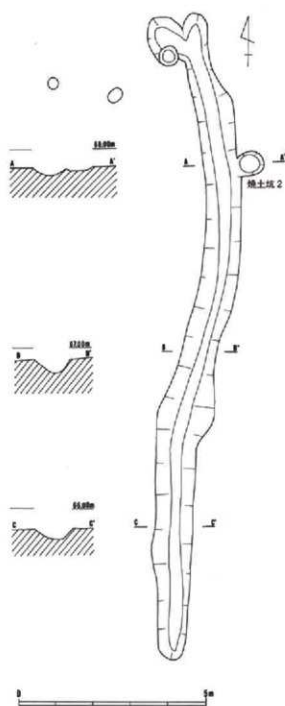
土坑4

南側斜面の比較的急な部分で検出された。調査区内の最高所から約3m下がった位置にあり等
 高線に沿った形で斜面をカットし、平坦部を作っている。但し斜面下方は失われている。

検出できたのは長さ約2m、最大幅約45cmの弧状を呈する落ち込みであり、斜面を約20cm掘り
 込んで幅約35cmの平坦面を作っている。東端はさらに一段下がるが、斜面上方の弧状を呈するラ
 インは一連のものである。土坑のほぼ中央部で、壁面に沿う形で須恵器杯が1点出土している。
 古墳周溝や住居跡の可能性もあるが、眺望の悪い谷内の斜面にあるため墓地や居住には好立地と
 はいえないことから土坑として取り扱った。



第12図 土坑4



第13図 溝状遺構・焼土坑 2

溝状遺構

尾根の南斜面、小谷状地形の東端で南北に等高線に沿った方向で検出できた。検出できた全長は約17mであり、上端は土坑状に枝分かれて終わるが、下端は不明確なものであるため更に延びる可能性がある。最上部と最下部との比高差は約3mである。

溝の幅は約1mで、深さは深い部分で約35cmである。断面形は皿状を呈している。埋土は土坑2・3に類似しており、大量の礫の垂角礫を投入したような状況であった。この垂角礫はこの地山に層となって含まれるものである。また、溝のほぼ中央部では、最大で50cm方形で厚さ10cm内外の板石が十数枚折り重なった状態で検出できたが、規則性をもって置かれたものではない。この溝状遺構からの遺物の出土はほとんどなく、第16図の22が破片の状態で出土したにすぎない。

この溝状遺構の上方周辺には柱穴状遺構や焼土坑2が検出できたが、ひとつの柱穴状遺構や焼土坑はこの溝状遺構を切り込んでおり、後出するものと考えられ、これらの相互の関係はないと思われる。

焼土坑 2

直径約70cmで、赤褐色に火化していた。深く掘り込んで作られたものではないが、火化部分を取り除くと約20cmの深さになる。遺物は出土していない。

第3章 B地区の調査

第1節 概要

A地区とB地区の間は既に工事用進入路によって大きく破壊されており、進入路の東側は工事予定区内でわずかに最大幅約2.7m、最小幅1m弱、長さ40mの部分が僅かの上で残されていたに過ぎない。

遺跡の乗る尾根はちょうどA地区の西半で馬の背状に狭くなるが、東側では幅を広げて平坦な尾根頂部を形成している。B地区でもその広がった平坦な尾根が続き、またA地区とは異なり尾根の北側・南側とも比較的緩やかな斜面となるため、遺構の存在が予想された。このため崖直上の作業の困難な箇所ではあるが、調査を実施することにした。範囲は調査終了後で北側斜面で標高約67m、尾根上の最高所で約70.5m、南側斜面で約69.5mを測る。

B地区の東側の調査区外でも尾根上の平坦面はさらに続き、遺跡が立地するには良い条件である。しかしながら、現状では低灌木が生い茂るため、地表面上での古墳状隆起等の遺構の確認はできなかった。

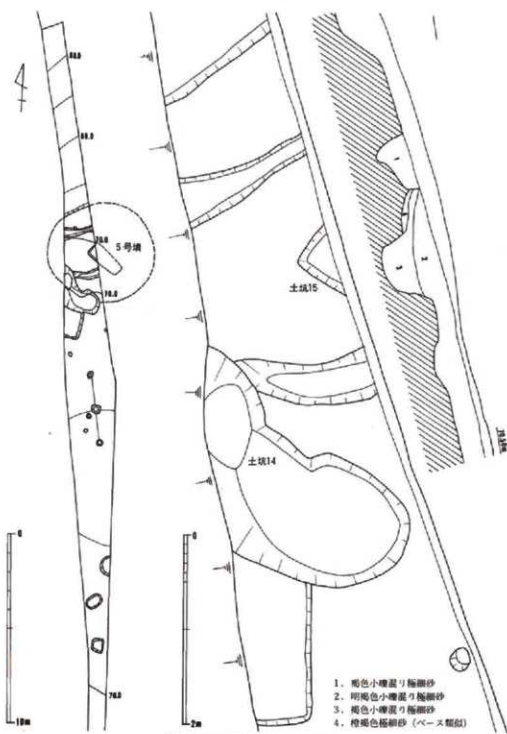
発掘調査は全て人力による掘削でおこない、抜根・腐食土層除去後、遺構が確認できる黄褐色小礫混じり極細砂の面まで掘り下げた。検出できた遺構は、断面観察の結果、更に十数cm上面から掘り込まれていることがわかった。

検出できた遺構には、土坑・溝状遺構・柱穴状遺構がある。遺物は包含層も含めてわずかしか出土せず、図化できたものは土坑14から出土した土師器のみである。遺構の密度は散漫ではあるが、A地区に比べると濃く、この尾根上の平坦地には更に遺跡が広がっていく可能性を示している。

第2節 遺構

前述の通り、土坑・溝状遺構・柱穴状遺構が検出できたが、ほとんどの遺構からは遺物が出土せず、その所属時期などの性格は不明である。

尾根の南側の緩斜面では3基の土坑を検出したが、全て深さ15cm以下の表土類似の単一土層埋土をもつものであった。また尾根の頂部ではいくつかの柱穴状遺構を検出できたが、3基を除いては直径20cm、深さ10cm以下のものであった。第14図で直線で結んだ3基の柱穴状遺構はともに直径30cm～50cm、深さも20cm以上の規模を持ち、約180cm間隔で並んでいることから、同一の構造物に伴う柱穴と考えられる。埋土は灰褐色の極細砂である。但し遺物は全く出土しておらず、



第14図 B地区遺構配置図及び5号墳

その時期や規模は不明である。

北側の斜面下方では遺構は検出されなかった。

5号墳

調査区の北半、尾根筋からやや北に傾斜する位置に立地する。当初いくつかの土坑や段落ちとして検出していたが、調査区内に一部かかって検出できた土坑15が、他の遺構に比して深く（約40cm）壁もほぼ直立すること、平面で1ヶ所、東側の壁面の調査でもう1ヶ所のほぼ直角に曲がるコーナー部を確認でき、4号墳の主体部である土坑5との類似性からこの土坑15も主体部であると判断した。

この土坑15の規模は短辺約60cm、長辺70cm以上の長方形プランを呈するものと推定できる。土坑15は明褐色極細砂の地山を掘り込んでおり、埋土である褐色小礫混じり極細砂の上層に明褐色小礫混じり極細砂が堆積している。墳丘の盛土であろうか。南側で明確な周溝を持たないため確認できなかった。この土坑15やその上層の盛土と思われる層からは遺物は出土していない。

この5号墳はA地区の4号墳同様、周溝は不明確であるが、弧状を呈する最大幅約130cm、深さ約30cmの土坑14及び、北側の約7cmの段状遺構がその周溝となるものと推定すれば、直径約6mの円墳を復元することができる。これらの段状遺構や土坑14は明褐色極細砂の地山を掘り込んでいる。西側の周溝となる土坑14からは第16図22の土師器壺が出土した他は遺物は出土しておらず、特に須恵器は小片すら見られなかった。

以上のように、幅が広く頂部が平坦な尾根上には古墳をはじめとする遺構が存在することがわかった。更に東側奥の尾根上には50m以上平坦地が続き、現状では樹木が生い茂るため古墳状隆起等は確認できないが、遺跡は続くものと推定できる。但し、今回の調査ではA地区の小谷状地形の包含層や土坑2・3から出土したような土師器皿は出土しておらず、古墳群を除くとA地区とは時期或いは性格が異なる遺跡になることが推測される。



第4章 遺物

第1節 概要

南山古墳群の調査では1号墳周溝・3号墳周溝・4号墳主体部である土坑5・土坑2・土坑3・土坑4・土坑14・溝状遺構及び小谷状地形内の包含層・表土から遺物が出土している。その他の遺構からは全く遺物は出土していないか、あるいは図化できないほどの小片であった。遺物はA地区の土坑3から出土した鉄製鏃以外は全て土器である。

2号墳周溝出土の遺物は古墳時代の須恵器小片であり、3号墳周溝と共有する溝出土の遺物は3号墳出土のものとして取り扱った。また、図化できなかったが、表土や包含層からは古墳時代末から平安時代にかけての須恵器片や中世の土銅片、近世の丹波焼片が出土している。

第2節 古墳出土の遺物

古墳から出土した遺物は全て土器であり、5号墳出土の土師器を除いて全て須恵器である。また、4号墳の主体部である土坑5出土のものを除いては、全て周溝埋土から破片の状態での出土であるため、今回検出できたような近接した古墳や斜面地立地の古墳ではそれぞれの古墳に伴うものとは必ずしも断定できない。

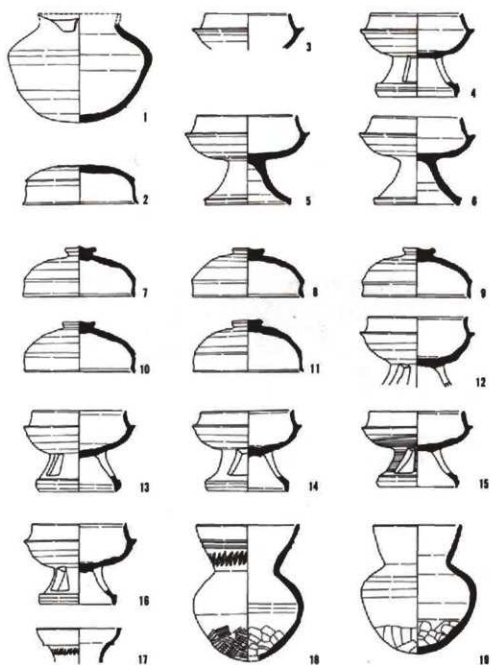
1号墳出土の遺物（第15図 1）

1号墳は周溝の一部のみの発掘調査であったが、周溝の底付近から須恵器の短頸壺がいくつかの破片となって出土した。口縁部はわずかに残存するのみで、しかも焼成の際に大きく変形して肩部に溶着している。肩部に最大径を持ち、復元口径9.0cm、器高11.5cm、最大腹径15.3cmを測る。底部から体部外面の約1/2に時計まわり方向のヘラ削りを施し、内面は肩部に押圧痕を残し、下半部は指ナデを施している。上半部は内外面とも回転ナデで調整している。

3号墳出土の遺物（第15図 2～6）

3号墳では周溝内埋土から須恵器が出土している。2号墳と共有する西側の溝から出土したものは全て3号墳出土のものとして取り扱っているが、この部分からの出土が最も多い。須恵器は全て破片の状態而出土しており、図化できたものは有蓋高環4点、環蓋1点である。図化できなかったが環の小破片も1点出土している。

2は北側の周溝から出土した環蓋である。復元口径約12.4cm、器高4.1cmを測る。天井部と口縁部を画する稜は鋭さを残して突出する。端面は外反気味に伸び、内傾した端面をもつ。ヘラ削りの範囲は約1/2で方向は逆時計まわりである。



第155圖 遺物 1

3～6は有蓋高環である。3は北側の周溝から出土した。環部上半のみで、底部・脚部は復元できなかった。復元口径は約9.1cmで他のものと比べて小型である。焼成も軟質で他のものと異なる。ヘラ削りの範囲は約2/3で方向は時計まわりである。

4は口径9.7cm、器高8.8cm、底径は8.3cmを測る。たちあがりは内傾して伸び、端部は明瞭な段を有する。短脚で長方形1段の透しを三方にもち、下外方に広がったのち裾部を拡張して下方に伸びる。環部のヘラ削りの範囲は約2/3で方向は時計まわりである。

5は口径10.6cm、器高9.4cm、底径8.9cmを測り、本遺跡では比較的大型の部類に入る。たちあがりは内傾して伸び、端部は丸く収める。短脚で細い脚部は透しをもたず、外反して広がったのち、わずかに端部を上下に拡張して収める。環部のヘラ削りの範囲は約2/3であるが、回転ナデで1/2まで調整している。

6は口径9.6cm、器高9.2cm、底径8.8cmを測る。たちあがりは内傾して伸び、端部は丸く収める。短脚で細い脚部は透しをもたず、外反して広がったのち、わずかに端部を上下に拡張して端面を作る。環部のヘラ削りの範囲は約2/3で、方向は逆時計まわりである。

4号墳出土の遺物（第15図 7～19）

4号墳ではその主体部である土坑5の木棺内に落ち込んだ形で須恵器が出土している。埋土の上層では小型の獲の胴部と思われる破片も出土しているが図化できなかった。

7～11は扁平なつまみをもつ蓋である。12～16の有蓋高環に伴うものであるが、組み合わせは判別し難い。7は中上層から出土している。口径11.8cm、器高5.3cmを測る。天井部と口縁部を画する稜は非常にぶく、口縁端部に浅いくぼみを有する。ヘラ削りの方向は逆時計まわりである。

8は口径11.8cm、器高5.2cmを測る。天井部と口縁部を画する稜はにぶく、口縁端部は内傾した面を有する。

9は口径11.4cm、器高5.2cmを測る。天井部と口縁部を画する稜はにぶく、口縁端部は内傾した面を有する。

10は口径11.6cm、器高5.3cmを測る。天井部と口縁部を画する稜は非常にぶく、口縁端部は内傾した面を有する。ヘラ削りの範囲は約2/3で、方向は逆時計まわりである。

11は口径11.6cm、器高5.3cmを測る。天井部と口縁部を画する稜は鈍く、口縁端部は水平に近いやや内傾した面を有する。ヘラ削りの範囲は約2/3で、方向は逆時計まわりである。

12～16は有蓋高環である。12は脚端部を欠損しているが、口径10.5cm、残存高7.4cmの法量をもち、たちあがりの端部の内傾度は著しく、短脚の三方に方形の透しを穿つ。環部外面の約1/2の範囲にヘラ削りを施し、その方向は逆時計まわりである。

13は口径9.9cm、器高8.5cm、底径8.3cmを測る。たちあがりの端部の内傾度は著しく、先端は尖る。短脚の三方に方形の透しを穿つ。脚端部は下外方に広がったのち裾部を拡張して下方に伸び

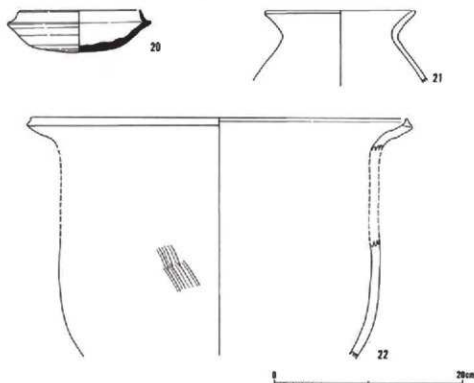
る。環部外面の約1/2の範囲にへら削りを施し、その方向は逆時計まわりである。環部底の内面には二方向の仕上げナデを施す。

14は口径9.8cm、器高8.5cm、底径8.5cmを測る。たちあがりの端部の内傾度は著しい。短脚の三方に方形の透しを穿つ。脚端部は下外方に広がったのち裾部を拡張して下方に伸びる。環部外面の約1/2の範囲にへら削りを施し、その方向は逆時計まわりである。環部底の内面には不定方向の仕上げナデを施す。

15はやや軟質のもので、口径10.0cm、器高8.0cm、底径8.2cmを測る。たちあがりの端部のやや内傾して四角く収める。短脚の三方に方形の透しを穿ち、脚端部は下外方に広がったのち裾部を拡張して下方に伸びる。環部の約1/2と脚部にはカキ目調整を施す。

16は口径10.0cm、器高8.5cm、底径7.9cmを測る。たちあがりの端部の内傾度は著しい。短脚の三方に方形の透しを穿ち、脚端部は下外方に広がったのち裾部を拡張して下方に伸びる。環部外面の約2/3の範囲にへら削りを施し、その方向は時計まわりである。

17~19は壺である。17は口縁部のみが復元できた。外反して伸びる頸部と口縁部との境は凸帯により段をなし、口縁端部は外方に拡張して上部に面を作る。凸帯下部に櫛描波状文を施す。



第16図 遺物2

18は口径10.9cm、器高約14cmを測る。球形の体部から外上方に伸びる太い頸部と口縁部とは二条の凸帯で境をなしており、凸帯下部に楕円波状文を施す。体部下半には平行印きが残されているが、上部は回転ナデを施している。

19は口径9.2cm、器高13.6cmを測る。最大径を上半にもつ体部から、太い頸部がやや外上方に伸び口縁部に続く。外面の体部上半から口縁部は回転ナデ調整をしているが、体部下1/3は回転ナデの後に丁寧にナデ調整される。内面下部は直径3cm程の半円形のあて具の痕跡が認められ、体部上半は回転による成形を、口縁部は回転ナデ調整を施している。

5号墳出土の遺物（第16図 21）

5号墳からはその周溝と思われる土坑14から土師器壺片が1点出土している。口縁部から肩部にかけての径の1/8程度の破片で、口径15.8cmの小型のものが復元できる。磨滅が著しく調整等の詳細は不明である。

第3節 その他の遺物

土坑4出土の遺物（第16図 20）

土坑4からは須恵器坏身が1点のみほぼ完形で出土した。口径12.9cm、器高4.4cmを測る。たちあがりの基部外面は一部沈線をもって境界を明瞭にするが全周を巡らせてはならず、不明瞭である。外面の約1/2の範囲にへら削りを施し、その方向は時計まわりである。底部内面に一方のナデ調整を施す。

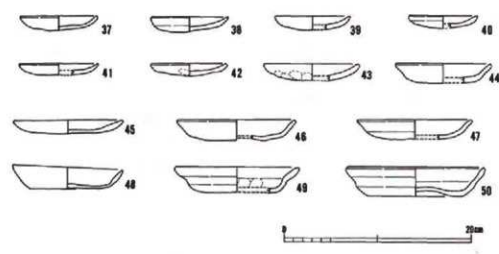
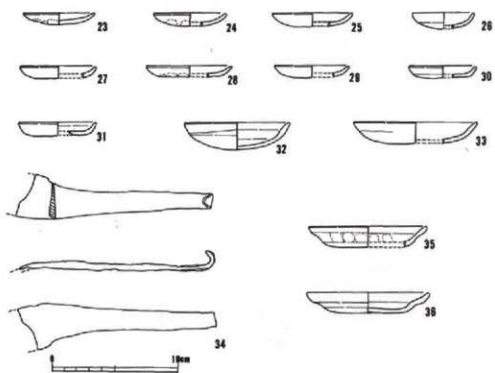
溝状遺構出土の遺物（第16図 22）

土師器甕の破片が出土している。あてて法量を出せば、口径約40cm、器高35cm以上の比較的大型のものと思われる。外反する口縁部の端部上方に粘土を付加してつまみあげ側面を作る。体部外面に幅の広い平行印きを残して成形するが、口縁部は横ナデで調整している。口縁部外面に煤が付着している。

土坑2・土坑3及び包含層出土の遺物（第17図23～50）

土坑2（23～33）・土坑3（35・36）及び小谷状地形内の包含層（37～50）からは、土師器皿が出土している。これらは砂粒をあまり含まない緻密な胎土をもち、白色或いは淡赤褐色の軟質に焼成されている。粘土紐から手づくねによって成形され、不定方向のナデ調整の後、口縁部を横ナデしている。法量は口径7～10cm、器高1～2cmの小型のものと、口径11cm以上、器高2cm以上の比較的大きなものとに大別できる。後者には内面の底部周辺と外面の口縁部下を指で押さえ、その後横ナデすることによって、底部と口縁部の境界をつくるものがあるが、同様のものは小皿にも見受けられる。灯明皿等に使用された痕跡は認められない。

34は土坑3出土の鉄製鎌で刃部を欠損。柄部の先端を折り曲げて着柄に備えている。



第17圖 遺物 3

第5章 まとめ

南山古墳群について

今回の発掘調査では合計5基の古墳を調査したが、内2基は調査範囲外に過半があり、また確実な埋葬施設を検出できたのは4号墳のものしかない。埋葬施設が確実でないものを古墳と認定できるかどうかの問題もあるが、周囲に溝を巡らせることや、古墳時代後期の土器を伴うことにより、古墳であると認定した。しかしながらそこで各々の古墳の相違が問題となってくる。まず、埋葬方法であるが、4号墳の埋葬主体である土坑5は地山を深く掘り込んで箱形の木棺を入れたもので、棺上にあつたと思われる供献土器が棺内部に落ち込んでいた。しかしながら2号墳や3号墳ではそのような深く掘り込んだ埋葬主体は検出できなかったし、墳丘上や墳丘内ではほとんど土器は出土しなかった。5号墳の埋葬主体部であると想定した土坑15は4号墳の土坑5と同様に地山を深く掘り込んだものである。

2号墳や3号墳では三方或いは全周に周溝を巡らせており、溝内から土器が出土している。またわずかではあるが墳丘の盛土も存在している。ところが反面、4号墳・5号墳では明確な周溝は持たず、周溝内からの遺物の出土も極めて少ないことから、確実に古墳に伴う周溝とすることにも躊躇され、一見単なる木棺墓とも見て取れるものである。しかしながら周囲に空白地を持つことからどうにか墳域を有する古墳と認定できる。

出土遺物や遺構の切り合いから見ると、2号墳は3号墳に先行すること、3号墳出土として扱っている須恵器の中には4号墳出土のものよりやや新しい要素をもつものがあることから、4号墳も3号墳に先行することがわかる。眺望の開けない斜面立地の1号墳は、尾根上平坦面立地の他の古墳よりも遅れて作られたものと思われる。

今回調査できた市場の南山古墳群は所謂「初期群集墳」あるいは「古式群集墳」の範囲に含まれる。低墳丘の小規模な木棺直葬であることや、出土した須恵器が田辺昭三氏の福年によるTK47型式並行期であることはその要素のひとつである。さらに内容を見ると、鉄器や玉類を全くもたず須恵器のみという貧弱な内容であること、墳丘あるいは墳域の大きさにはあまり差がないことで被葬者間に階級差は見られない。では、時期による差をみると、4・5号墳のように明確な盛土や墳域をもたず、木棺単一埋葬の古墳から、明確な周溝をもち、墳丘上から浅い墓坑を掘り込んでいたと思われる3号墳、そして地表面からも確認できるような盛土の1号墳へと変遷するものと考えられる。

しかしながら、南山古墳群の乗る丘陵尾根は北側のみが狭小な谷内に開け、しかも調査地点は尾根の先端から約150mも奥まっており、古墳群の造営がここから始まったとは考えがたい。初期群集墳の中でもさらに古い形態・要素をもつ墓が存在する可能性がある。

周辺の古墳群

加古川は日本海に注ぐ由良川と日本で最も低い分水嶺で繋がっており、古代から瀬戸内と日本海を結ぶ大動脈であった。その中流域の小野市や三木市などの北播磨では加古川兩岸の平地を囲むように洪積台地が広がっており、古くから開けていた。そのような台地縁辺や小高い丘陵の末端には多くの古墳群が形成されている。

東条川南岸に沿って、高田古墳群18基、南山古墳群9基、久保木古墳群18基、高山古墳群10基、菅田古墳群5基が連なって存在する。これらは全て木棺直葬を主体とするものとされる。東条川をさらに遇れば100基以上存在したと言われる船木中番古墳群、小田古墳群14基、別所池古墳群15基、池田古墳群9基が存在し、これらの古墳群中には横穴式石室も存在する。

加古川西岸沿いの台地縁辺部には曾我井山古墳群17基、大塚山古墳群6基、河合西古墳群9基、三ツ塚古墳群4基、新部大谷古墳群3基、粟生坂古墳群7基、粟生坂北方古墳群9基、粟生三ツ塚3基、岡古墳群6基、西脇北方古墳群10基が存在する。これらの古墳群も最も南に位置する西脇北方3号墳を除けば木棺直葬を主体とするものとされている。万願寺川以南では、西脇南方古墳群7基、阿形古墳群9基、福匂古墳群6基、岩倉古墳群11基、下米住古墳群5基、毛無山古墳群2基、勝手野古墳群11基が存在する。これらの古墳群では横穴式石室墳の占める割合が大きく、福匂古墳群や勝手野古墳群では横穴式石室墳のみが認められる。

その対岸、小野市南半の加古川東岸では、151基もの古墳群が営まれた檜山古墳群が山塊全域に11の支群に分かれて存在するが、木棺直葬墳が主体を占め横穴式石室をもつものはわずか数基のみである。南山古墳群の北側にはかつては100基以上存在していたと言われる焼山古墳群や市場古墳群14基があり、これらは木棺直葬墳のみで構成されている。山田川と桜谷川に挟まれた丘陵地の西端には野入古墳群8基や池尻1～5号墳、そして今回報告の市場南山古墳群が造営されている。野入1号墳が横穴式石室を持つ以外は木棺直葬墳であるとされている。

加古川水系中流域における古墳時代後期の古墳群の特徴として小規模の木棺直葬墳が群集することは、既に多く指摘されていることである。これらの古墳群では初期には一墳丘に木棺の単独埋葬であり、木棺の多埋葬や新しく横穴式石室の採用へと変化する。但し、焼山古墳群のように横穴式石室を導入せずに木棺直葬のみの埋葬方法で終焉する集団もあり、また加古川西岸の勝手野古墳群のように横穴式石室のみを埋葬方法とする古墳群も出現する。

大きな傾向としては、加古川西岸の万願寺川以北や加古川東岸ではあくまで木棺直葬を指向する傾向があり、加古川西岸の南半では積極的に横穴式石室を取り入れている。更に細かく見ると、加古川東岸でも北半の東条川を遡った北岸や南半の山田川以南では一部横穴式石室を採用している。

以上を概観すると、現在の小野市街を含む段丘上の平野部を囲むように木棺直葬を好む集団があるのに対して、横穴式石室を取り入れている集団はどちらかというと縁辺部で造墓している。

それはあたかも広い平野部に前代から居た集団が古式に執着するのに対して、縁辺部に新たに人類した新興勢力が積極的に新しい造墓方法を採用したようにも見て取れる。

以上、今回発掘調査を行った市場の南山古墳群の概要及び、周辺の古墳群を概観したが、周辺のほとんどの古墳群が発掘調査が行われていないことや報告書が未刊行であることから副葬品などの内容が不明であり、論を進めることは危険であろう。決して突出しないどころかと言えば貧弱な内容のこの市場の南山古墳群は、おそらく生産集団を単位として営まれたであろうがそれでも大きくはないが内的変化を生じている。また支群間・古墳群間でも時間の変化に伴って差が生じてくる。これらの古墳群の変化や差がそのままこの地域内の集団関係を示しているとなれば、次にこの木棺直葬を好む地域と近隣の例えば社町の横穴式石室を主体部に持つ大古墳群地域との関係や、三田盆地のような木棺直葬墳と横穴式石室墳が偏在する地域との関係も見えてくるのではないだろうか。

最後に低墳丘或いは無墳丘に近い古墳が、眺望のひらけぬ丘陵のかなり奥まった位置に営まれていたことは、今後の開発行為に伴う遺跡調査においても意識されるべきであることを付け加えておく。

参考文献

- 小野市教育委員会『小野市道跡分布図』小野市文化財調査報告書第12冊 平成4年
 小野市教育委員会『高山古墳群調査報告書』小野市文化財調査報告書第6冊 昭和49年
 田辺昭三 『須恵器大成』角川書店 昭和56年
 西脇市郷土資料館 『北播磨における古墳の変遷』第17回特別展『北播磨の古墳展』昭和63年
 井守徳男 『畿内明線部における古墳の展開と終末』『北山茂夫遺稿』日本史学論集 歴史における政治と民衆 昭和61年

玉津田中遺跡
南大山地點

第1章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

玉津田中遺跡南大地点は、兵庫県の瀬戸内海側の明石川中流域にある。明石川は六甲山地の西端を源とする明石川・榎谷川・伊川の三河川が神戸市西区と明石市の境付近で合流して明石市街の西側で播磨灘に注ぐ二級河川である。三河川は丘陵を南西向きに開折し、その流域に狭い沖積平野を形成する。そして明石川・榎谷川合流点から下流側で南流して明石平野を形成している。

玉津田中遺跡南大地点は、明石川・榎谷川合流点から2kmほど上流の明石川左岸の中段段丘上（標高32m付近）に位置している。遺跡の北側と南側は開折谷であり、遺跡がのる段丘は丘陵から南西に張り出した舌状の台地になっている。この台地は上面がほぼ平坦であり、沖積平野との比高差は10mほどである。

現在はこの台地のほぼ中央を国道175号線が通り、道路に沿って商店・工場などが立ち並びもとの地形はうかがいにくくなっている。明治時代の地形図では、開墾され畑地として利用されていたことがうかがわれ、南北の開折谷には溜池がつくられている。

なお、明石川中・下流域の地形環境については、『玉津田中遺跡発掘調査概報Ⅰ』（兵庫県教育委員会 1984）の中で詳しく述べられているので、それを参照していただきたい。

第2節 歴史的環境

明石川流域では現在までに数多くの遺跡が、神戸市教育委員会・兵庫県教育委員会などによって調査されている。ここでは玉津田中遺跡南大地点の近辺の遺跡と明石川流域の弥生時代の遺跡について概説しておく。

近辺の遺跡

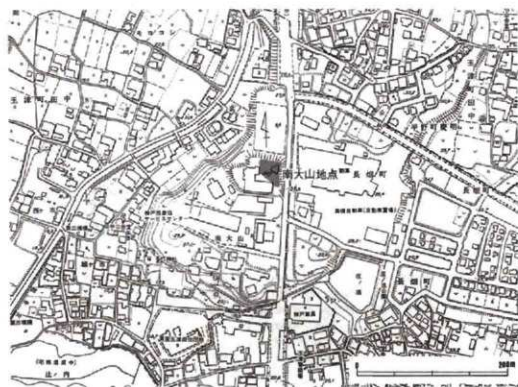
南大地点もその範囲に含まれる玉津田中遺跡が、この地域だけではなく明石川流域を代表する遺跡である。この遺跡は、明石川左岸の沖積地から低位段丘にかけて位置し、縄文時代晩期から鎌倉時代にかけての遺構が調査されている。遺跡の中心となるのは、弥生時代から古墳時代にかけてのムラと、平安時代末の集落・居館である。弥生時代のムラは、前期の集落・中期の集落・墓域・水田、後期から古墳時代の集落を網羅したものであり、ムラ全体を調査した例として全国的にも貴重なものである。また平安時代末の居館では、周囲を取り巻く堀と館内部の池状遺構が検出されている。



第1図 明石川流域の弥生時代遺跡

表1 明石川流域の弥生時代遺跡

No	遺跡名	所在地	立地	時期	種類
1	廣匠町	明石市廣匠町	沖積地	中期	集落
2	上の丸2丁目	明石市上の丸2丁目	中位段丘	中期	集落
3	上の丸3丁目	明石市上の丸3丁目	低位段丘	後期	集落
4	片山	神戸市西区枝吉	中位段丘	前期	集落
5	吉田南	神戸市西区森友	沖積地	後期	集落
6	吉田	神戸市西区枝吉	中位段丘	前期	集落
7	玉津第4地点	神戸市西区王塚台	段丘	後期	集落
8	出合	神戸市西区玉津町	沖積地	中期	集落
9	居住	神戸市西区玉津町	沖積地	中期～後期	集落
10	玉津田中	神戸市西区玉津町	沖積地	前期～終末期	拠点集落
11	居住・小山	神戸市西区玉津町	高位段丘	中期	集落
12	芝崎	神戸市西区平野町	段丘	終末期	集落
13	平野	神戸市西区平野町	段丘	前期～後期	集落
14	印路	神戸市西区平野町	段丘	前期	集落
15	印路台伏墓	神戸市西区平野町	丘陵上	中期	墳墓
16	西戸田	神戸市西区平野町	中位段丘	前期～後期	集落
17	大畑	神戸市西区平野町	低位段丘	後期	集落
18	常本	神戸市西区平野町		前期～後期	集落
19	黒田	神戸市西区平野町		中期	集落
20	網谷池	神戸市西区平野町	丘陵上	中期	高地性集落
21	西神N.T.60地点	神戸市西区春日台	丘陵上	中期	高地性集落
22	西神N.T.48地点	神戸市西区春日台	丘陵上	中期	高地性集落
23	繁田	神戸市西区平野町	扇状地	中期～後期	集落
24	西神N.T.40地点	神戸市西区美賀多台	丘陵上	中期	墳墓
25	西神N.T.38地点	神戸市西区美賀多台	丘陵上	中期	高地性集落
26	堅田	神戸市西区平野町	扇状地	中期～後期	集落
27	養田	神戸市西区押部谷町	扇状地	後期	集落
28	養田中ノ池	神戸市西区高塚台	丘陵上	中期	高地性集落
29	新方	神戸市西区玉津町	沖積地	前期～後期	拠点集落
30	今津	神戸市西区玉津町	低位段丘	中期～後期	集落
31	高津橋・岡	神戸市西区玉津町		後期	集落
32	西神N.T.62地点	神戸市西区榎谷町	扇状地	後期	集落
33	西神N.T.65地点	神戸市西区榎野台	丘陵上	中期	高地性集落
34	谷口	神戸市西区榎谷町		中期～後期	集落
35	長谷	神戸市西区榎谷町		中期～後期	集落
36	如意寺北	神戸市西区榎谷町	丘陵上	中期	高地性集落
37	青谷	神戸市西区榎谷町	丘陵上	前期～中期	高地性集落
38	北別府	神戸市西区北別府	沖積地	中期	集落
39	南別府	神戸市西区南別府	沖積地	前期～後期	拠点集落
40	池上北	神戸市西区池上	低位段丘	後期～終末期	集落
41	池上口ノ池	神戸市西区池上	中位段丘	中期～終末期	集落
42	長坂	神戸市西区伊川谷町		後期	集落



第2図 遺跡の調査地点

玉津田中遺跡の南側には居住遺跡がある。ここは、弥生時代から中世にいたる遺構がみられるが、ことに平安時代末の集落からは輸入陶磁器が出土しており、玉津田中遺跡の同時期の遺跡とも関連がうかがえる。

また、玉津田中遺跡の東側に接して、居住・小山遺跡がある。この遺跡は、南大山地の乗る台地と同じ台地の上にあり、弥生時代と中世の遺構が検出されている。

明石川流域の弥生時代遺跡

明石川は先に述べたように、明石川・柳谷川・伊川の三川が合流しているが、それぞれの河川の流域に多くの弥生時代の遺跡がある。遺跡の内容については、表1にまとめてあるが、この地域で最も古く、また学史的にも重要な遺跡は明石川右岸の丘陵上にある吉田遺跡であり、ここでは前期古段階とされている土器が出土している。

また、存続期間の長い遺跡を拠点集落と考えるならば、下流域では新方遺跡、明石川中流域では玉津田中遺跡、伊川流域では南別府遺跡があげられよう。これら拠点集落から派生するように、丘陵上にも高地性集落といえる遺跡が点在する。明石川流域では西神ニュータウン第38地点、柳谷川流域では西神ニュータウン第65地点、伊川流域では頭高山遺跡などが主要なものとしてあげられる。

第2章 調査の方法と経過

第1節 確認調査

平成元年度に実施した確認調査は、遺跡の広がりを知るためにおこなった。そのため、工事によって掘削される範囲に南北方向の試掘溝（1トレンチ・延長18m）と東西方向の試掘溝（2トレンチ・延長22m）をT字形に設定した。

調査は人力によっておこない、まず表土およびその直下にある厚さ10～20cmの旧土壌層（包含層）を除去して段丘面である黄色のベースを露出させた。そして、遺構精査をおこない、検出された遺構については掘削し、遺物をとりあげた。

掘削終了後、試掘溝の土層断面および遺構の検出状況を写真・図面によって記録し、その後試掘溝を埋め戻して調査を終了した。

第2節 全面調査

全面調査は確認調査の結果に基づき、掘削対象範囲全体、約640㎡について実施した。調査はまず表土を重機（バックホー）によって除去し、旧土壌層（包含層）を人力で掘削して段丘面である黄色のベースを露出させた。その後遺構精査を行い、遺構については適宜土層観察用の畦をのこして掘削した。土層断面を写真・図面によって記録した後これを撤去して、遺構を全掘した。遺構が全て掘れた段階で、足場写真・図面によって遺跡の全体を記録し、最後に柱穴の断割り・掘抜きをおこない、調査を終了した。

第3節 整理作業

発掘調査終了の後、遺物を水洗し、ネーミング・接合をおこなった。そして図化可能な遺物（土器約60点・石器2点）を選別し、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実測・拓本・写真撮影をおこなった。

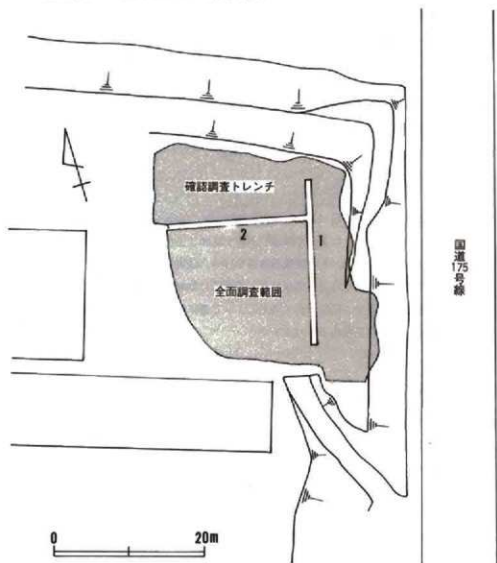
また発掘調査で記録した遺構の図面は、整理の後にトレースをし、また写真についても選別をおこない、遺物の記録とあわせて発掘調査報告書として刊行できるよう作業をおこなった。

なお、発掘調査・整理作業において得られた遺物・図面・写真は以下のとおりである。

遺物 土器 28ㇿコンテナ10箱 石器 2点（サヌカイトの剥片は除く）

図面 確認調査 - 平面図 (1/100)・土層断面図 (縦1/20・横1/100)

- 図面 全面調査 - 平面図 (全体図 1/100と1/50・住居跡のみ1/20)
 断面図 (1/10・住居跡のみ1/20)
- 整理作業 - 遺物実測図(1/1)
- 写真 確認調査 - 35mm カラーネガ・モノクロ・スライド
 全面調査 - 4×5モノクロ・スライド
 35mm カラーネガ・モノクロ・スライド
 整理作業 - 4×5モノクロ (遺物写真)



第3図 調査区の位置

第3章 遺構

第1節 概要

調査区の東側は国道175号線の建設に際して掘削され法面となっている。また、北側と南側も造成によって削平されている。また、調査区のほぼ全域にわたってごく最近のものらしい大小の攪乱坑がある。ことに、西側中央部のもは8m×8mほどの大きなものである。また西側は耕作等による削平も若干受けており、旧土壌層はほとんど残っていない。しかし、遺構密度が高い東側はさほど大きな攪乱はなく、全体の遺構の残りは比較的良好であるといえよう。

全体の遺構配置は次頁の第4図のとおりである。ケバの入っているものが遺構であり、その他の白抜きになっているものは新しい時期の攪乱である。これらの遺構の概要について以下に説明しておく。

検出した遺構のうち時期の判明しているものは弥生時代中期と中世（平安時代末から鎌倉時代はじめ）のものに限られる。遺構の種類は、弥生時代中期のものとして竪穴式住居跡・土坑・溝・柱穴があり、中世のものとしては柱穴がある。

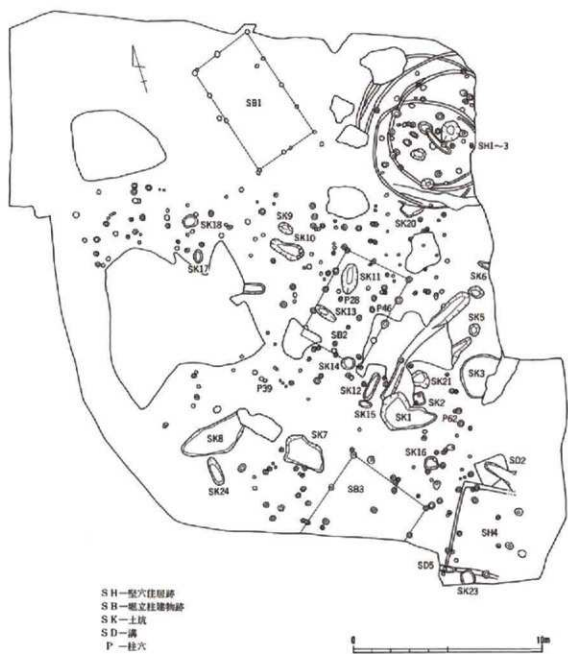
竪穴式住居跡は4軒検出した。調査区の北東隅にあるのが円形住居跡である1号・2号・3号住居跡である。これらはほぼ同じ位置で建てられ、建替えと考えて1軒の住居跡とすることも可能であるが、中央土坑の移動を伴う場合は新たな住居跡であると考え、3軒の住居跡に分離して、古いものから1・2・3号と順に呼称することにす。そして南東隅には方形の竪穴式住居跡（4号住居跡）がある。

柱穴は200個以上検出している。このうち遺物の出土している柱穴のみ番号をつけた。またこれらの多くの柱から建物の復元を試みたが、攪乱のために建物として復元するには不確実なものもあるため、ここではほぼ間違いないと判断したもののみ、掘立柱建物として報告する。北から1号・2号・3号と呼称するが、このうち3号は調査区の南端にあって、その全体の規模はわからない。

土坑は24個検出しているが、ほとんどが調査区の東側中央に集中する。全ての土坑から遺物が出土しているが、弥生時代中期のもののみであり、それ以降の時期のものは全く無い。このうち、土坑1と10から特に多くの土器が出土している。

溝は4本検出している。溝1のみ調査区の中で完結している。全ての溝から弥生時代中期の遺物が出土しているが、溝1から最も多くの遺物が出土している。

この他に、焼土面を1箇所検出している。



第4図 遺構全体図

第2節 竪穴式住居跡

1. 1号・2号・3号住居跡（第5図・図版50）

1～3号住居跡の3軒の住居跡は先にも述べたように、ほぼ同じ位置に建替えられたものであり、周壁溝・土坑・柱穴が複雑に切り合っている。これを機能的に建替えられたものとして、ひとつの住居跡と考えることも可能ではある。しかし中央土坑をあらたに掘りなおしている場合は、住居の設計プランそのものも変更しているのだから、ほかの場所にあらたに建て直すのと何ら変わりはないと考える。このため中央土坑をあらたに掘りなおしている場合は、全く別の住居跡であるとして、個別に番号を与えた。

ただし、中央土坑はそのままにして、同心円状に周壁溝のみ掘りなおしている場合は、上屋構造の変更はあるものの、基本的な設計プランは共通のものであるから、同一の住居跡と考えひとつのものとして扱っている。

以下、分離した個別の住居跡について説明していく。

1号住居跡（第6図）

3軒の住居跡のうち、最も古いものである。東西5.5m、南北6.0mのややゆがんだ円形・4本柱の住居跡である。旧土壌層を除去して検出したため、立ち上がりはほとんど残っていない。一度建替えをおこなったらしく、北東側で周壁溝が一部だけ二重になっている。

住居のはば中央に中央土坑がある。長軸90cm、短軸60cmの楕円形の平面形をもつ。深さは25cm程であり、埋土は3層に分層できるが、最上層には炭が混じる。柱穴は直径20～25cmほどであり、深さは30～40cmほどである。

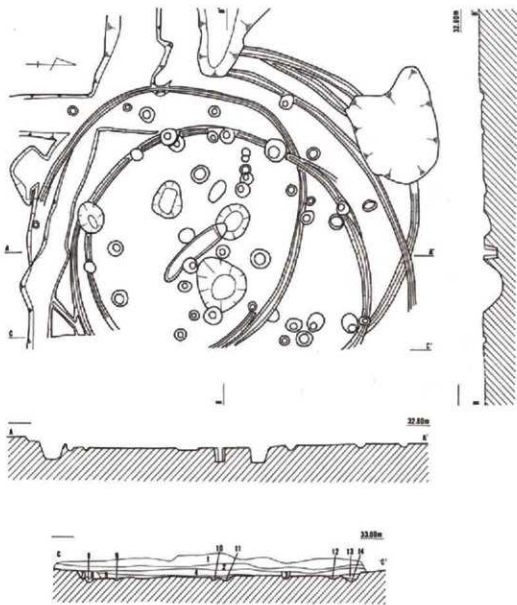
中央土坑から土器が出土しているが、弥生時代中期のものである。

2号住居跡（第7図）

攪乱のため周壁溝が途切れ途切れになって残っているだけであるが、直径約8mの円形4本柱の住居跡である。この住居跡も立ち上がりはほとんど残っていない。北西側の周壁溝が一部二重になっており、一度建替えがおこなわれたものであろう。

住居跡の中央には円形の深い土坑と長楕円形の浅い土坑とが、東西方向に並列している。円形の深い土坑（中央土坑）は長軸90cm、短軸65cm、深さ25cmあり、埋土は3層に分けられるが炭・灰などは認められない。楕円形の浅い土坑（炭土坑）は長軸60cm、短軸22cm、深さ5cmあり、炭が詰まっている。柱穴は掘り方の直径が30cm、柱痕は20cmほどであり、深さは30～40cmほどである。

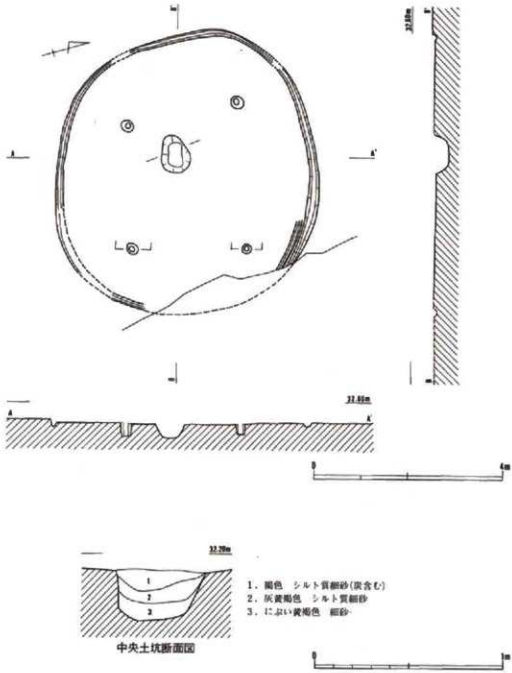
中央土坑から土器が出土しているが、弥生時代中期のものである。



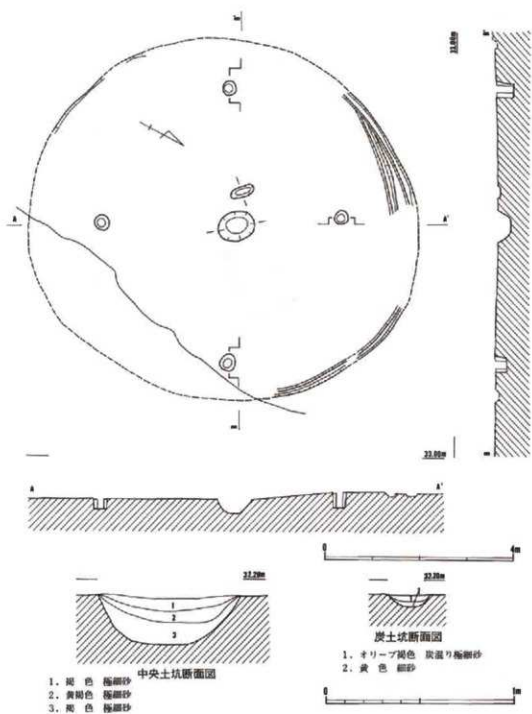
- 1. 褐色 極細砂
- 2. 明褐色 極細砂
- 3. 濃い赤褐色 極細砂
- 4. 濃い褐色 極細砂
- 5. 灰黄色 極細砂
- 6. 濃い黄色 極細砂
- 7. 明黄色 極細砂
- 8. 明褐色 極細砂
- 9. 濃い黄色シルト
- 10. 濃い橙色 極細砂
- 11. 明褐色 極細砂
- 12. 濃い橙色 極細砂
- 13. 濃い黄色 極細砂
- 14. 黄色 粗砂混りシルト



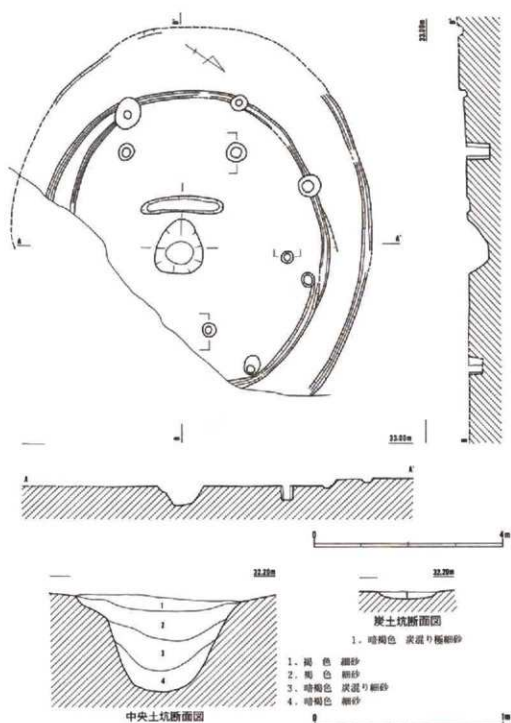
第5図 1号~3号住居跡検出状況



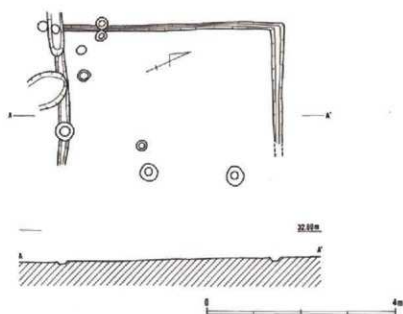
第6図 1号住居跡



第7図 2号住居跡



第 6 圖 3 号住居跡



第9図 4号住居跡

3号住居跡（第8図）

内側の周壁溝で直径6.2m、外側の周壁溝で直径8mほどの円形住居跡である。規模の拡張も含めて、建替えは二度以上行われている。主柱穴は当初は6本、拡張後は8本程度と推定できる。

この住居跡も、中央に円形の深い土坑（中央土坑）と長楕円形の浅い土坑が東西方向に並列している。円形の深い土坑は、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ50cmあり、埋土は4層に分けられるが、第3層には炭が混じる。長楕円形の浅い土坑（炭土坑）は、長軸1.7m、短軸0.3m、深さ4cmあり、炭が詰まっている。また、この土坑の西側中央に直径30cmほどの焼土面がある。柱穴は掘り方の直径が30cmから40cm、柱根は直径20cmほどであり、深さは40～50cmほどである。

埋土および中央土坑から土器が出土しているが、弥生時代中期のものである。

2. 4号住居跡（第9図・図版51）

一辺5mの方形の住居跡である。周壁溝だけしか検出できなかったため、主柱穴の数は不明であり、中央土坑も無い。住居跡であるという断定はしがたいが、一応住居跡として報告しておく。

検出時に、埋土から土器が出土しているが、弥生時代中期のものである。

第3節 掘立柱建物跡

1. 1号掘立柱建物跡(第10図・図版51)

調査区の北側中央にある建物跡である。桁行4間、梁間2間の建物であり、棟方向は北北西を向く。桁方向で6.5m、梁方向で3.6mあり、柱間距離は桁が1.6~1.7m、梁が1.8mである。

柱穴は掘り方直径25cm、深さ20~30cmであるが、これは検出時点での深さであり、本来はこれに旧土壌層の厚さ分の深さが加わる。柱穴内からは遺物は出土していないため、時期は不明であるが、柱穴の埋土は弥生時代中期の遺構のものとは異なるため、これよりも新しい時期、すなわち中世のものである可能性が考えられる。

2. 2号掘立柱建物跡(第10図・図版52)

調査区の東側中央にある建物跡である。南西隅が攪乱されて柱穴が検出できなかったが、桁行4間、梁間2間の建物であり、棟方向は北東を向く。桁行で4.6m、梁間で3.6mあり、柱間距離は桁が1~1.2m、梁が1.6~2mである。梁、桁ともに相対する柱の位置が若干ずれている。

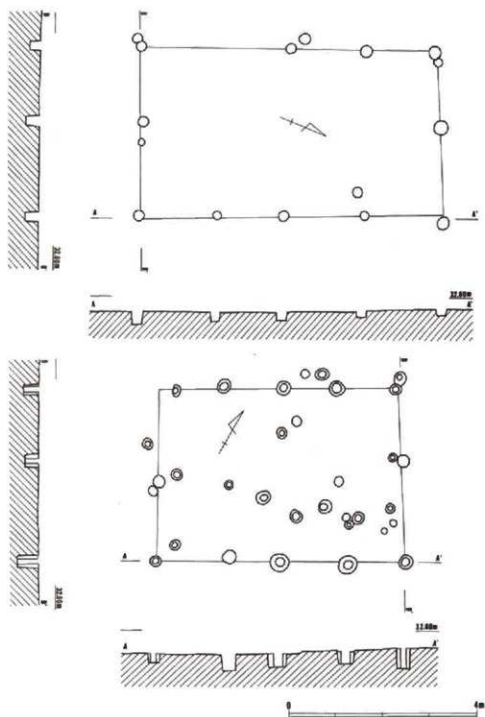
柱穴は掘り方の直径が30~40cmで、柱根の直径が20cmほどであり、深さは30~40cmほどである。柱穴からは遺物は出土していないが、埋土は弥生時代中期の遺構と同一である。また建物の内部になる位置には弥生時代中期の土坑11と土坑14があるが、先後関係は切り合いが無いために不明である。この建物は、柱間距離が短く一定でないことなどから、弥生時代中期のものである可能性が考えられる。

3. 3号掘立柱建物跡(第11図・図版52)

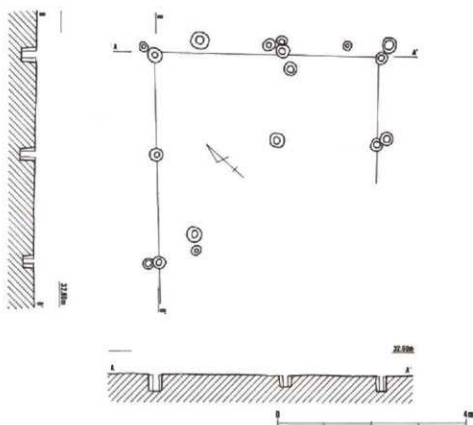
調査区の南側中央にある建物跡である。桁行が2間以上、梁間が2間で棟方向は2号掘立柱建物跡と同様に北東を向いている。調査区の端にかかっているために桁行は東側で1間分、西側で2間分復元できただけであるが、梁の真ん中の柱の延長上にも柱穴があり、総柱の建物になる可能性もある。桁行の長さは不明であるが、梁間は4.8mあり、柱間距離は桁・梁ともに2mである。

柱穴は掘り方の直径が20~30cm、柱根の直径が15cmほどであり、深さは30~40cmほどである。柱穴のひとつからは弥生時代中期の土器が出土しており、他の柱穴の埋土も弥生時代中期の遺構と同一のものである。よって、弥生時代中期の建物跡であると考えられる。

この建物は先に述べたように総柱の建物になる可能性があり、高床式の倉庫である可能性も考えられよう。



第10图 1号·2号附立柱建筑物



第11図 3号獨立柱建物跡

第4節 土坑と溝

1. 土坑

土坑は24個検出したが、全て弥生時代中期のものである。これらのうちで主要なものについて説明しておく。

土坑1 (第13図・図版53)

調査区の南より、2号獨立柱建物の東側にある東西2.8m、南北2m、深さ50cmの不整形な土坑である。溝1を切って掘られている。埋土は2層に分けられるが、いずれの層からも弥生時代中期の土器が多量に出土した。土器は小破片が多く、接合しないものが多かったので、廃棄用に掘られた土坑であると考えられる。

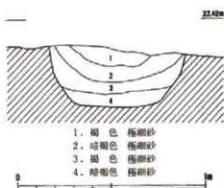
土坑7

調査区の南端中央にある東西2.2m、南北1.5m、深さ20cmの不整形な浅い土坑である。埋土内

から弥生時代中期の土器が多く出土している。出土の状況から、廃棄されたものと考えられる。

土坑9

調査区の中央にある長軸80cm、短軸60cm、深さ50cmの楕円形の土坑である。ここからは弥生時代中期の土器とともにサヌカイトの剥辺が多数出土している。また埋土の最下層には炭が混じる。本来は火を使うなんらかの行為に伴う土坑であったものが、最終的に廃棄のための土坑として使用されたものと考えられることができる。



第12図 溝1断面図

土坑10

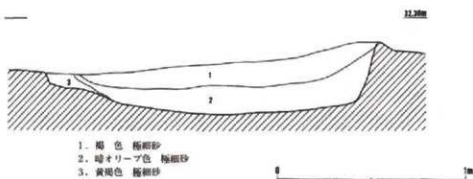
土坑9の南側にある長軸2m、短軸1m、深さ50cmの楕円形の土坑である。埋土内からは多くの弥生時代中期の土器が出土している。破片は比較的大きなものが多いが、これもやはり廃棄されたものであろう。

2. 溝

溝は4本検出した。いずれも弥生時代中期のものである。このうち主なものについて説明しておく。

溝1 (第12図・図版53)

2号掘立て柱建物跡の東側にある溝である。真ん中を攪乱されているが、長さ7m、幅は50~80cm、深さ60cmほどのものである。北東から南西の方を向いており、この方向で溝底のレベルが下がっていく。



第13図 土坑1断面図

第4章 遺物

第1節 土器

1. 弥生時代の土器

包含層・住居跡・土坑・溝から28ミコンテナ10箱の土器が出土しているが、図化可能なものは60点余りである。器面のあれが著しいために調整技法については十分に観察できなかったことをおことわりしておく。以下各出土遺構ごとに、器種別に説明してゆく。

1号～3号住居跡出土土器（第14図・15図17～26・図版54・55）

1号から3号の住居跡の埋土から出土した土器である。ただし、1号・2号・3号住居跡は重なり合っているために、周壁溝・中央土坑から出土している遺物を除くとどの住居跡にどの土器が対応するかは正確には特定できない。そこで本報告では1号～3号住居跡出土遺物として一括して扱う。

出土している器種は壺・甕・鉢・高杯・器台・マダコ壺であるが、それぞれの器種ごとにさらに細別できる。細別した分類については、各個別の土器の説明の最後のカッコ内に（壺A1）のように示している。ただし、一度説明したものについては、以下の記述の中でこの分類名を使用する。

壺 大きく3タイプにわけられる。4は口縁端部を上下に拡張し、頸部と胴部の境にへう状の凹文突起をはりつけたものである（壺A1）。頸部は縦方向の細かなハケ調整で仕上げられている。5も同じタイプのものであろう。

2は口縁端部を下方へ大きく垂下させるものである。端面に粗雑な櫛波状文を施し、頸部と胴部の境に凹線文を三条施す（壺A2）。1は口縁が斜め上方へ真っ直ぐに開くものである。口縁端部はやや内面に肥厚しており、口縁下3cmのところに凹線を施して突起をつくり出す。頸部は細かいへうミガキで仕上げられている（壺B）。3は口縁端部のみの破片であるが、口縁端面にへうで刻み目を施している。

甕 大きく2タイプにわけられる。6～8は口縁が胴部からくの字形におさまがり、口縁端部を上方につまみあげるものである。8のようにつまみあげの大きなものは、端面に細かい凹線文を施す（甕A）。9は水平に外側に折り曲げた口縁をさらに内側に折り曲げるものである（甕B）。10は胴部の破片である。タタキをハケでなで消している。タタキがみられるのはこの個体のみであり、他はハケもしくはナデで仕上げられている。

底 甕もしくは壺の底部である。底径の大きな安定のよいものが多い。14・16は外面を縦方向

のハケで仕上げている。11のみ小型の底部である。

高杯 19・20ともに口縁部が垂直に立ち上がり、端部を内側に肥厚させたものである（高杯A）。19は上部に一条の凹線、下部に二条の凹線を施した後に、その上から上下二段に櫛描波状文を施す。調整は内面・外面ともにハケである。20は底部と口縁部の境に一条の凹線を施す。

脚部 21～23ともに、端部を拡張するタイプである。22・23は端面に細い凹線を施す。内面は横方向のヘラゲズリで仕上げている。24は脚と杯部の境に凹線文を施すものである。

器台 25は凹線文によって飾られた器台である。脚部の破片と考えられる。

鉢 17・18は口縁部が内湾気味に立ち上がるものである（鉢A）。17は体部をハケ調整したのちに下半部に縦方向のヘラミガキを施す。

マダコ壺 26はタタキによって成形したのちに、ナデによって仕上げている。底に水抜き穴が外面から穿孔されている。

この住居跡出土の土器群は、壺の頸部の装飾に凹線文を使用しているほか各器種ともに凹線文を多用していること、また器台が出現していることなどから弥生時代中期後半のものと比定できる。

土坑10出土土器（第15図27～32・図版6・9）

この土坑からは、比較的大きな破片がまとまって出土している。廃棄されたものであろうが、良好な一括資料である。出土している器種は少なく、壺・高杯のみである。

壺 28は口縁端部がやや肥厚し、頸部と胴部の境に指頭圧痕文突帯を貼りつけた壺A1に分類できるものである。頸部外面は縦方向のヘラミガキで仕上げらる。口縁部内面には粗雑な波状文が施され、頸部内面は横方向のヘラミガキで仕上げられている。27は口縁部の破片であるが、壺A1であろう。

29は壺胴部の破片である。櫛描の波状文と直線文を交互に施す。

底部 壺の底部である。30は外面をヘラミガキで仕上げている。また31は内面を縦方向のハケののちに横方向のハケを施して仕上げている。

高杯 32は口縁部を水平に外側へ突出させ、口縁内面に突帯をもうけるものである（高杯B）。外面は縦方向のヘラミガキで仕上げ、内面は横方向のハケで仕上げる。底部は円盤充填している。

この土坑の土器群は器種が少ないため、総合的な評価は難しいが、弥生時代中期のものと考えると差し支えないだろう。

土坑1出土遺物（第16図33・34・図版57）

この土坑からは多くの土器が出土しているが、小破片が多いため図化できたのは2点のみである。いずれも壺である。

33は口縁部内面に波状文を施したものである。口縁部はやや肥厚する程度である。34も壺部をやや肥厚させたものである。

土坑7出土遺物（第16図36）

この土坑からも比較的まとまって土器が出土しているが、図化できたものは1点のみである。器種は壺の底部である。

36は下端をやや外側にはりだしたものであり、外面を縦方向のヘラミガキで仕上げている。台形土器の可能性もあるが、ここでは底部としておく。

柱穴39出土遺物（第16図35）

壺が1点出土している。口縁部を下方に拡張している。外面は縦方向のハケで仕上げる。また二つ一組になったひも通しの穴があげられている。

溝1出土遺物（第16図37～47・図版6・8）

この溝からは、多くの遺物が出土している。図化できたのは壺・甕・高杯の3器種である。

壺 大きく3つのタイプに分けられる。41は口縁部を拡張し、内面に2条の刻み目突帯を貼りつける（壺A3）。外面はハケ調整のあとナデで仕上げている。39・40は頸部と胴部の境を断面三角形突帯で飾るものである（壺A4）。断面三角形突帯は凹線文の手法によって間を窪め、高さを強調している。40は胴部に櫛描の直線文と波状文を交互に施す。頸部外面は縦方向のハケで仕上げられており、また全体に赤色のスリップがかけられている。42は短く立ち上がる頸部をもち、頸部と胴部の境に指頭瓦紋突帯を貼りつけたものである（壺A5）。口縁部をヘラ描の斜格子文で飾る。37は小型の壺である。外面を縦方向のハケで仕上げる。

甕 1タイプのみである。43・44とも口縁を単純にくの字形に折り曲げたものである（甕C）。胴部外面は縦方向のハケ、内面の口縁部と胴部の境を横方向のハケで仕上げている。

底部 壺もしくは甕の底部である。45・47ともあげ底である。47は外面を縦方向のヘラミガキ、内面をハケで仕上げている。

高杯 46は脚部上半の破片である。外面を縦方向のはけで仕上げたのちに、櫛描き直線文を施す。

これらの土器は、壺における断面三角形突帯・櫛描文の使用や甕の器形など、中期のうちでも比較的古い段階の特徴が見られる。

包含層出土遺物 (第17図48~59・図版57・58)

遺構検出の為に旧土壇層を掘削した際に出土した土器である。量的には、1号~3号住居跡付近から出土したものが多く、出土している遺構を特定できないため一括して扱っておく。器種は壺・甕・鉢・台付鉢・高杯・器台がある。

壺 48・49ともに壺Aである。49は口縁端部をわずかに拡張する。外面を縦方向のハケで仕上げている。48は頸部から短く屈曲する口縁をもつ。端部の拡張は顕著ではない。

甕 2つのタイプに分けられる。52は口縁端部をつまみあげる甕Aの大型のものである。外面はタタキ成形の後に、ハケで仕上げている。51・53~54は口縁部をくの字形に折り曲げただけの甕Cである。大型と小型の2種類がある。54は大型のもので外面を縦方向のハケで仕上げ、内面をヘラケズリする。53も大型のものであるが、内面は斜め方向のハケによって仕上げられている。

底部 56は壺の底部である。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は幅の広い横方向のヘラミガキで仕上げている。

台付鉢 50は鉢部の破片である。本来はこの下に脚部がつく。口縁部は短く外側にゆるやかに折り曲げる。

鉢 59は口縁を水平に外側に折り曲げたものである(鉢B)。外面は縦方向のハケによって仕上げる。

高杯 58は口縁部が開き気味に立ち上がり、端部が拡張された高杯Aである。屈曲部に2条の凹線文を施す。

脚部 57は端部を拡張したものである。外面は縦方向のヘラミガキで仕上げ、内面下半部は横方向のヘラケズリで仕上げる。杯部の底は円盤充填する。

器台 56は凹線によって飾られたものである。下部は縦方向のハケで仕上げられる。

これらの土器は一括性はないが、中期のものである。

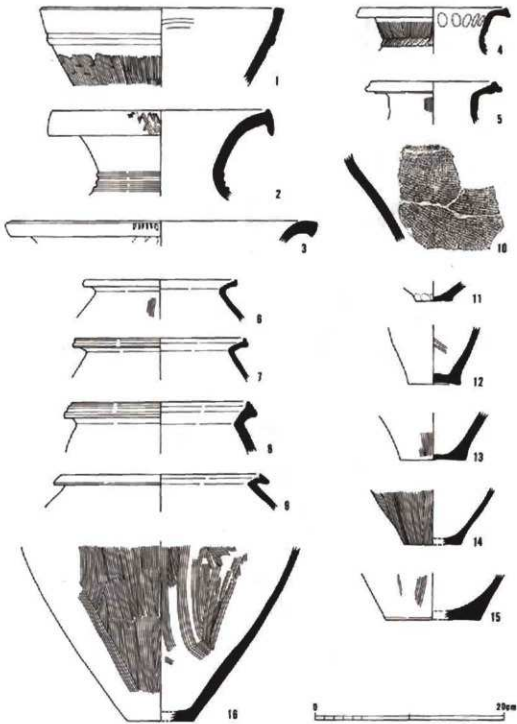
2. 中世の土器(第17図)

小量であるが中世の土器が出土している。60と63が柱穴28、61が柱穴46、62が柱穴62からの出土である。器種は須恵器椀と土師器小皿だけである。

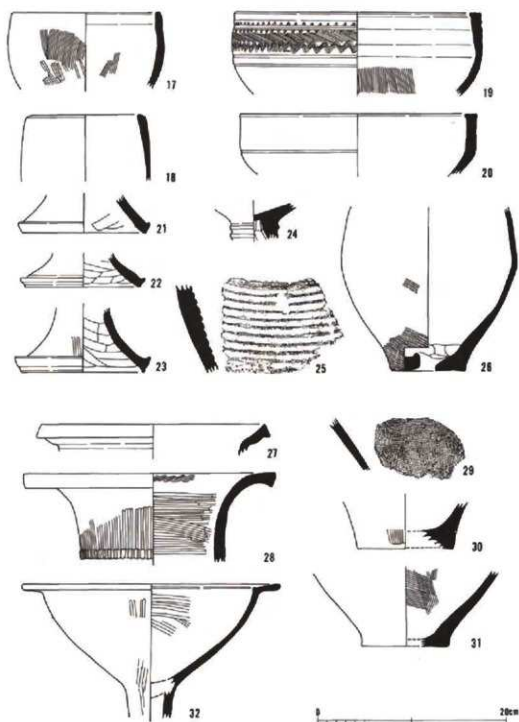
土師器小皿 60はヨコナデで仕上げられた口縁部の破片である。61は底部に回転糸切り痕が残る、ほかはヨコナデで仕上げられている。

須恵器椀 63はクロロ目を残すものである。62は重ね焼きの痕跡が残る。

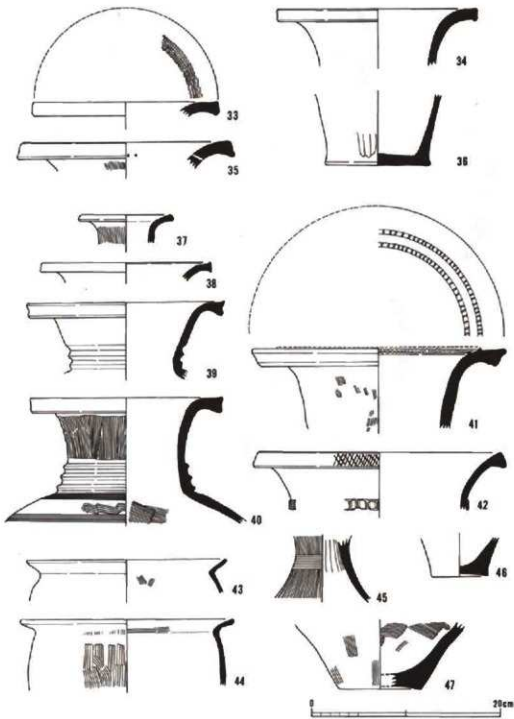
これらの土器は、いずれも小破片であり、時期を限定することは困難である。ただ須恵器は東播系のものであるので、おおよそ平安時代末期から鎌倉時代初頭の中におさまるものと考えてよいだろう。



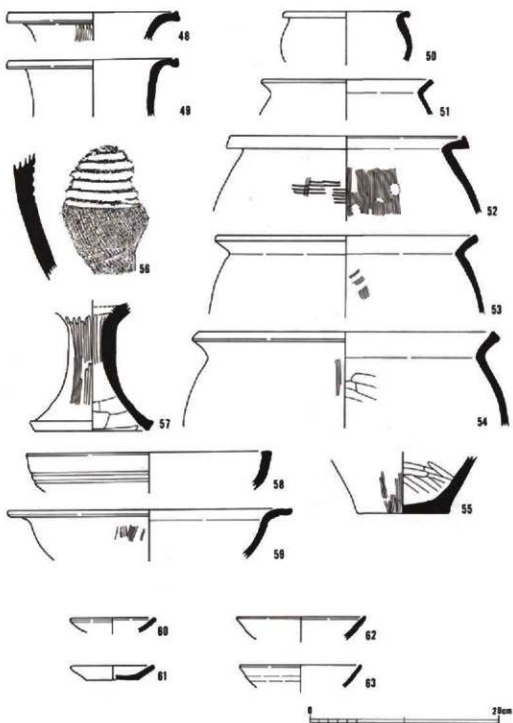
第14図 1号~3号住居跡出土弥生土器



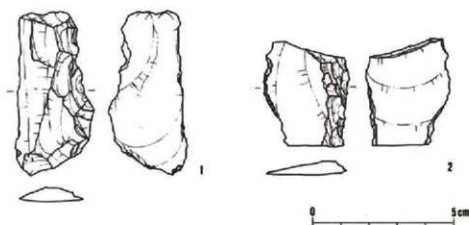
第15图 1号~3号住居跡・土坑10出土弥生土器



第16図 土坑1、7・柱穴・溝1出土弥生土器



第17回 包含層出土の弥生土器・中世の土器



第18図 石器

第2節 石器（第18図・図版58）

弥生時代中期の遺構からは多くのサヌカイトの剥片が出土しているが、製品と考えられるものは2点だけである。また、磨製の石器は1点も出土していない。

1は包含層から出土したサヌカイト製の削器である。横長剥片を素材とし、背面側打面部に粗い二次加工を施す。末端部は直線的な鋭いエッジがあり、連続した微細剝離痕が背面側全体に認められる。これによりエッジは丸みをもっている。

2は1号住居跡の中央土坑から出土したサヌカイト製の削器である。縦長剥片を素材とし、主に背面側右側縁に二次加工を施し、鋸歯状の刃部を作り出している。打面側と末端側は折損しているが、これは二次加工よりも新しい。素材の背面には横方向からの平坦な剝離面が1面大きく残されている。

この他に石材としては土坑19・20から凝灰質砂岩の角礫と軽石の円礫が出土している。いずれも遺跡の近辺には存在しない石材である。また2号住居跡の柱穴内からも凝灰質砂岩が出土しているが、これは3面が平らに整形されている。いずれの石材も用途は不明であるが、凝灰質砂岩は六甲山系から、また軽石は海岸付近からそれぞれ持ち込まれたものであろう。

第5章 遺構と遺物の検討

第1節 遺構について

1. 遺跡内の微地形と遺構の位置

遺跡内の微地形を復元するために、2cm間隔で等高線を入れて作成したのが第20図である。この図から遺跡内の地盤が北から南へと傾斜していることがわかる。この地形と遺構の位置であるが、1号～3号の住居跡は遺跡内でも最も高い部分に位置している。水はけを考えると、この位置がもっとも住居を営むのに適しているので、同じ位置で何度も繰り返し住居を立てたのであろう。ただし、4号住居跡は最も低い位置にある。

また、掘立柱建物は高いところから低い所まで位置し、ことに弥生時代のものであると推定できる2号・3号は相対的に低い位置に建てられている。そこからは占地に意図がよみとれない。これは、建物が水はけを考慮しなくても良い構造、すなわち高床式の建物であったからではないだろうか。

土坑については、住居跡よりも相対的に低い位置にあることが読み取れるが、密集するものは比較的平坦な標高32.10mから32.30mのあたりまでである。

溝については溝1が等高線と並行して掘られているのが読み取れる。これは、この溝が排水を目的としたものではないことを示しているであろう。

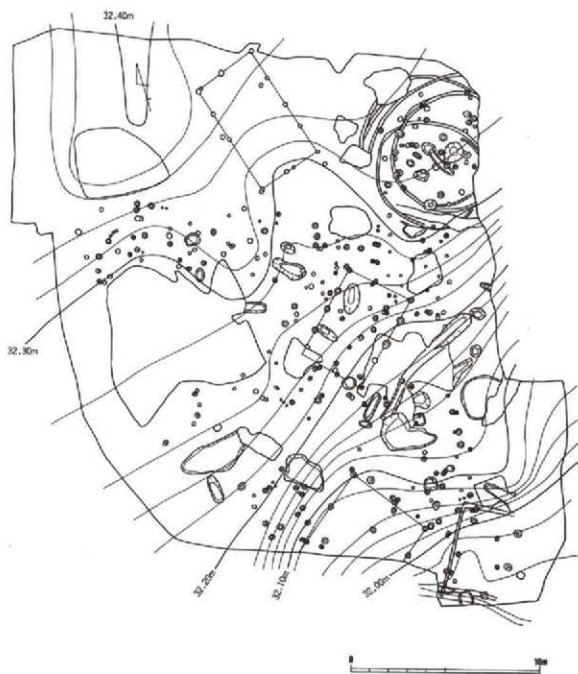
32

2. 竪穴式住居跡について

4軒の竪穴式住居跡のうち、2号・3号住居跡の2軒で円形の深い土坑と楕円形の浅い土坑とが組み合わさった中央土坑が検出されている。このような構造をもった中央土坑は播磨・丹波・北摂地方の弥生時代中期後半から終末期までの住居跡で類例が知られている。

ふたつの土坑のうち、円形の深い土坑には炭をほとんど含まず焼けた痕跡がなく、楕円形の浅い土坑の方には炭がつまり焼け面があるというのが一般的である。南大山地点の場合もこの例に従う。これらの土坑の用途であるが、円形の方は火を使用した痕跡が無いためである可能性は低い。一方、楕円形の方は炭・焼け面という顕著な火の使用が見られることから、こちらは炉である可能性が高い。

玉津田中遺跡の場合をろてみると弥生時代中期中葉の住居跡では、単独の中央土坑の最下層に炭がはいり、弥生時代後期になると、炭がつまった単独の小型の円形土坑を土手で囲むものが一般的になる。このような変化の中で考えてみると、機能分化した二つの土坑の出現は、弥生時代中期から後期にかけての煮沸形態の変化に対応すると捉えることができよう。



第19図 遺跡内の微地形

第2節 遺物について

弥生時代中期の土器の検討

ここでは、弥生時代中期の土器について若干検討を加えてみることにする。まず出土している器種であるが、壺が6種類（A1・A2・A3・A4・A5・B）、甕が3種類（A・B・C）、鉢が2種類（A・B）、高杯が2種類（A・B）、台付鉢が1種類、器台が1種類、マダコ壺が1種類である。貯蔵・煮沸・供膳・生産の各器種を網羅している。

まず、これらの土器の時期について遺構ごとにさらに詳しく検討をくわえてみる。これまで、南大山地の土器は弥生時代中期（畿内第Ⅱ様式～第Ⅳ様式並行）のものと記述してきたが細かく見ればかなりの時期幅を持つ。そこで、ここでは今里幾次の編年を基礎にして、その相対的な年代について検討することにする。

今里は弥生時代中期の土器を1～5の5時期に細分している（今里1969）。南大山地で出土している土器は、このうち中期中葉以降（中期3～5）に相当するものである。

ただし、西播磨地方では山本三郎が太子町川島遺跡の資料をもとに、今里編年の中期4・5の時期を更に細分しており（山本1971）、この時期に相当するものについては、これを比較材料として用いることにする。川島遺跡の資料は中期4・中期5（古）・中期5（新）の3段階に分けられている。

住居跡出土土器群 壺A1が頸部を凹線文で飾り、甕が甕Aを主体とすること、器台が出現していることから凹線文の使用が本格化する川島中期5（新）（畿内第Ⅳ様式並行）の段階に相当する。

土坑10出土土器群 高杯が古い形態をもつことから、今里幾次の言う中期3（畿内第Ⅲ様式古段階並行）の段階のものである。

溝1出土土器群 壺A3の頸部が断面三角形突帯で飾られること、壺A3のように口縁部内面を刻み目突帯で飾るものがあること、また甕Cが主体をなすことから今里幾次の言う中期3（畿内第Ⅲ様式古段階並行）の段階に相当する。

包食層出土土器 甕がAとCを含み、鉢に古手のものが見られることから、中期3～5の資料が混在するようである。

このように、中期3と中期5の資料があり、これを順に並べるならば土坑10・溝1→住居跡の順になる。畿内における第Ⅲ様式古段階から第Ⅳ様式に並行する時期のものであるが、第Ⅲ様式新段階並行の土器は欠落している。

次に器種ごとに他の遺跡の資料と比較して、その地域的な特色を抽出してみる。

壺 壺A1は播磨・摂津に通用のものであるが、南大山地のものは中期3～5に至るまで一貫して口縁端部の拡張が顕著ではない。これは、中期4以降の段階で口縁端部を拡張し凹線文を施

す西播磨地域とはおおきく異なる。これは東播磨地方の地域性である。

壺A2は、口縁端部を拡張するものの、西播磨の中期5のもののように凹線文は施さず飾り波の波状文を施す。類例は加古川市東中遺跡で見られることから、東播磨の特徴と考えてよいであろう。

壺A3のように口縁部内面を刻み目突帯で飾るものは播磨全域で見られる。ただし、川島遺跡中期4・5、大垣内遺跡のものは口縁端部を上下に拡張し端面に幅の狭い凹線文を施すものであり、南大山地点のものはこの点が異なる。口縁端部の拡張が顕著でないというのは、当遺跡周辺の地域性であろう。

壺A4も播磨・摂津に通用のものである。しかし川島遺跡のものは口縁端部を上下に拡張し凹線文をほどこす。摂津のものも口縁端面を凹線文もしくは細波状文で飾る。南大山地点のように口縁端部の拡張・端面への施文を行わないのは、明石川流域の地域性なのであろう。

壺Bは播磨から畿内全域にみられるものである。1点のみの出土であるのではっきりしたことは言えないが、頸部と口縁部の間の屈曲が小さいのが特徴と言える。

以上が壺の概要であるが、南大山地点出土土器の特徴を一言で言えば、壺Aにおいて口縁端部の拡張・凹線文の施文をおこなわないということである。

甕 甕Aは播磨から紀伊および畿内全域さらには吉備地方にまで及ぶ広域において畿内第IV様式並行期以降顕著に見られるものである。甕Bは類例が少ないが、瀬戸内系のものであろう。甕Cは土坑10の甕の主体をなすものであるが、甕Aよりも古い形態であると言えるだろう。

甕に関しては、器形的には播磨の一般的特徴を備えていると言えるだろう。

鉢・台付鉢 鉢類は出土点数が少ないので傾向を捉えることが難しいが、当該時期に通用のものである。

高杯 高杯Aは凹線の他に波状文を施すものもあり、畿内のもより装飾が豊かである。高杯Bは一般的には口縁端部を下方に垂下させるものであるが、南大山のものは端部をまるく収めるという古い特徴をとどめている。

器台 凹線文を多条に重ねて飾る中部瀬戸内から畿内で通用のものである。

マダコ壺 中期後半のものとしては類例が少ないが、中期中葉のもの形態的特徴を受け継ぐものである。ただ、成形にタタキを用いる点が新しい要素である。

以上のように、南大山地点出土の土器は概ね播磨地域の当該期のものの特徴をよく兼ね備えているといえる。ただし、壺Aにおいて口縁端部を拡張せず施文しないという点が、凹線文を多様する西播磨地域と大きく異なる点である。このような特徴は加古川流域・明石川流域の土器に顕著に見られる特徴であり、この地域の地域性であると言える。

南大山地点の土器は点数が少なく、器種も全てを網羅しているわけではないので、資料に偏りがあるが、概ね以上のようなことが言えるだろう。

第6章 まとめ

最後に玉津田中遺跡南大地点が、播磨、特に明石川流域の弥生時代の遺跡のなかで、どの様な意味をもつか、その位置づけを行い、まとめとしておく。

1. 玉津田中遺跡における集落の移動

玉津田中遺跡南大地点は明石川中流域の段丘上に位置した弥生時代中期後半を中心とする集落遺跡である。調査した範囲はわずかであり、遺跡の一部分にすぎないが、本来はさらに規模の大きな集落であったと推定できる。それは、国道175号線を隔てて、同じ段丘上に位置する居住・小山遺跡で、同時期の住居跡を検出しているからである。国道によって分断され、別の遺跡として登録されているが、一連の遺跡と考えられる。

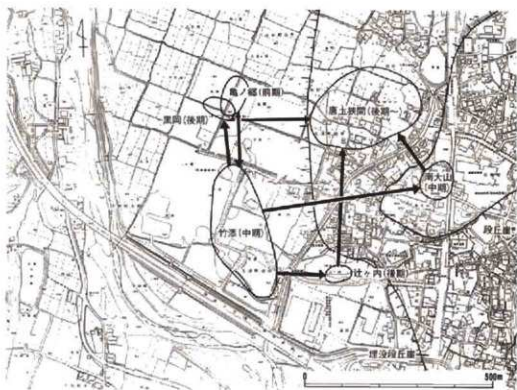
南大地点は弥生時代中期の限られた時期の集落であるが、この集落の母体となったのは、南大地点と居住・小山が乗る段丘の西側の玉津田中遺跡である。ここは弥生時代前期から後期、さらには古墳時代まで続く明石川中流域の拠点的な集落であることが判明している。しかし、調査の結果、各時期の集落は同じ地点にあるのではなく、場所を移動している。それをまとめたのが第20図である。

弥生時代前期、最初の集落は遺跡の北西の旧河道に沿って形成された黒岡・亀ノ郷地区の自然堤防状の微高地の上に営まれる。しかし、川による浸食と集落規模の拡大によって、この微高地を放棄し、弥生時代中期中頃には遺跡南中央の竹添地区の中洲状の微高地に集落を移動する。しかし、この微高地も幾度か洪水に見舞われる。その中でも規模の大きいのは、中期後半（第Ⅲ様式新段階）の洪水であり、この砂によって集落は壊滅する。人々が再び姿をみせるのは、弥生時代後期になってからであり、遺跡北東の唐土・狭間地区の低位段丘上に集落を営み、この集落はその後古墳時代後期まで継続してゆく。

このような玉津田中遺跡の低地部の集落と段丘上の南大地点の集落はどのような関係にあるのだろうか。そこで、明石川の流域における弥生時代の集落の消長をみて、玉津田中遺跡の沖積地部の集落の解体と段丘上での南大地点の出現について、もう少し検討を加えてみることにする。

2. 明石川流域における弥生時代遺跡の消長

明石川流域における集落の消長をみると、中期後半（第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式並行）に、突如として丘上に集落が出現する。これらの集落は後期まで続くことなく、極めて短時間でその活動を終えている。これらの遺跡の中には高地性集落と呼ぶべきものも含まれている。それぞ



第20図 玉津田中遺跡における集落の移動

れの遺跡は、明石川・榎谷川・伊川流域の拠点的な集落から派生したものである。その母村は明石川中流地域では玉津田中遺跡、明石川上流域では常本遺跡、伊川流域では南別府遺跡であると推定されている。ただし、榎谷川流域ではまだこのような集落が知られていないので、距離的に近い玉津田中遺跡がこれにあたると考えるのが現時点では妥当である。

中期後半におけるこのような動向が、いわゆる高地性集落の出現の要因とされている「倭国大乱」によるものか、洪水などの自然災害によるものかは判断つきかねるが、弥生時代後期における集落の再編成につながるものであることは確かである。弥生時代後期には明石川下流で吉田南遺跡、明石川上流で養田遺跡・大畑遺跡、伊川流域では池上北遺跡などのような集落が既存の拠点的な集落とは別に現れるのである。

南大山地点も弥生時代中期後半のこのような動向の一環として考えることが可能である。すなわち、玉津田中遺跡の沖積地の集落の壊滅の後に、この集落に住む人々のあるものは南大山地点の段丘上にあがり、またあるものは榎谷川流域にまで進出し、西神ニュータウン第65地点のような丘上を開発してそこに居住したのである。そして、各小集落に分散していた人々は旧居住地の安定を見定めて、再び山を下り、あるいは新たな居住地を開発し、またある者は昔の集落のうちの地形的に安定した部分を選び居住したのである。

弥生時代中期から後期、さらには古墳時代へと続いてゆく大きな時代の画期、すなわちより広域な集落間の結合と覇権の争い、そして大和を中心とした畿内政権の成立という時代の動向の中で、その端緒となった集落再編の過程が、玉津田中遺跡の例のようにその一端を自然災害にもとめることができるという可能性が、南大山地帯の発掘結果から読み取れるのである。

参考文献一覧

- 明石市教育委員会 1985 『明石市史資料(考古編)第4集』
- 赤松啓介 1973 「神戸市東水区青谷遺跡出土の石戈(一)」『考古学雑誌』59-3
- 今里幾次 1969 「播磨弥生式土器の動態(一)」『考古学研究』15-4
1969 「播磨弥生式土器の動態(二)」『考古学研究』16-1
- 加古川市教育委員会 1968 「播磨・東播磨遺跡Ⅰ」
1969 「播磨・東播磨遺跡Ⅱ」
1981 「東中遺跡発掘調査報告書」
- 喜谷美宣 1982 「弥生時代の東播磨」『考古学論考』
- 神戸市教育委員会 1972a 「西神ニュータウン内の遺跡 中間報告Ⅰ」
1972b 「豊田遺跡調査概要」
1976 「元住吉山遺跡発掘調査概要」
1977 「新方遺跡発掘調査概要」
1983 「昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報」
1984a 「昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報」
1984b 「新方遺跡発掘調査概要」
1986 「昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報」
1987 「昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報」
1988 「昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報」
1989 「昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報」
1990 「神戸市文化財分布図(西区)」
- 神戸新聞社会部編 1959 「祖先のあしあとⅡ」
- 直良信夫・小林行雄 1932 「播磨吉田史前遺跡の研究」『考古学』3-5
- 中村善則・喜谷美宣 1977 「豊田中の他遺跡」『日本考古学年報』28
- 兵庫県教育委員会 1971 「新方遺跡」
1984 「玉津田中遺跡発掘調査概報Ⅰ」
1988 「芝崎遺跡」
1991 「大垣内遺跡」
1992 「下大谷古墳群・印路古墳群C・印路台状墓」
- 山本三郎 1971 「播磨中期弥生式土器の実態」『川島・立岡遺跡』太子町教育委員会

圖 版

淨谷遺跡

浄谷遺跡



調査前状況



確認調査重機掘削



確認調査面検出

浄谷遺跡

図版2 A地区全景



全景



土壇群とSD1



同上



SK 8



SK 16



SK 20



SK 21

淨谷遺跡

圖版 4
A地区土壇(2)



SK 5



SK 11



SK 30



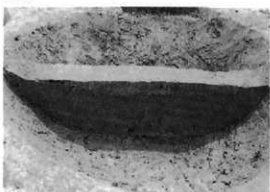
SK 15



SK 29



SK 58



SK 62



SK 8

浄谷遺跡

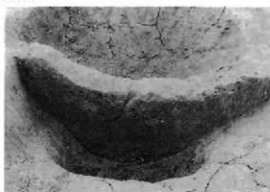
図版 5
A地区土壌(3)



SK 16



SK 35



SK 67



SK 70



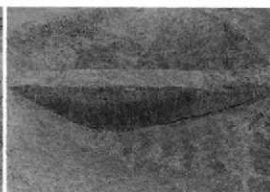
SK 72



SK 74



SK 82



SK 43

淨谷遺跡

図版 6

A地区土坑(4)・溝



SK 45



SK 46



SK 73



SK 79



SD 1 遺物出土状況



SD 1



SD 3



SK 3

淨谷遺跡

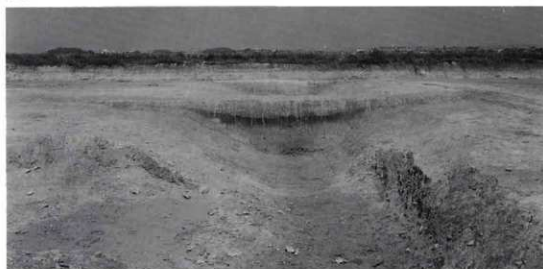
図版7 B地区全景・溝



全景



SD1



SD1 断面

淨谷遺跡

図版 8
日地区土塚



土塚群



SK 1



SK 1



SK 2

浄谷遺跡

図版9 C地区全景・近景



全景（北から）



4-10区

浄谷遺跡

図版10
C地区近景



1~4区



8~12区



図版11 C地区4・6区全景・柱穴

4・6区の遺構



P3 (SB2)



P5 (SB2)



P4 (SB2)



P7 (SB3)

淨谷遺跡

図版12
C地区3・4区上層



SK 6



SK 16



SK 10 検出状況



SK 10 断面

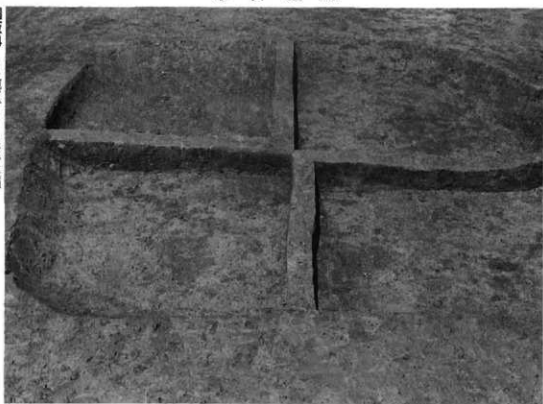


SK 10 完備状況

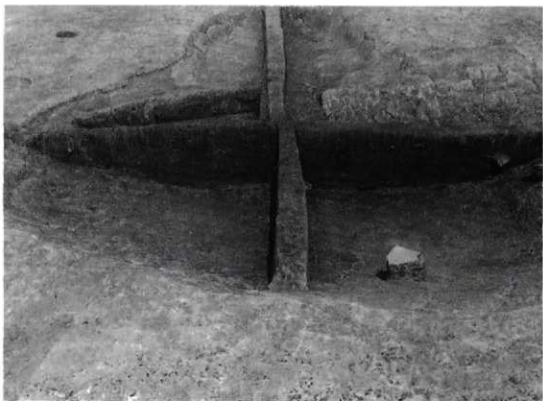
浄谷遺跡

図版
14

C地区4・6区土壌



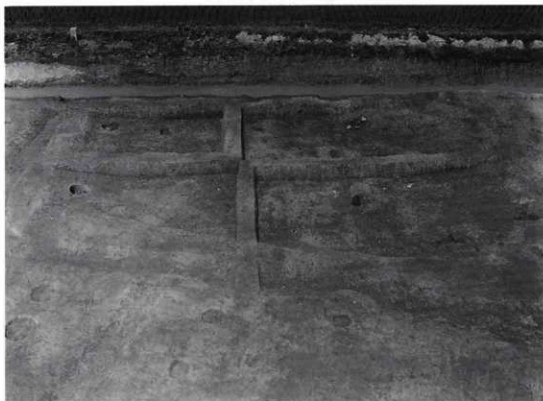
SK 12



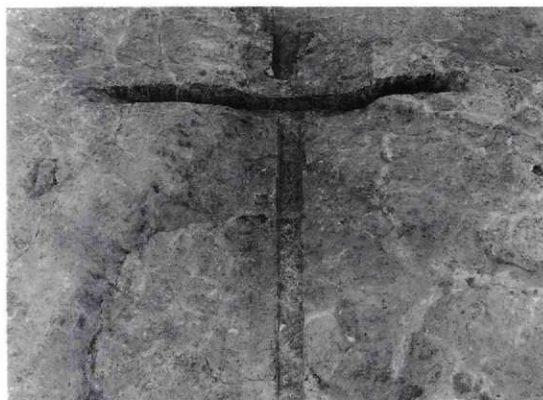
SK 14・15

浄谷遺跡

図版15
C地区4・6区土壇・炉址



SK17 (南から)



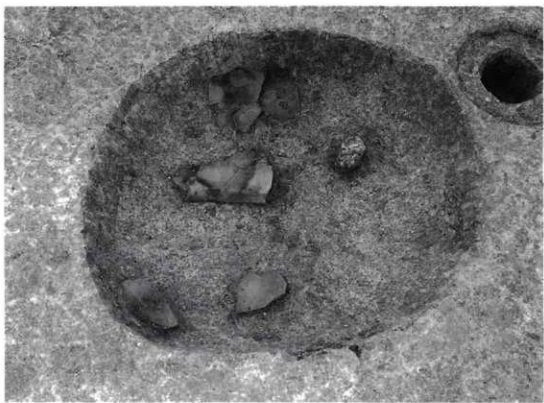
炉址1 (南から)

淨谷遺跡

圖版 16
C 地区 7 区全景・土壇



SB 4



SK 22

浄谷遺跡

図版17 C地区8区全景・土城(1)



8区周辺



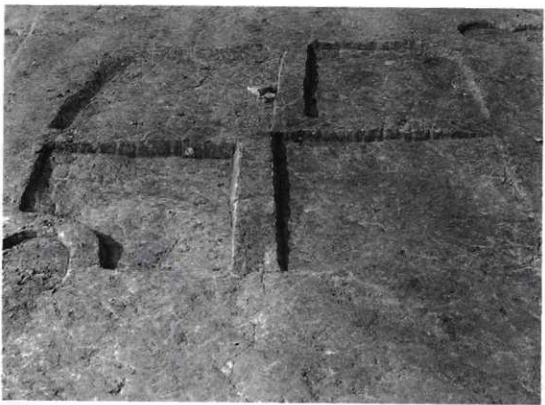
SK 25・26 (南から)

浄谷遺跡

図版
18
C地区8区土壇(2)



SK 25



SK 26

淨谷遺跡

図版19
C地区10区建物



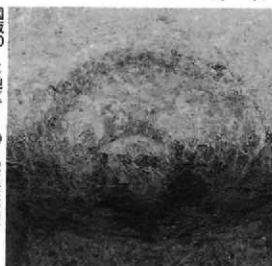
SB6



SB7

淨谷遺跡

圖版 20
C 地区 7・10・12 区 柱穴群



P 3 (SB 2)



P 9 (SB 3)



P 22 (SB 6)



P 23 (SB 6)



P 24



P 25



12区 柱穴群 SD28周辺



12区 柱穴群 P24・P25周辺

浄谷遺跡

図版22
C地区土壌・調査風景



SK 27 (南から)



作業風景

浄谷遺跡

図版24 A地区出土遺物



8



11



13



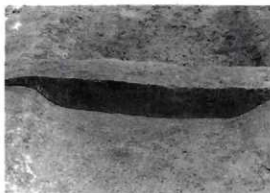
9

浄谷遺跡

図版23
C地区道路道構



道路（南から）



SD1（南から）



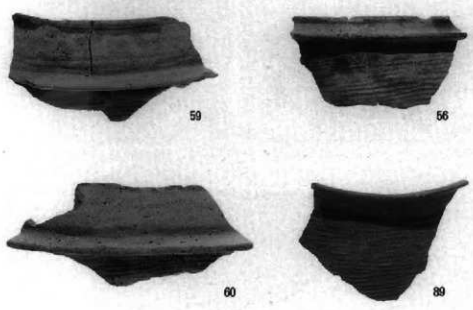
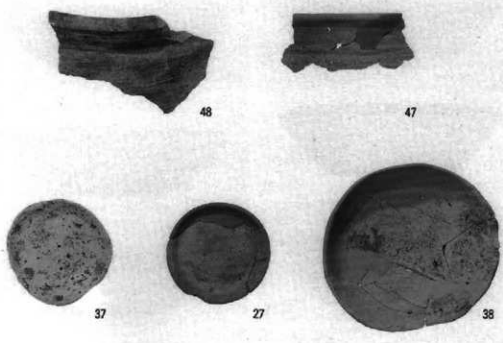
SD2 断面（南から）

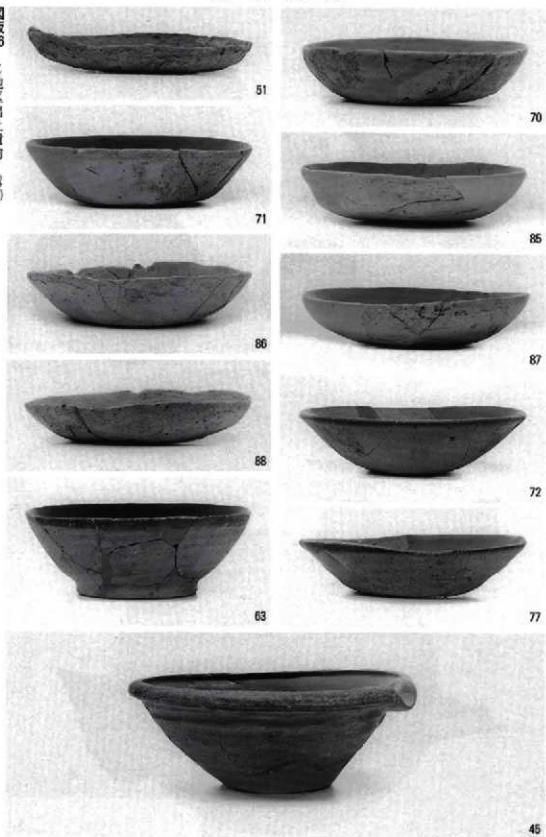


SD1（南から）



SD2 断面（南から）





浄谷遺跡

図版27
C地区出土遺物
土城(1)



淨谷遺跡

圖版 28
C 地区出土遺物 土塚(2)



92



80



62



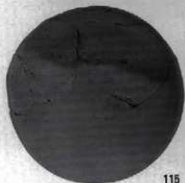
81



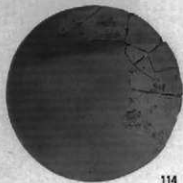
113



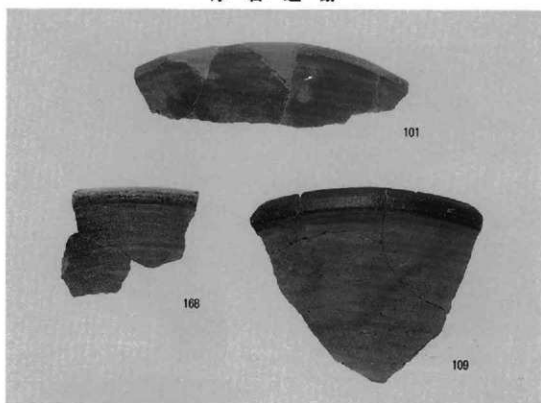
125



115

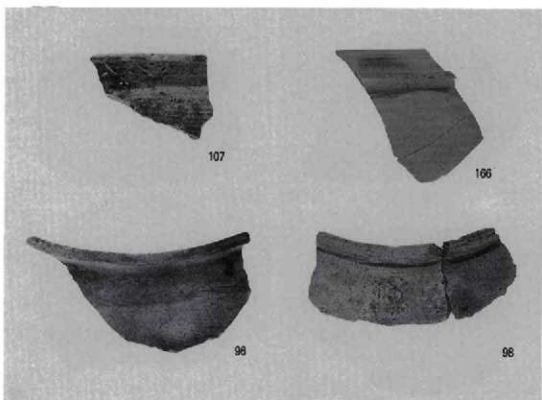
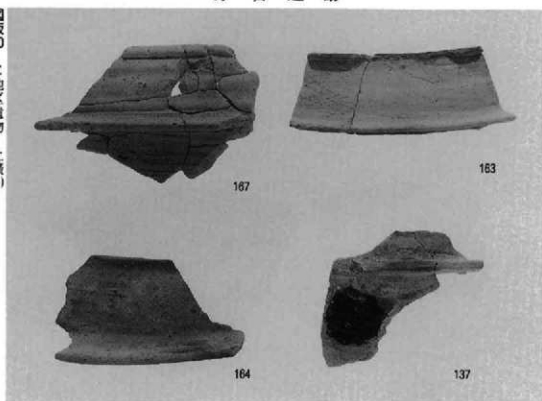


114



淨谷遺跡

圖版30
C地区遺物
土城(4)



浄谷遺跡

図版 31 C地区出土遺物 包含層(1)



174



175



176



201



193



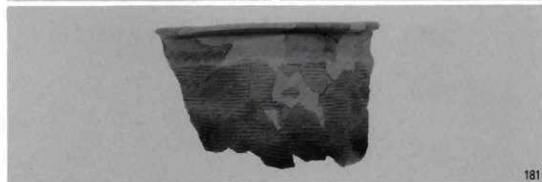
194



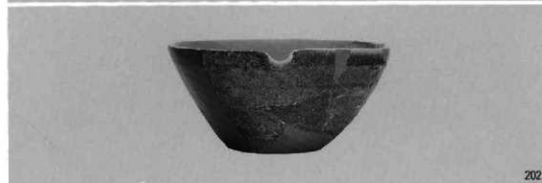
196



199



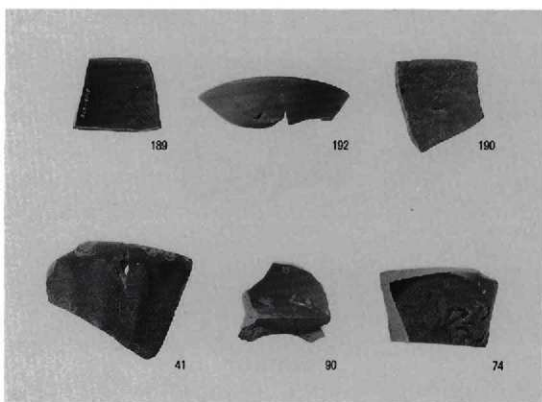
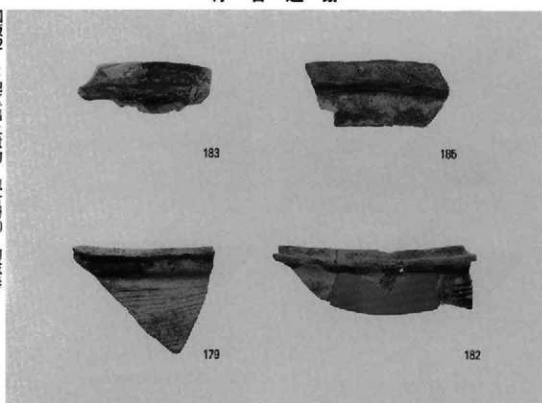
181



202

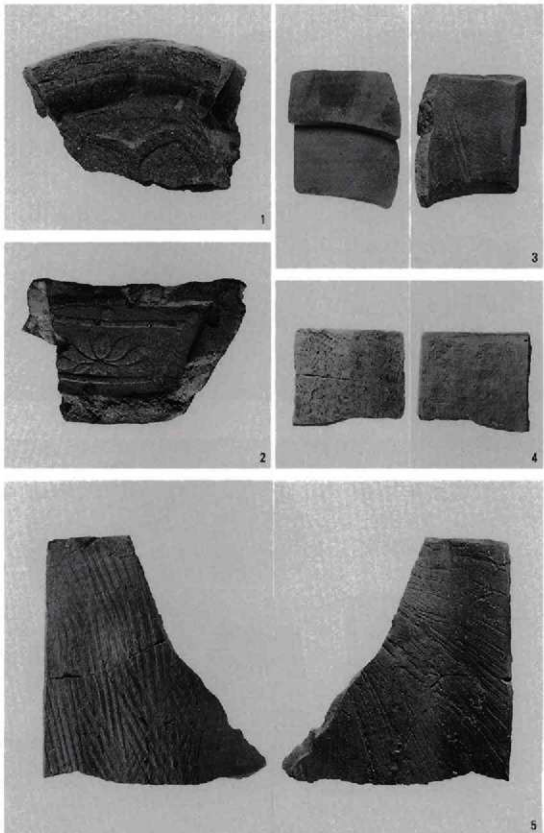
淨谷遺跡

圖版 32
C 地区出土遺物
包含層②・陶磁器



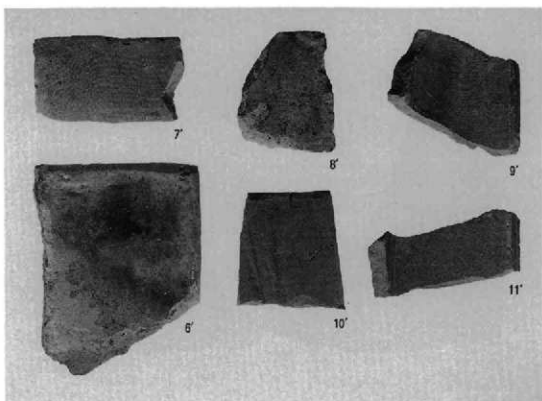
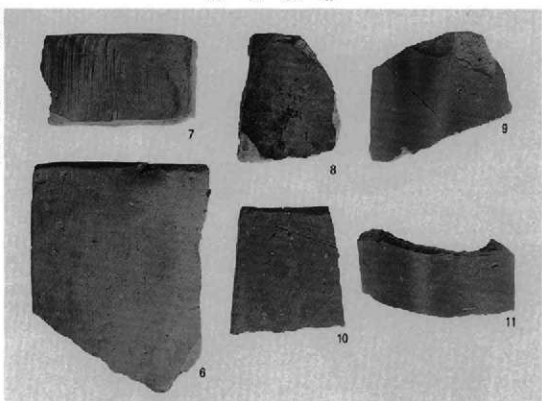
浄谷遺跡

図版 33
出土遺物 瓦 (1)



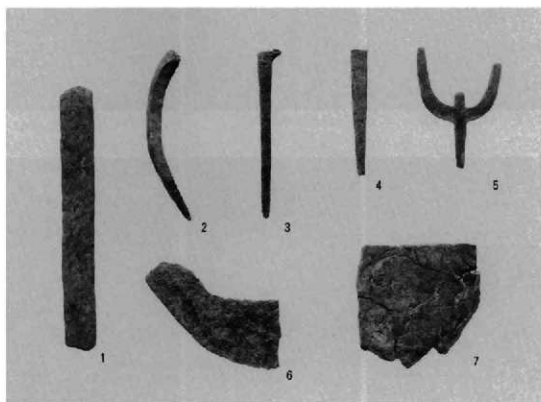
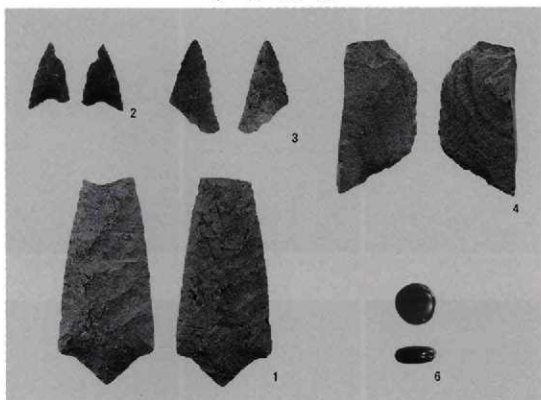
淨谷遺跡

圖版 34
出土遺物
瓦(2)



淨谷遺跡

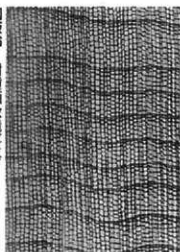
圖版 35
出土遺物
石器・鉄器



浄谷遺跡

図版
36

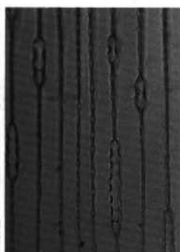
樹種顕微鏡写真



1. コウヤマキ(1)木口 ×30



2. コウヤマキ(1)柀目 ×150



3. コウヤマキ(1)板目 ×150



4. ヒノキ(2)木口 ×30



5. ヒノキ(2)柀目 ×75



6. ヒノキ(2)板目 ×75



7. タブノキ(3)木口 ×30



8. タブノキ(3)柀目 ×75



9. タブノキ(3)板目 ×75

南山古墳群



南山古墳群

図版 37
全景



調査区全景（北から）

南山古墳群

図版38
全景



A地区全景



調査区遠景（南から）

南山古墳群

図版39
A地区1号墳



1号墳調査前



1号墳（東から）



1号墳（南から）

南山古墳群

図版
40
A地区2号墳



2号墳



2・3号墳（東から）

南山古墳群

図版 41
A地区 3号墳



2・3号墳



3号墳調査前



3号墳 (南から)

南山古墳群

図版
42
A地区3号墳



3号墳上土坑



土坑10



土坑6



土坑8



土坑12・13



土坑9

南山古墳群

図版
43
A地区4号墳



土坑5 (主体部)



4号墳



土坑5

南山古墳群

図版 44
A地区上坑2・土坑3・溝状遺構



(右上) 土坑2

(右中) 土坑3

(右下) 土坑2・3完開状況

下 溝状遺構



南山古墳群

図版
45
B地区
他



B地区 5号墳



A地区 土坑4



A地区 焼土坑1周辺



焼土坑1



A地区 土坑1



A地区 トレンチ



作業風景



A地区からB地区を臨む

南山古墳群

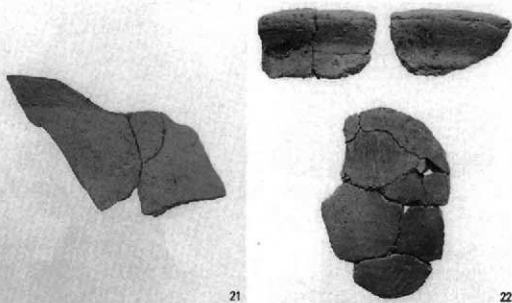
図版
46
遺物(1)





南山古墳群

圖版
48
遺物(3)



玉津田中遺跡
南大山地點

玉津田中遺跡

図版49
調査前の状況



調査前の南大山地点（北東から）



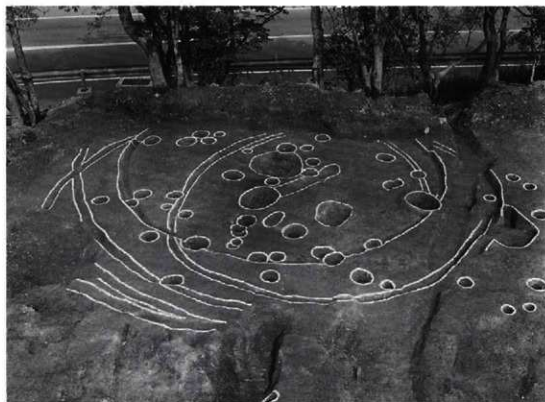
調査前の南大山地点（南から）

玉津田中遺跡

図版50
全景・竪穴住居跡



調査後全景（西から）



1号～3号住居跡（西から）



4号住居跡（西から）

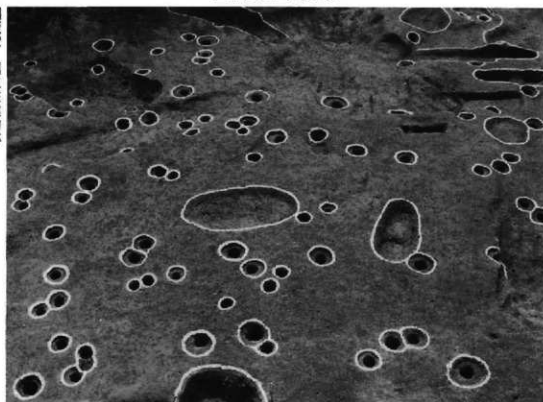


1号掘立柱建物跡（西から）

玉津田中遺跡

図版52

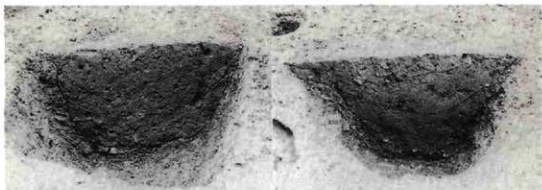
掘立柱建物跡



2号掘立柱建物跡（北西から）

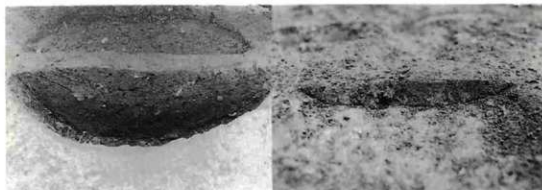


3号掘立柱建物跡（西から）



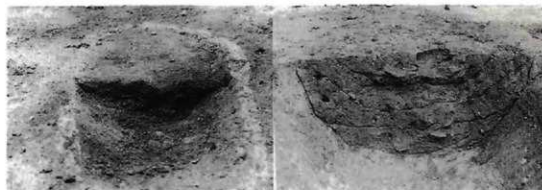
1号住居跡 中央土坑断面

3号住居跡 中央土坑断面



2号住居跡 中央土坑断面

3号住居跡 炭土坑断面



2号住居跡 炭土坑断面

溝1 断面



土坑1 断面

玉津田中遺跡

圖版54
出土遺物
弥生土器(1)



2



19



40



32

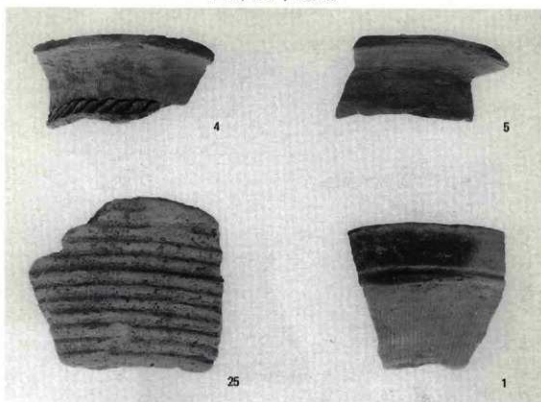


26

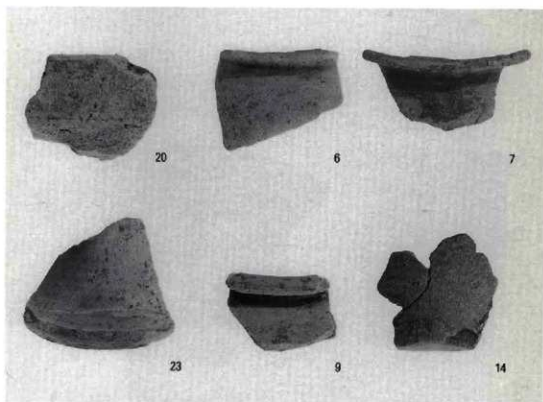


57





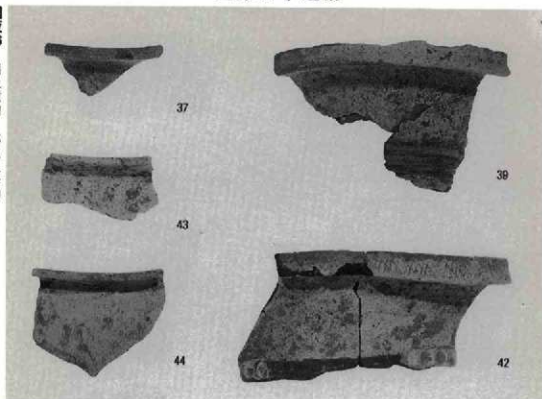
1号～3号住居跡出土弥生土器(甕・器台)



1号～3号住居跡出土弥生土器(高杯・甕)

玉津田中遺跡

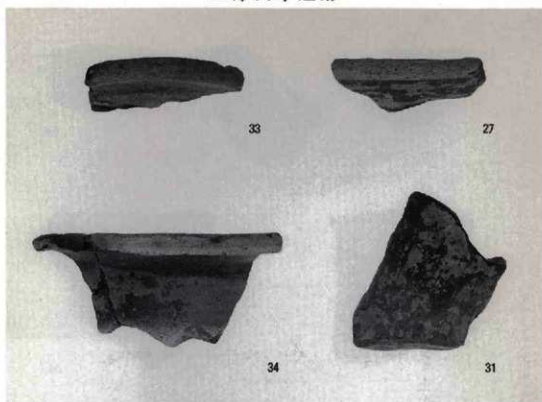
圖版 56
出土遺物
弥生土器(3)



溝1出土弥生土器(甗・甗)



溝1出土弥生土器(甗・高杯)



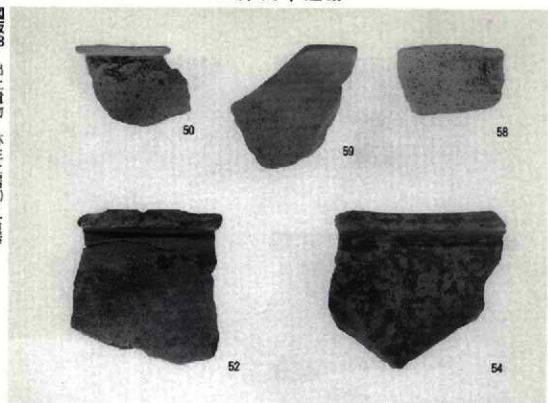
土坑1・10出土弥生土器



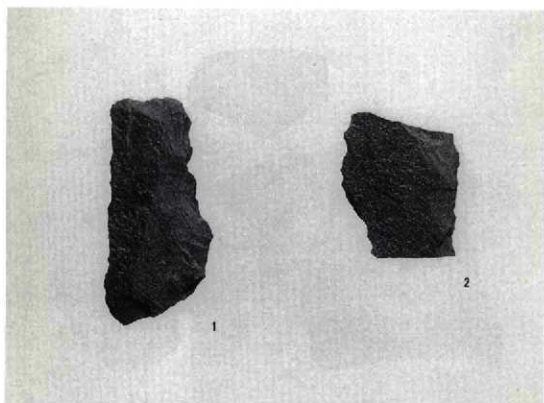
土坑10・包含層出土弥生土器

玉津田中遺跡

圖版 58
出土遺物
弥生土器(5)・石器



包含層出土弥生土器



石器

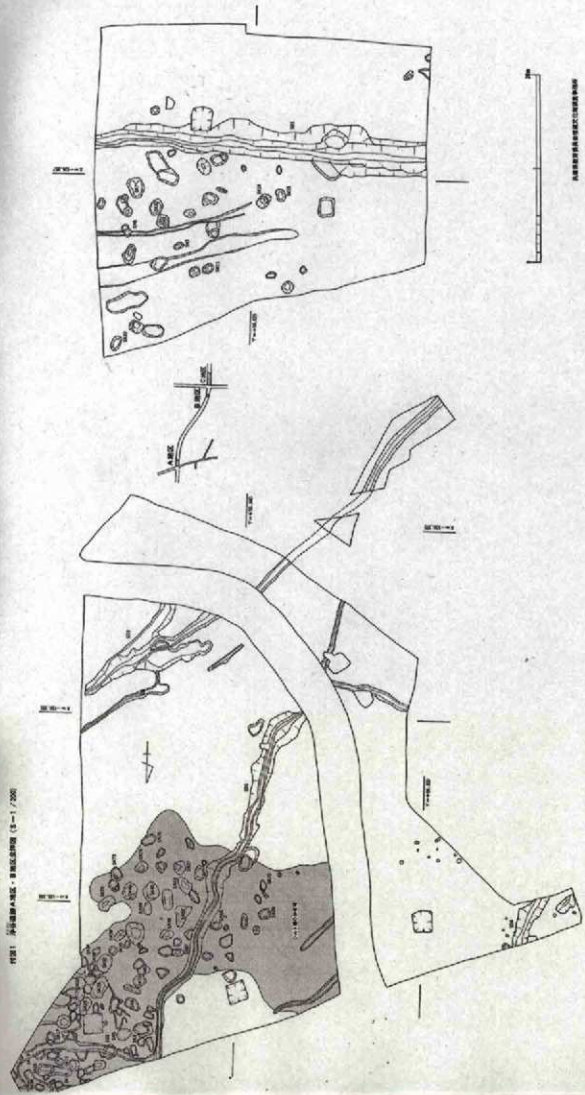
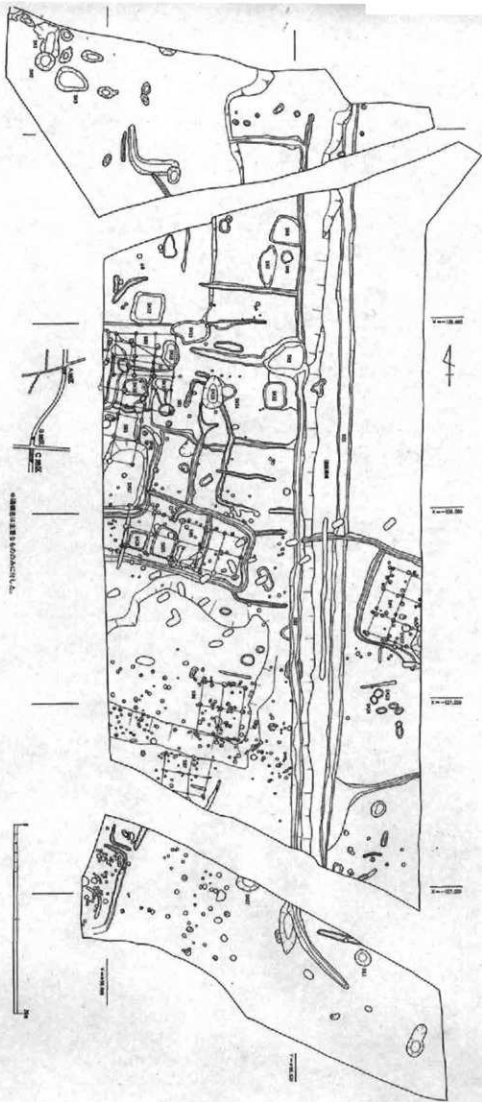


图1 遗址平面图 (1:1000)



兵庫県文化財調査報告 第121冊

— 一般国道175号線改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告 —

浄谷遺跡
南山古墳群
玉津田中遺跡南大山地

平成5年3月31日発行

発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1
TEL 078 (341) 7711

編集 兵庫県教育委員会
埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
TEL 078 (531) 7011

印刷 日本写真印刷株式会社
〒604 京都市中京区壬生花井町3
TEL 075 (811) 8111
